四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第三十一冊

国分寺下日名代遺跡

1999.3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第三十一冊

国分寺下日名代遺跡

1999.3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

序　　文

四国横断自動車道は，高松～善通寺間が平成４年５月に開通しました。これにより，瀬戸大橋と香川県内の高速道路が直結することになり，香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では，四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い，昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，用地内の埋蔵文化財の発掘調査業務を行ってまいりました。３年６ヶ月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し，平成３年９月に発掘調査を終了いたしました。また，平成３年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土品の整理業務を順次行い，平成４年度からは調査報告書を刊行いたしております。

このたび「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十一冊」として刊行いたしますのは，綾歌郡国分寺町福家字日名代に所在する国分寺下日名代遺跡についてであります。この遺跡の調査では，弥生時代中期から近世までの多くの遺構・遺物が出土しておりますが，中でも集落周辺部の土地利用の変遷をたどることができるという貴重な成果をあげることができました。

本報告書が，香川県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後となりましたが，発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間，日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申しあげます。

平成11年３月

香川県教育委員会

教育長　金　森　越　哉

例　　言

1．本報告書は，四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第三十一冊で，香川県綾歌郡国分寺町福家字日名代に所在する国分寺下日名代遺跡（こくぶんじしもひなだいいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会が日本道路公団から委託され，香川県教育委員会を調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施された。

3．発掘調査の期間及び担当は以下の通りである。

予備調査　期間　平成元年6月13～22日
　　担当　植松邦浩，渡邊茂智，古野徳久
　　森下英治，谷澤幸司，大西二美子
本調査　期間　平成元年8月19日～平成2年2月28日
　　担当　渡邊茂智，古野徳久，大西二美子

4．調査にあたって，下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

香川県土木部横断道対策室，同坂出土木事務所横断道対策課，国分寺町教育委員会，四国横断自動車道建設国分寺地区対策協議会，地元自治会

5．本報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
本報告書の執筆，編集は古野徳久が担当した。

6．本報告書で用いる方位の北は，国土座標系第Ⅳ系の北であり，標高はT.P.を基準としている。また，遺構は下記の略号により表示している。

SP ピット　SK 土坑　SX 不明遺構　SD 溝状遺構　SZ その他の遺構

7．石器実測図中の網目は磨滅痕を，輪郭線回りの点線は潰れ痕，実線は磨滅痕及び研磨痕をそれぞれ示す。また古い剝離面は白抜きで，現代の折損は剝離面を黒で塗っている。

8．挿図の一部に国土地理院地形図丸亀（1/25,000）及び国土基本図（1/5,000）を使用した。

9．土器観察表中の色調は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年版』を使用して表す。また残存率は口縁部の全周に占める割合であり，口縁部がかける場合は底部をもちい，それ以外は表示を省いた。

目　　次

序文

例言

第1章　調査の経緯

第1節　調査にいたる経過……1

第2節　調査の経過

1　調査の経過……5

2　発掘調査及び整理作業の体制……7

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境……9

第2節　歴史的環境……12

第3章　調査の成果

第1節　地形と土層序……16

第2節　遺構・遺物

1　ピット……26

2　土坑……26

3　性格不明遺構……27

4　溝……31

5　その他の遺構……41

6　包含層出土の遺物……41

第4章　自然科学調査の成果

第1節　国分寺下日名代遺跡におけるプラント・オパール分析……54

第5章　まとめ……63

挿図目次

第1図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～善通寺）……1
第2図　調査区割り図(1/1,500)……6
第3図　遺跡位置図(1)……9
第4図　遺跡位置図(2)(1/5,000)……10
第5図　周辺の遺跡(1/25,000)……13
第6図　調査域土層図作成位置図(1/1,500)……17
第7・8図　調査域土層図①—1・2（1/80）……18・19
第9・10図　調査域土層図②—1・2（1/80）……20・21
第11図　調査域土層図③(1/80)……22
第12図　調査域土層図④・⑤(1/80)……23
第13図　調査域土層図⑥・⑦(1/80)……24
第14図　SP 01～04断面図(1/30)，SP 01出土遺物実測図（1/4）……26
第15図　SK 01・02断面図(1/30)……26
第16図　SX 01・03断面図(1/30)……27
第17図　SX 02断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4）……27
第18図　SX 04断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/4）……28
第19図　SX 05～11断面図(1/30)……29
第20図　SD 01断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4，1/2）……30
第21図　SD 02断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4）……31
第22図　SD 03断面図(1/30)……31
第23図　SD 04断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4）……32
第24図　SD 05断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4，1/2）……33
第25図　SD 06断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4）……34
第26図　SD 07～11断面図(1/30)……34
第27図　SD 12断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4，1/2）……35
第28図　SD 13断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4）……36
第29図　SD 14・15・18断面図(1/30)，SD 18出土遺物実測図(1/2)……36
第30図　SD 19断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4，1/2）……37
第31図　SD 20・21・25・26断面図(1/30)……39
第32図　SD 24断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4，2/3）……39
第33図　SD 27断面図(1/30)，出土遺物実測図（1/4）……39
第34図　SD 28断面図(1/30)……39
第35図　SZ 01検出状況(1区II，1/20)……40
第36～39図　包含層出土遺物実測図(1)～(4)(1/4)……42～45
第40～44図　包含層出土遺物実測図(5)～(9)(1/2)……46～50
第45図　包含層出土遺物実測図(10)(1/4)……51
第46図　包含層出土遺物実測図(11)(1/4，1/2)……52
第47図　試料採取地点の土層断面図（S＝1/30）……54
第48図　イネのプラント・オパールの検出状況……56
第49・50図　おもな植物の推定生産量と変遷(1)・(2)……57・58
第51～53図　プラント・オパールの顕微鏡写真(1)～(3)……60～62
第54・55図　遺構変遷図(1)・(2)（1/1,500）……63・64

図版目次

図版1　国分寺下日名代遺跡ほぼ全景（西より）
図版2　1区掘削終了状況（俯瞰）
図版3　2区I・II掘削終了状況（俯瞰）
図版4　2区III掘削終了状況（俯瞰）
図版5　2区IV掘削終了状況（俯瞰）
図版6　3区I・III掘削終了状況（俯瞰）

図版７　３区Ⅴ掘削終了状況（俯瞰）
図版８　２区Ⅰ南西部近景
（SD 12・13除去後，北より）
SX 04調査風景（２区Ⅳ，北東より）
図版９　２区Ⅳ近景（北東より）
３区Ⅰ北部近景（南東より）
図版10　３区Ⅲ南半部近景（北西より）
３区Ⅳ近景（西より）
図版11　３区Ⅴ南半部近景（西より）
SD 01・02掘削終了（南西より）
図版12　SD 05・06掘削終了（北より）
SD 07杭列検出状況（北より）
図版13　SD 12・13掘削終了（南より）
SD 19掘削終了（北より）
図版14　SD 24掘削終了（南より）
SD 26・SK 01掘削終了（北西より）
図版15　SD 27掘削終了（南より）
動物の足跡検出状況(1)（１区Ⅰ）
図版16　動物の足跡検出状況(2)（１区Ⅱ）
動物の足跡検出状況(3)（２区Ⅲ，左上がSD 15）
図版17・18　出土土器
図版19～25　出土石器

表　目　次

第１～２表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要
(1)・(2) …… ３・４
第３表　遺構番号変更対照一覧 …… ６
第４表　遺跡一覧 ……14
第５表　プラント・オパール分析結果 ……55
第６～16表　土器観察表(1)～(11) ……66～76
第17・18表　石器等観察表(1)・(2) ……77・78

付　図　目　次

付図１　香川県国分寺下日名代遺跡遺構配置図（１/200）

第1章　調査の経緯

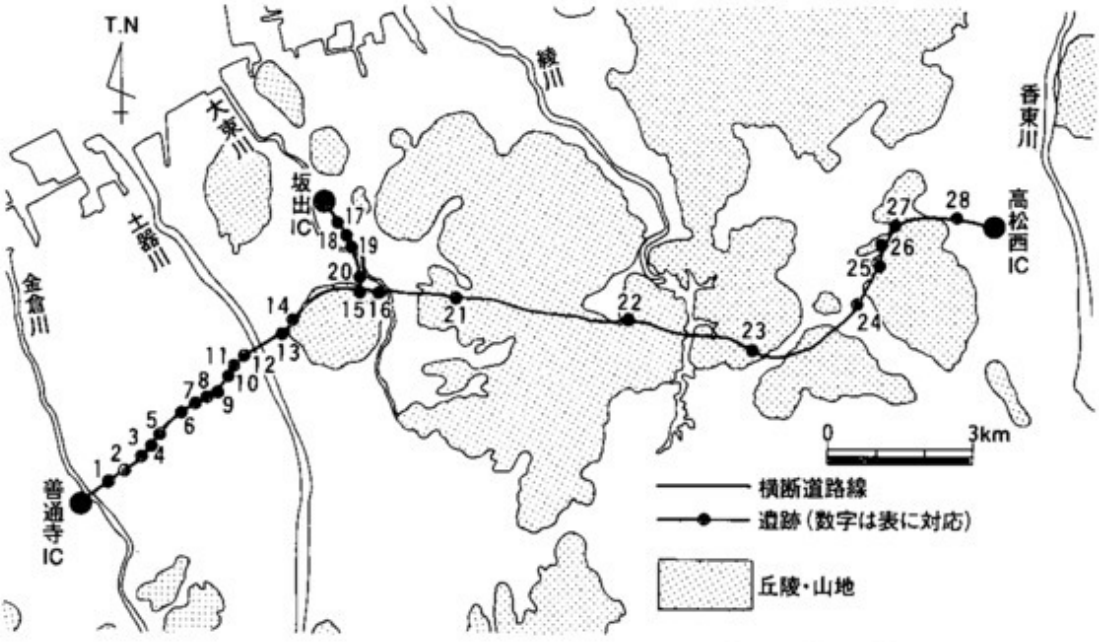
第1節　調査にいたる経過

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は，同善通寺～豊浜間に引き続き，昭和57年1月8日に整備計画が決定され，昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会では，この間路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的に国庫補助事業として分布調査[1]を実施し，これを基に調査対象面積を39万m²余りと判断した。路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては，日本道路公団と文化庁の協議により，基本的には記録保存で対応することが決定した。

香川県教育委員会では，これを受けて香川県の担当課である土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。

その結果，昭和63年度当初から2カ年の予定で本調査を実施すること，整理報告は発掘調査の終了後に実施すること等が決定した。[2] これを受けて香川県教育委員会では調査体



第1図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～善通寺）

制の充実を図ることを目的に，昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置するとともに，専門職員の増員等の措置を実施した。

平成元年６月～10月にかけて，綾歌郡国分寺町内に所在する埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容を把握するため，日本道路公団と協議の上，用地買収の進捗にあわせて予備調査を実施した。予備調査の着手にあたっては，地元関係者，四国横断自動車道建設国分寺地区対策協議会，国分寺町建設課，同教育委員会，香川県坂出土木事務所横断道対策室，同用地課等の多大な協力を得た。

予備調査では，国分寺下日名代遺跡や国分寺六ツ目古墳等の４遺跡についての内容を把握し，同地区での本調査対象面積を22,250㎡に確定した。

今回報告する国分寺下日名代遺跡は，調査対象面積は11,350㎡である。本調査は平成元年８月19日に着手し，平成２年２月28日に終了した。

調査は，香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施された。

(1) 香川県教育委員会 1987『国道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財詳細分布・試掘調査概報』

(2) 最終的に，用地買収・家屋退去等の関係で調査期間は３年６ヶ月を要し，本調査面積は，予備調査による遺跡内容の確定を随時実施したことから，319,201㎡になった。

No.	遺跡名	所在地	調査面積(m²)	調査期間	遺構	遺物
1	龍川五条遺跡	善通寺市原田町	12,300 10,200	元.6.26～2.3.31 2.4.9～2.12.5	弥生時代(環濠，竪穴住居，溝)，古代溝，中世建物，近世井戸	弥生土器，土師器，須恵器，石器，木製品
2	龍川四条遺跡	善通寺市原田町・木徳町	20,200 1,700 300	元.7.1～2.3.31 2.5.28～2.12.5 3.4.4～3.6.18	古代掘立柱建物，中世建物，溝，土坑墓，自然河川	縄文土器，土師器，須恵器，瓦器，磁器，中世鏡
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町中村	12,041 1,300	63.4.18～元.2.10 元.4.10～2.3.31	弥生時代竪穴住居，溝，自然河川	弥生土器ほか
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町黒島	7,677	63.6.15～63.11.26	ユニット，溝，建物	旧石器，弥生土器，陶磁器
5	郡家原遺跡	丸亀市三条町黒島・郡家町原	17,099 2,600	63.4.18～元.3.31 元.4.10～2.3.31	竪穴住居，掘立柱建物，溝	弥生土器，土師器，須恵器，緑釉陶器，斎串ほか
6	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町八幡上	14,067 6,450	63.4.18～元.3.31 元.4.10～2.3.31	掘立柱建物，溝，自然河川	弥生土器，土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，有舌尖頭器ほか
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町大林上	11,175	63.6.15～元.3.22	掘立柱建物，溝，自然河川	須恵器，斎串ほか
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町田代	12,741	63.6.15～元.2.17	掘立柱建物，溝，火葬墓	弥生土器，須恵器，近世陶磁器，ナイフ形石器
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西町北・原	3,033	63.12.12～元.3.25	掘立柱建物，溝	
10	川西北・七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町北・七条	4,034	63.12.13～元.3.27	溝，自然河川	土師器，須恵器
11	川西北・七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町北・七条	4,760	元.2.2～元.3.31	掘立柱建物，溝	土師器
12	川西北・鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町北	12,208	元.4.10～元.8.11	中世掘立柱建物，溝，自然河川	土師器，須恵器，近世陶磁器
13	飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町東二瓦礫	3,366	63.12.13～元.3.27	掘立柱建物，溝，自然河川	土師器，須恵器
14	飯野・東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300	2.3.1～2.3.31		

第Ⅰ表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)

No	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	遺構	遺物
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 飯山町東坂元	28,100 500	2.8.2～3.3.20 3.9.2～3.9.4	弥生時代竪穴住居，古墳時代竪穴住居，柱穴	弥生土器，土師器，須恵器
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2.5.10～3.1.17	古墳時代竪穴住居，古代～中世建物，溝	縄文土器，土師器，須恵器，墨書土器，土馬，耳環
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2.5.10～3.2.28 3.4.4～3.9.13	弥生時代竪穴住居，古代～中世掘立柱建物，溝，土坑，土坑墓	弥生土器，土師器，須恵器，耳環，鉄小刀
18	川津下樋遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2.5.10～3.1.31 3.7.1～3.7.16	弥生時代(水田，井堰)，溝，自然河川	縄文晩期土器，弥生土器，石器（打製石庖丁ほか），木製品
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2.5.10～3.3.8	弥生時代（溝，自然河川），中世（建物，溝）	弥生土器，土師器，石器
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2.4.12～3.3.28 3.7.18～3.9.27	弥生時代自然河川，弥生時代～古墳時代(竪穴住居，掘立柱建物，土坑)，古代～中世（溝，水田）	弥生土器，土師器，須恵器，石器，木製品，帯金具
21	飯山一本松遺跡	飯山町	2,200	元.4.17～元.5.16		弥生土器，土師器，須恵器
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2.10.30～2.12.26	土坑	須恵器
23	綾南奥下池南遺跡	綾南町	2,900	元.5.22～元.7.24	須恵器窯跡	須恵器
24	国分寺下日名代遺跡	国分寺町福家	11,350	元.8.19～2.2.28	弥生時代溝，水田，動物足跡	弥生土器，土師器，須恵器
25	国分寺楠井遺跡	国分寺町福家	4,400	2.4.11～2.10.2	古墳時代横穴式石室，中世窯，建物	土師器，須恵器，瓦質土器，耳環
26	国分寺六ツ目古墳	国分寺町福家	900	元.9.1～元.12.28	前方後円墳（主体部3基）	古式土師器，鉄器
27	国分寺六ツ目遺跡	国分寺町福家	5,600	元.10.1～2.2.28	中近世建物	弥生土器，近世陶磁器，石器
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元.8.19～2.3.25 2.5.10～3.3.25 3.4.5～3.7.18	旧石器ブロック，弥生時代～近世建物，埴輪焼成土坑，古墳，溝，土坑	弥生土器，土師器，須恵器，埴輪，陶棺，ナイフ形石器，舟底形石器

第2表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)

第2節　調査の経過

1　調査の経過

(1)　予備調査（第4図参照）

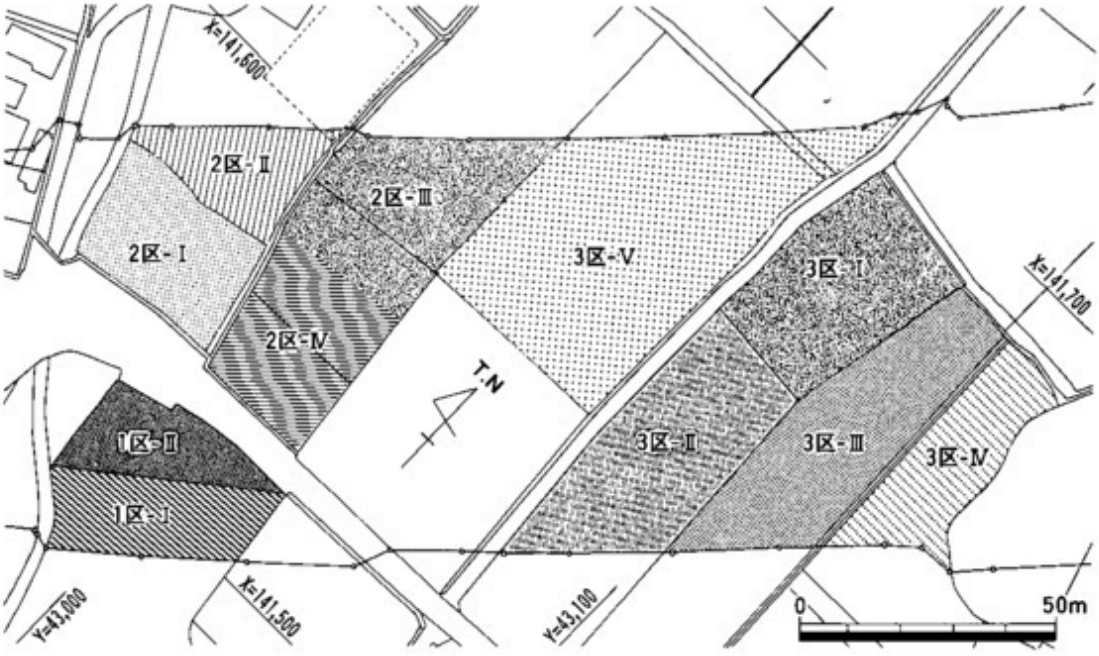
横断道国分寺町域の分布調査の結果に基づき平成元年6月から10月にかけて，対象地をA～E区に分けて予備調査を行った。このうちD区には本調査が行われた地点について国分寺楠井遺跡，E区には同様に国分寺六ツ目古墳・国分寺六ツ目遺跡という名称が与えられた。残るA～C区のうちA区は皿池西岸以西甲骨池手前まで，B区は皿池周辺，C区は丘陵末端以東本津川東岸までを範囲とする。A・B区は溜め池に向かって北に傾斜する緩斜面で，削平あるいは盛り土を行って棚田状に水田を造成していた。包含層・遺構の存在は認められなかったが，A区東半部で僅少ながら平均に須恵器を採集しており，南側に当該期の遺跡が存在する可能性がある。南側は火ノ山から急傾斜してきた地形の裾が緩やかに広がっており，集落を形成していてもおかしくはない。この他石鏃やサヌカイト片を採集している。C区東端の堂山の裾では平安時代後半の須恵器・土師器等を多く採集した。調査地点は小さな谷が平地へと広がる地形であり，上部から谷水とともに流されてきたものと思われるが，上流は急斜面であり何らかの遺構を営めるような平坦面は存在しない。周辺に集落等が存在し，廃棄物をここに捨てていた可能性もある。

C区西半分については6月13日～22日にかけて調査を行い，その結果包含層あるいは溝等が検出され，続けて本調査を行う必要があると判断した。国分寺下日名代遺跡という名称を与え，本調査の準備に入った。

(2)　本調査（第2図・第3表参照）

国分寺下日名代遺跡の発掘調査は，対象面積を11,350m²[1]とし，平成元年8月19日に調査を開始し，同2年2月28日に終了した。調査方式は工事請負である。発掘調査の概要は平成元年度の概報及び当センター年報[2]で報告している。

調査方法としては，遺跡を横切る町道より南を1区，北を東西に3・2区と分け，更に現行の水田の単位を利用し，それぞれを小区に分けた。遺物の取り上げはこの小区ごとに行った。掘削方法は包含層上面まで重機を用いて行い，包含層・遺構について人力での掘削を行った。遺構番号については調査段階では小区ごとに付与したが，遺構数が少なかったことから整理当初に遺構番号を遺跡全体でのものにまとめた。しかし整理が進むにつれ



第２図　調査区割り図（１/１,500）

報告書	調　査　時	報告書	調　査　時	報告書	調　査　時
SP 01	3 区 I SP 01	SX 10	3 区 V SX 01	SD 13	2 区 I SD 03
SP 02	3 区 I SP 02	SX 11	3 区 V SX 02	SD 13	2 区 II SD 01
SP 03	3 区 V SK 02 (SP 02)	SD 01	1 区 SD 01	SD 14	2 区 II SD 02
SP 04	3 区 V SP 01 (SP 03)	SD 02	1 区 SD 02	SD 15	2 区 III SD 01
SK 01	3 区 V SK 01	SD 03	1 区 SD 03	SD 17	3 区 I SD 01
SK 02	3 区 V SK 03	SD 04	1 区 SD 04	SD 18	3 区 I SD 02
SX 01	2 区 III SX 01	SD 04	2 区 IV SD 01	SD 19	3 区 II SD 01
SX 02	2 区 III SX 02	SD 05	1 区 SD 05	SD 19	3 区 III SD 01
SX 03	2 区 III SX 03	SD 06	1 区 SD 06	SD 20	3 区 II SD 02
SX 04	2 区 IV SX 01	SD 07	1 区 SD 07	SD 21	3 区 II SD 03
SX 05	2 区 IV SX 02	SD 08	1 区 SD 08	SD 24	3 区 III SD 03
SX 06	3 区 I SX 01	SD 09	1 区 SD 09	SD 25	3 区 III SD 04
SX 07	3 区 I SX 02	SD 10	1 区 SD 10	SD 26	3 区 V SD 02
SX 08	3 区 III SX 01	SD 11	2 区 I SD 01	SD 27	3 区 V 南 SD 01
SX 09	3 区 III SX 02	SD 12	2 区 I SD 02	SD 28	3 区 V 北 SD 01

第３表　遺構番号変更対照一覧

て，欠番となったものも存在する。その対照表を掲げておく。

(3) 整理作業

整理作業は平成10年4月1日から開始し，同年9月30日に終了した。整理作業の概要は平成10年度の当センター年報で報告している。[3]

(1) 調査対象地中央の事務所用地の下は粘土採掘が行われており，包含層・遺構とも皆無であったため，面積には含まれていない。

(2) 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成元年度』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1990『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成元年度』

(3) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1999『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成10年度』

2　発掘調査及び整理作業の体制

平成元年度

	文化行政課		財団法人香川県埋蔵文化財調査センター	
総括	課長	太田　彰一	総括	所長	十川　泉
	課長補佐	高木　尚		次長	安藤　道雄
	副主幹	野網朝二郎		係長(事務)	加藤　正司
総務	係長	宮内　憲生	総務	主査(土木)	山地　修
	主任主事	横田　秀幸		主事	三宅　浩司
	主事	水本久美子	調査	参事	見勢　護
埋蔵文化財	係長	大山　真充		係長	渡部　明夫
	主任技師	岩橋　孝		係長	藤好　史郎
	技師	國木　健司		係長	真鍋　昌宏
				主任技師	渡邊　茂智
				技師	古野　徳久
				調査技術員	大西二美予

平成10年度

総括	課長	小原 克己	総括	所長	菅原 良弘
	課長補佐	北原 和利		次長	小野 善範
総務	副主幹	西村 隆史		副主幹	田中 秀文
		(6.1～)	総務	主任主事	西川 大
	係長	山崎 隆			(～5.31)
		(～5.31)			新 一郎
		中村 禎信			(6.1～)
		(6.1～)	調査	主任文化財専門員	廣瀬 常雄
	主査	三宅 陽子		文化財専門員	北山健一郎
		(6.1～)		文化財専門員	古野 徳久
	主査	松村 崇史			
	主事	打越 和美			
		(～5.31)			
埋蔵文化財	副主幹	渡部 明夫			
	係長	西村 尋文			
	技師	塩崎 誠司			

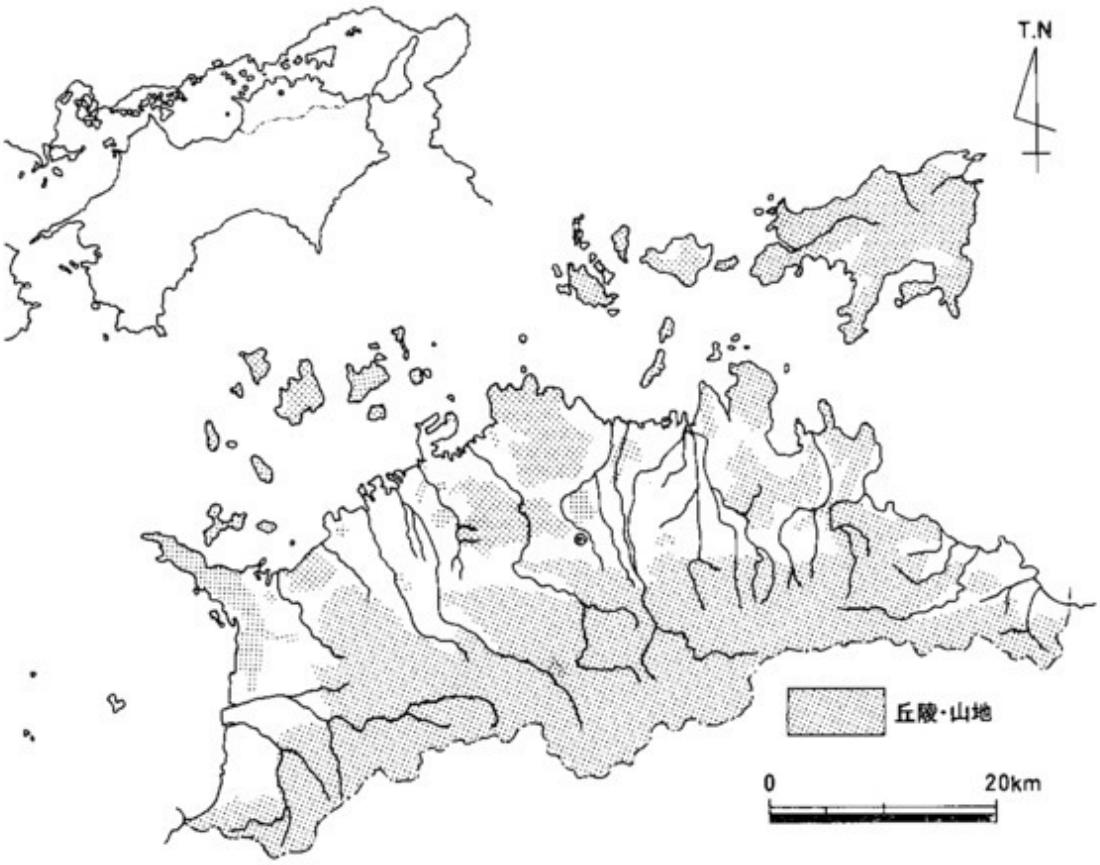
調査・整理に携わった方々は以下の通りである。

現場事務員	松井絹代
整理員	西桶右子
整理補助員	長谷川郁子，猪木原美恵子，谷純子
整理作業員	久保真由美，岡本由紀子，福森みゆき，寒川知美，堤田祐子

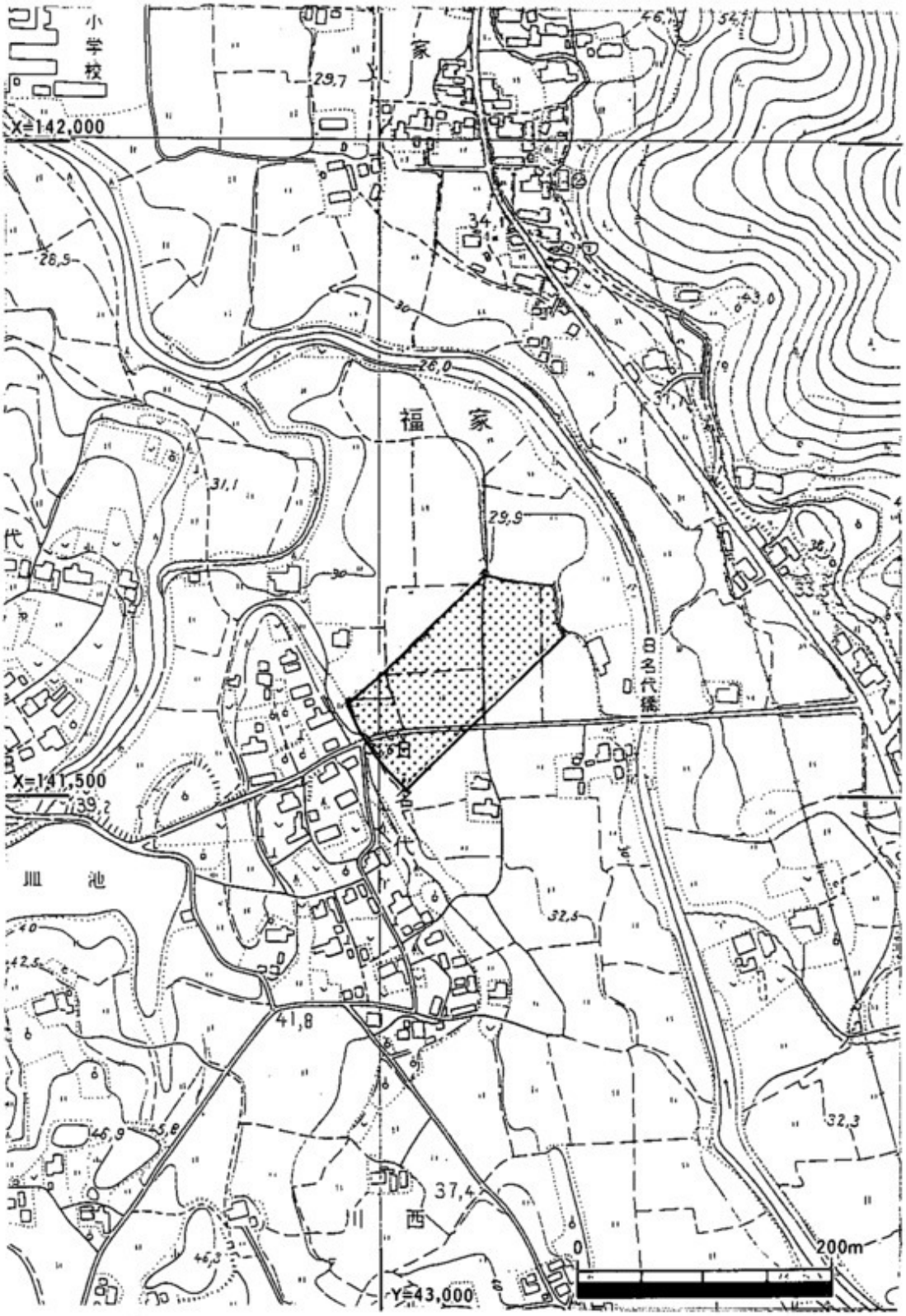
第2章　立地と環境

第1節　地理的環境（第3～5図参照）

国分寺下日名代遺跡の位置する国分寺町は香川県の東西の中間に位置する。四方は標高200～400mの低い山並みに囲まれ，その中に盆地状に平野部が存在する。しかし，それぞれの山は独立し，その間は低地となって隣の平野部とつながり，盆地という閉ざされたイメージのある土地ではない。東の堂山・六ツ目山山塊と南の火ノ山との間には，南の香南町の平地を通ってきた本津川が流れ込み，堂山の裾を巡りつつ北の五色台との間を抜け，高松平野を通って海に注ぐ。西の鷲ノ山と南の火ノ山の間には本津川に注ぐ旧河道跡の溜め池が点々とつながり，低い分水嶺を越えるとこれも溜め池伝いに綾南平野に至る。また



第3図　遺跡位置図(1)



第４図　遺跡位置図(2)（１/5,000）

国分台と鷲ノ山の境にあたる西北部は低地を介して容易に綾川に抜ける。この地点には国府が設けられていた。坂出平野までもわずかの距離である。

このように四方に容易に抜けることができる点で，遺跡の所在する国分寺町の平野部を交通の要衝と見なすこともできる。事実町の中央を東西に古代の南海道が横切り，北の五色台に抱かれるようにその裾に讃岐国分寺・国分尼寺が作られている。また東西の高松市，坂出市に接するという利便性から，現在では都市部のベッドタウンとして発展が続いている。

調査地は本津川の西岸に当たり，微妙な蛇行を繰り返す川は調査地北側で大きく西に回り込むように流れる。本津川と調査地の間には旧本津川によって形成された比高差１ｍの段丘崖が存在する。この形成時期については予備調査時のトレンチによって弥生時代以降であることが判明している。調査前の遺跡は一面に水田として利用されていた。ほぼ平坦であったが北西部分は東側より30cmほど低く，調査の結果西側の丘陵末端と調査地内の東部微高地との間に入り江状に入り込む低地が存在することが明らかになった。調査地西側の丘陵末端は調査地より15mほど高く，またその西も現在溜め池となっている比高差10m以上の谷が入り込んでいる。丘陵末端の裾は崖となり孤島のように平地に突きだしている。遺跡内では住居関係の遺構が検出できなかったことから，この丘陵上を居住域の候補の一つとして想定しているが，道路建設の工期と未退去家屋の関係から，予備調査を行うことができなかった。

第2節　歴史的環境（第5図参照）

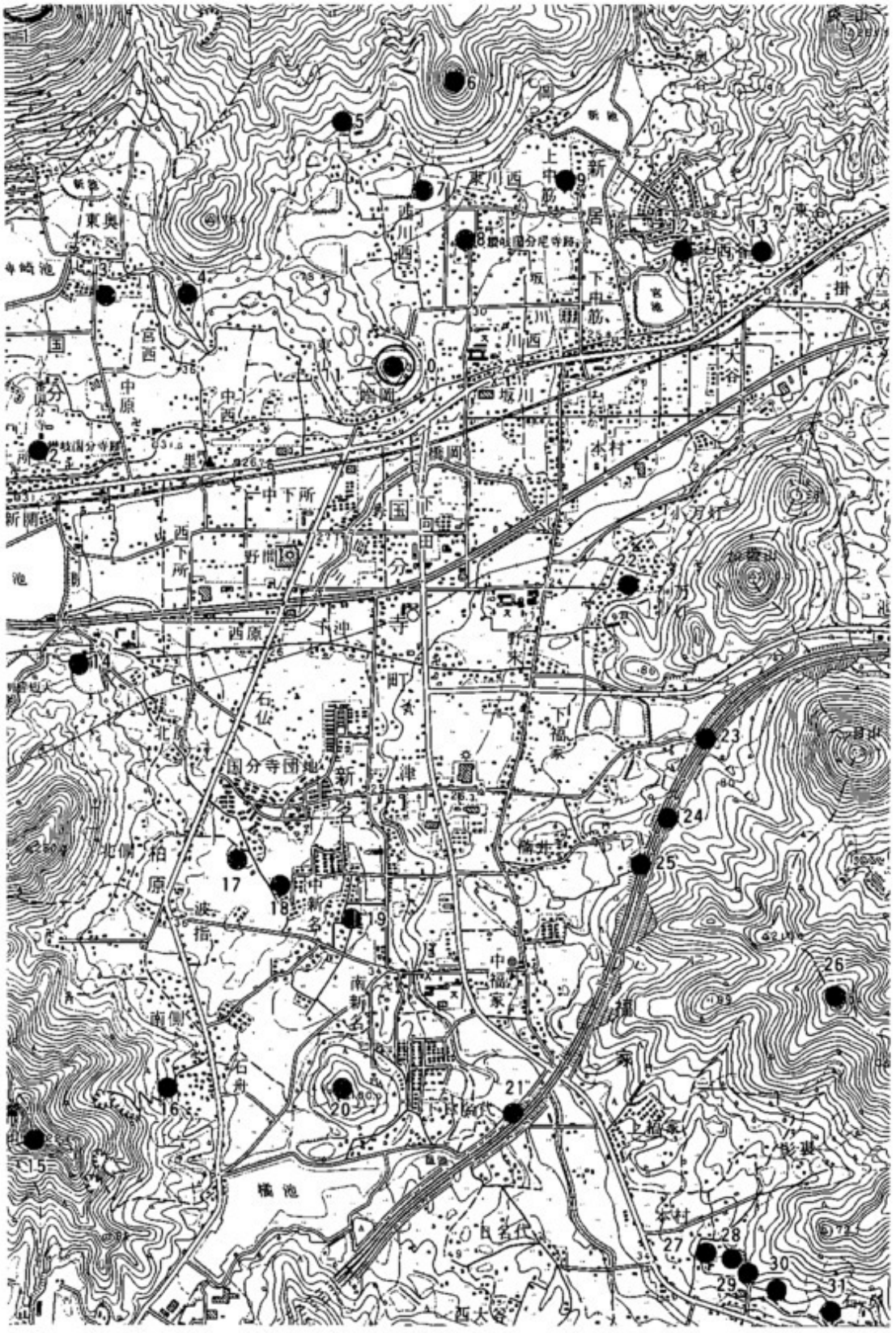
国分寺町内では，近年まで国分台遺跡群や国分寺・国分尼寺跡などの大遺跡の他は調査が殆ど行われていない。このため考古資料による歴史記述はあまり行える状態ではない。しかし，これが遺跡の分布が少ないことを示すのでないことは，今回同じ横断道調査によって発見された国分寺六ツ目遺跡・国分寺六ツ目古墳・国分寺楠井遺跡等によっても明らかである。今後遺跡が急増するであろうことは充分期待できる。ここでは国分寺下日名代遺跡に関わる旧石器から古代までの簡単な遺跡の記述を行っていくことにする。古墳時代及び中世の環境については参考文献に詳しいのでそちらを参照されたい。

香川県で著名なものにサヌカイト（讃岐石）がある。讃岐石というぐらい香川県に多いのであるが，幾つかある産地の内に国分台がある。国分寺町の北を限る山塊でメサ状地形の五色台の中の小さな高台に国分台とか蓮光寺山とかいう名称が付けられており，国分台は南縁部に位置する。この周辺では産出するサヌカイトを加工した石器が恐らく億単位で含まれ，それらは約2万年前の旧石器時代のものと考えられており，複数の出土地点を総称して国分台遺跡群と呼んでいる。この他兎子山(うさんこやま)遺跡でも旧石器や原石が採集されている。兎子山は本来サヌカイトを産出しない土地であり，これはこの地点で原石から石器への加工が行われたことを示している。また国分寺下日名代遺跡でも旧石器を数点包含層から採集しており，沖積地内に位置することを考えれば1kmも離れていない兎子山の加工品が何らかの理由でこの地に運ばれたものとも考えられる。

続く縄文時代の遺跡としては国分寺六ツ目遺跡があげられる。国分寺町東部の六ツ目山の西麓に位置し，その斜面地で石鏃や石匙多数とサヌカイトの板状素材集積遺構を検出している。土器の出土はないが，縄文時代前半期に属すると推測されている。

弥生時代では，かつて蓮光寺山の東面山麓の檀原地区で開墾中に弥生土器数個体が発見されている。中期後半頃のもので，国分寺下日名代遺跡でも同時期の遺物が弥生時代の主体を占めている。一方，国分寺六ツ目遺跡では中期前半と後期後半の遺物が出土している。また国分寺楠井遺跡でもサヌカイト片や打製石庖丁が出土している。今後調査が進めば弥生時代全般にわたる国分寺町の歴史の解明が行われることと期待される。

古墳時代の遺跡はこれまで埋葬遺構である古墳のみが発見されている。しかしその数は10基程度と少なく，詳細は把握されていない。内容が比較的明らかなものに町南部に所在する石ヶ鼻古墳がある。横穴式石室をもつ円墳で周囲に同様の古墳が数基存在していたと



第5図　周辺の遺跡（1/25,000）

もいわれるが明らかではない。現在は単独で立地している。同じ横断道調査で国分寺六ツ目古墳が調査された。全長21.4mの小規模な前方後円墳で堂山山塊末端の尾根上に位置することから国分寺町を勢力基盤とする豪族が前期に存在していたことを示している。この他町西境である鷲ノ山は産出する凝灰岩を用いた刳り抜き式石棺が前期後半から中期前半にかけて県内，更には畿内までも搬出されていることで著名である。

国分寺町はその町名の基となった讃岐国分寺が町北部国分台の麓に所在する。8世紀中頃には建立されていたらしく，創建時の瓦が鷲ノ山北麓の府中山内瓦窯跡で生産された。坂出平野側に3km程行くと国府が存在する。国府との関係でこの地が選ばれたと見られる。

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	主　な　遺　構
1	国分台遺跡	国分寺町国分	旧石器	
2	讃岐国分寺跡	国分寺町国分馬場	奈良	寺跡
3	東奥22号塚	国分寺町国分東奥		円墳
4	国分八幡神社磐座	国分寺町国分	奈良	巨石群
5	西川西古墳	国分寺町新居西川西	古墳	横穴式石室
6	新居氏砦跡	国分寺町新居東川西	室町	
7	東川西古墳	国分寺町新居東川西	古墳	石室？，祠
8	讃岐国分尼寺跡	国分寺町新居東川西	奈良	礎石跡
9	新居氏館跡(土居の宮)	国分寺町中筋	室町	小祠
10	橋岡山遺跡	国分寺町橋岡山	旧石器	
11		国分寺町橋岡山	古墳後期	巨石群(横穴式石室？)
12	楠尾神社経塚	国分寺町新居西大谷	平安～鎌倉	経塚
13	西大谷古墳	国分寺町新居西大谷	古墳	横穴式石室
14	赤池古墳	国分寺町新名赤池		
15	鷲ノ山城跡	国分寺町新名	室町	
16	石舟石棺	国分寺町石舟神社	古墳	
17	塔原経塚	国分寺町柏原塔原	室町	法華塔
18	小山古墳	国分寺町新名		
19	新名氏屋敷跡	国分寺町新名中新名	室町	石垣
20	兎子山遺跡	国分寺町新名	旧石器	
21	国分寺下日名代遺跡	国分寺町福家日名代	弥生～平安	溝，水田跡，動物足跡
22	末沢城跡	国分寺町新居万灯	室町	石垣，井戸
23	国分寺六ツ目遺跡	国分寺町福家	中近世	中近世建物跡
24	国分寺六ツ目古墳	国分寺町福家	古墳	前方後円墳
25	国分寺楠井遺跡	国分寺町福家楠井	古墳～中世	横穴式石室，窯跡
26	堂山城跡	国分寺町福家堂山山頂	室町	空堀，曲輪
27	福家氏館跡	国分寺町福家本村	室町	石垣，土手，井戸
28	本村古墳	国分寺町福家本村	古墳前期	竪穴式石室，箱式石棺
29	福家山城跡	国分寺町福家本村		土塁，竪堀
30	多聞寺院跡	国分寺町福家本村	戦国	寺跡
31	石ヶ鼻古墳	国分寺町福家石鼻	古墳後期	円墳，横穴式石室

第4表　遺跡一覧

参 考 文 献

国分寺町 1976『国分寺町史』

香川県 1988『香川県史第1巻』四国新聞社

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成元年度』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊　国分寺楠井遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第28冊　国分寺六ツ目古墳』

第3章　調査の成果

第1節　地形と土層序（第6～13図）

調査域土層図①（第7・8図）

遺跡北端沿いの土層である。現地形は東西を通して標高はほぼ一定だがその中にも微地形の凹凸が存在する。2区II西端及び2区III東半分，3区V東半分の3地点では床土直下に基盤層が現れ，それ以外の地点は更に20cmほど下で基盤層を検出した。窪んだ地点には弥生時代及び古代の包含層が堆積し，それでも埋まり終え平坦となることがなかったらしく，その上面に近世と思われる水田耕作土が存在した。基盤層は上面に灰黄色や灰褐色の粘土が現れるが，その下には砂を含んだ土が堆積しており，地形どおり沖積地であることが明らかである。基盤層土内からは遺物の出土は認められなかった。

調査域土層図②（第9・10図）

遺跡南端沿いの土層である。現地形は町道より西は調査域土層図①と標高が等しいが，東は約50cmほど高い。従って調査域の中でも南東部のみ若干高いという旧地形を想定できる。実際最終遺構面である弥生時代の遺構面を探すと南北80mの間に最高で1m近い標高差が認められる。この土層図で見ると3区III東半分は基盤層が下がっており，平面的にも南北に浅い窪みが走っていることが確認できている。それ以西で粘土採取の結果調査しなかった部分にかけても微高地にあたり，これも南北に広がっている。

調査域土層図③（第11図）

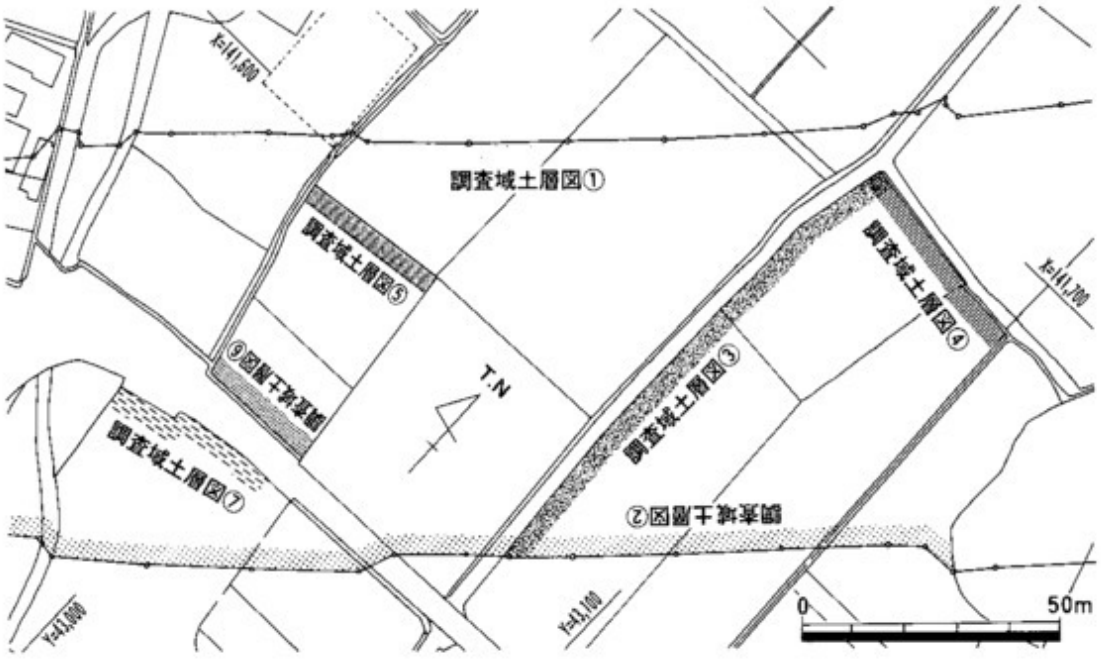
調査域東部をほぼ南北方向の斜めに実測したものである。最終遺構面の標高は29.8mほどでほぼ一定である。北端16mは若干下がり気味で包含層は認められない。ここで見ると上述した南北に抜ける浅い窪みは微高地との見分けがつかない。

調査域土層図④（第12図）

調査域北東部，3区I・IIIの北壁である。最終遺構面は東へと緩やかに高くなる。東西の標高差は約40cmである。その上には厚さ10cm前後で弥生時代及び古代の包含層が2層堆積している。基盤層土は黄色系の粘土である。

調査域土層図⑤（第12図）

2区IV北壁である。中央部分で幅16mほどの落ち込みを検出した。調査時にはこれを自

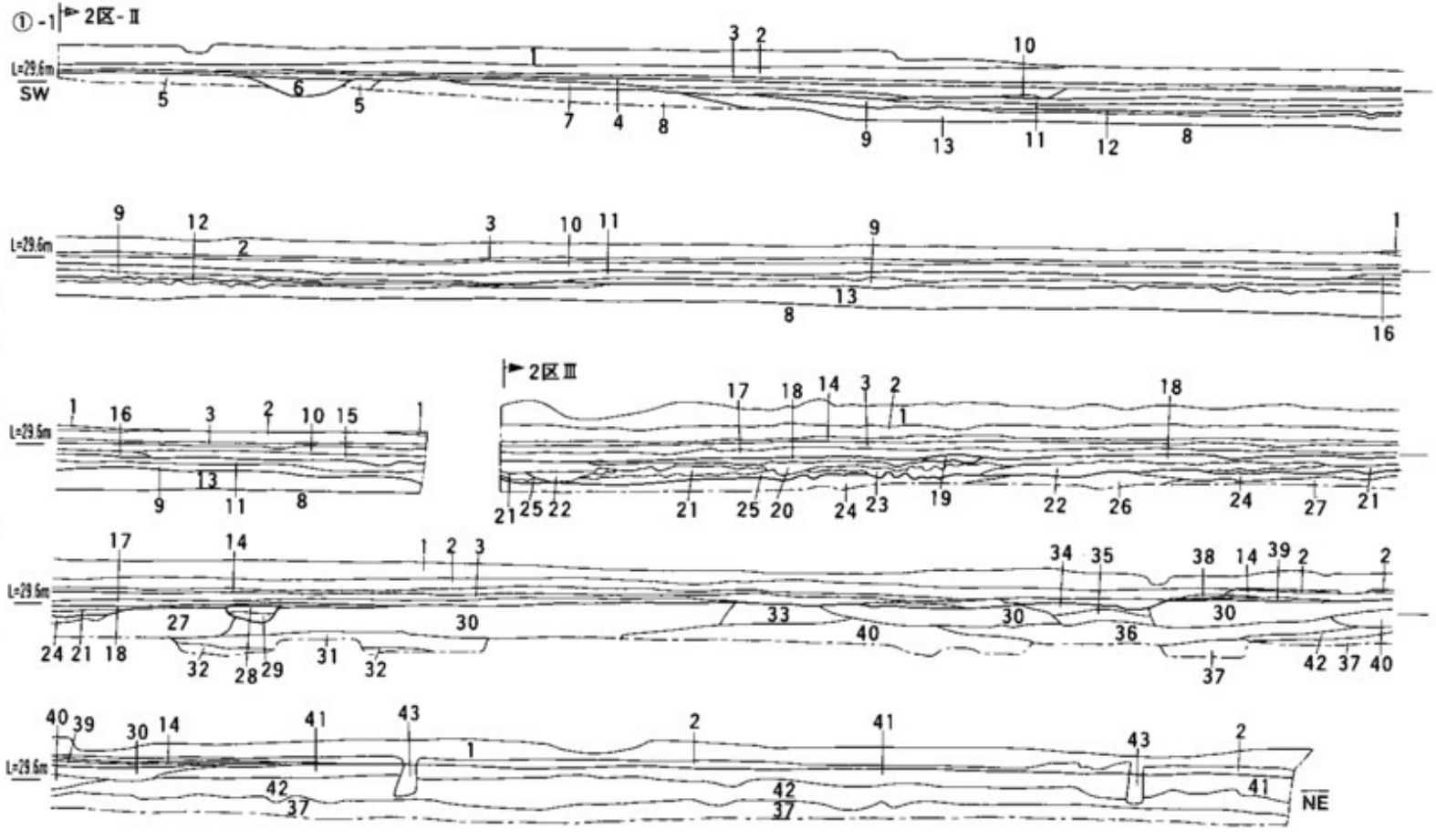


第６図　調査域土層図作成位置図（１/１,500）

然河川と判断したが，一方で川底までの確認を行わなかった。これとは別に２区Ⅲ中央部に東西に下層確認トレンチを入れたところ，東西22mのトレンチ全範囲で淡褐色細砂質土が厚さ20cmで堆積していた。これは土層図①の27・30層に相当する。自然河川とした落ち込みはこの下の面で形成されたもので，植物遺体を豊富に含んでいるのに反し，人工遺物は全く出土しなかった。このような状況から，自然河川は存在するものの，それは人間がこの地に現れる前にほぼ埋没してしまっており，その後は浅い窪地状になっていたと判断している。この浅い窪地では偶蹄目の足跡（SZ 01）が多く検出され，土層図①ではその結果による土層の著しい凹凸が認められる。また各層からプラント・オパールも検出されている（第４章第１節参照）。黒色土も堆積し，浅い窪地は旧河川の影響による湿地状を呈していた事が明らかである。なお，上述の下層確認トレンチの深さ１m（標高28.0～28.2m）の地点で堅固な青灰色細砂質土を検出している。

調査域土層図⑥（第13図）

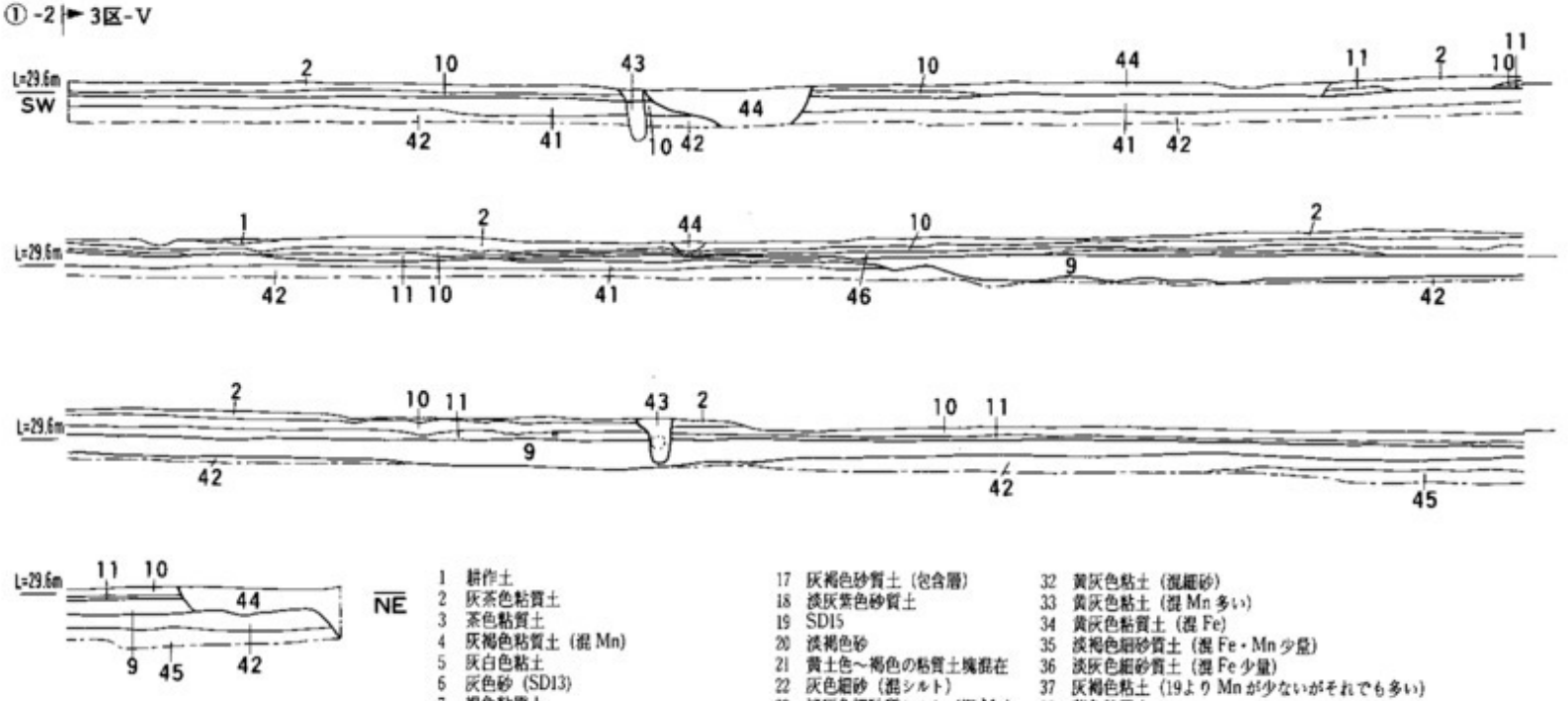
同じく２区の南壁である。土層図⑤に対応する形で中央に落ち込みが存在する。ここでも下層確認を行っていない。東端ではこの肩口にSD 04が掘り込まれている。図からは西側から落ち込みの埋没が進んでいるようであり，これは調査域西に存在する舌状丘陵末端斜面からの土砂の流入の結果と思われる。



1 耕作土
2 灰茶色粘質土
3 茶色粘質土
4 灰褐色粘質土（混 Mn）
5 灰白色粘土
6 灰色砂（SD13）
7 褐色粘質土
8 灰黄褐色粘質土
9 濃色シルト
10 灰褐色粘質土（混 Mn、4より褐色強い）
11 暗褐色粘質土
12 暗灰色シルト
13 灰色シルト
14 灰黄色粘質土
15 淡茶灰色粘質土
16 淡茶色粘質土
17 灰褐色砂質土（包含層）
18 淡灰紫色砂質土
19 SD15
20 淡褐色砂
21 黄土色～褐色の粘質土塊混在
22 灰色細砂（混シルト）
23 淡灰色細砂質シルト（混 Mn）
24 灰褐色粘土
25 灰黒紫色シルト（弥生包含層）
26 灰茶色細砂質土（混 Mn）
27 淡褐色細砂質土（混 Fe）
28 暗灰褐色粘質土
29 暗灰色粘質土
30 淡灰褐色粘質土
31 灰色細砂（混 Fe・Mn 多い）
32 黄灰色粘土（混細砂）
33 黄灰色粘土（混 Mn 多い）
34 黄灰色粘質土（混 Fe）
35 淡褐色細砂質土（混 Fe・Mn 少量）
36 淡灰色細砂質土（混 Fe 少量）
37 灰褐色粘土（19より Mn 少ないがそれでも多い）
38 茶色粘質土
39 淡灰色粘質土（混 Mn 多い）
40 淡灰褐色細砂質土（混 Mn 多い）
41 灰黄色粘土（混 Mn・Fe）
42 灰褐色粘土
43 暗褐

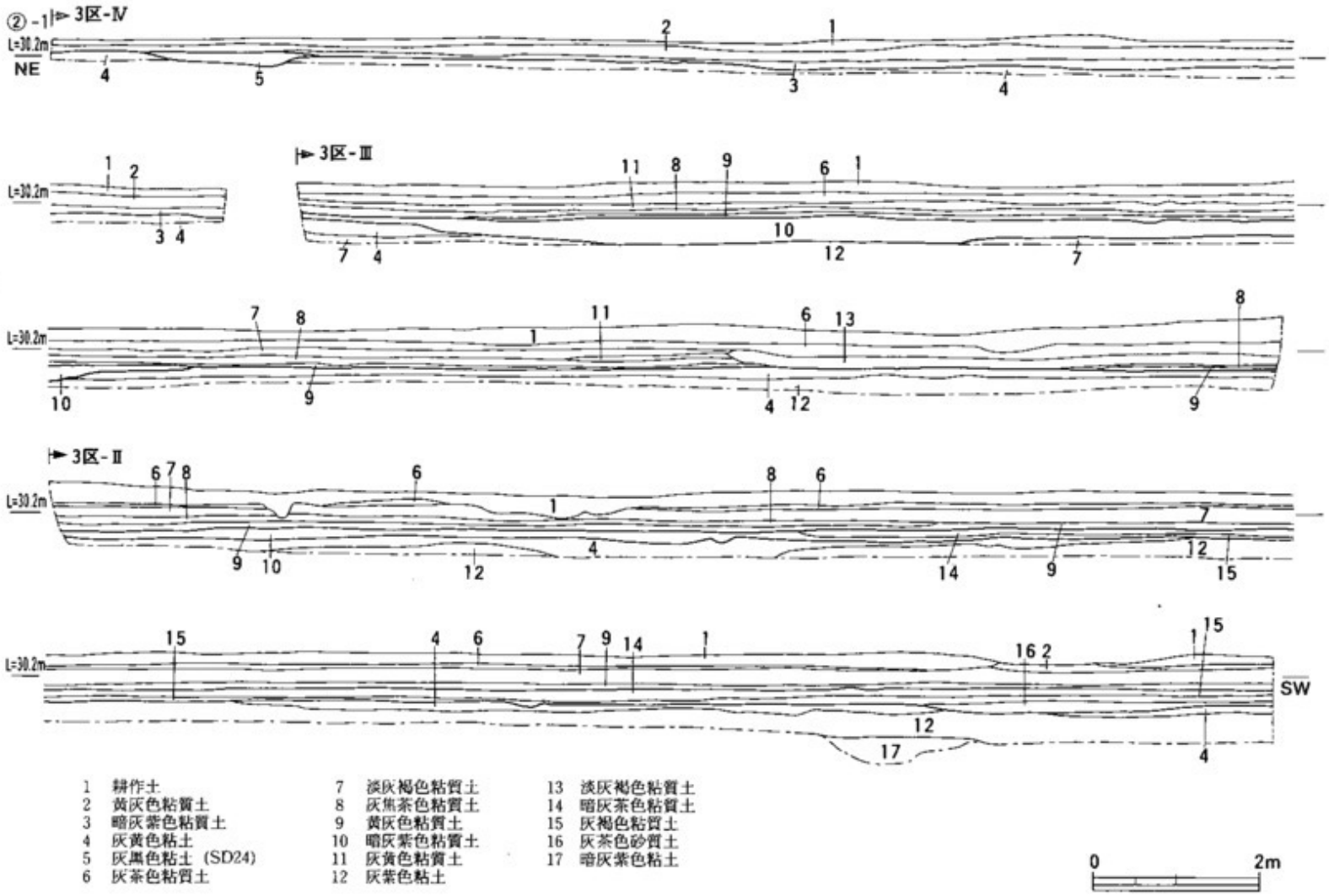
0 2m

第7図 調査区土層図①—1（1/80）



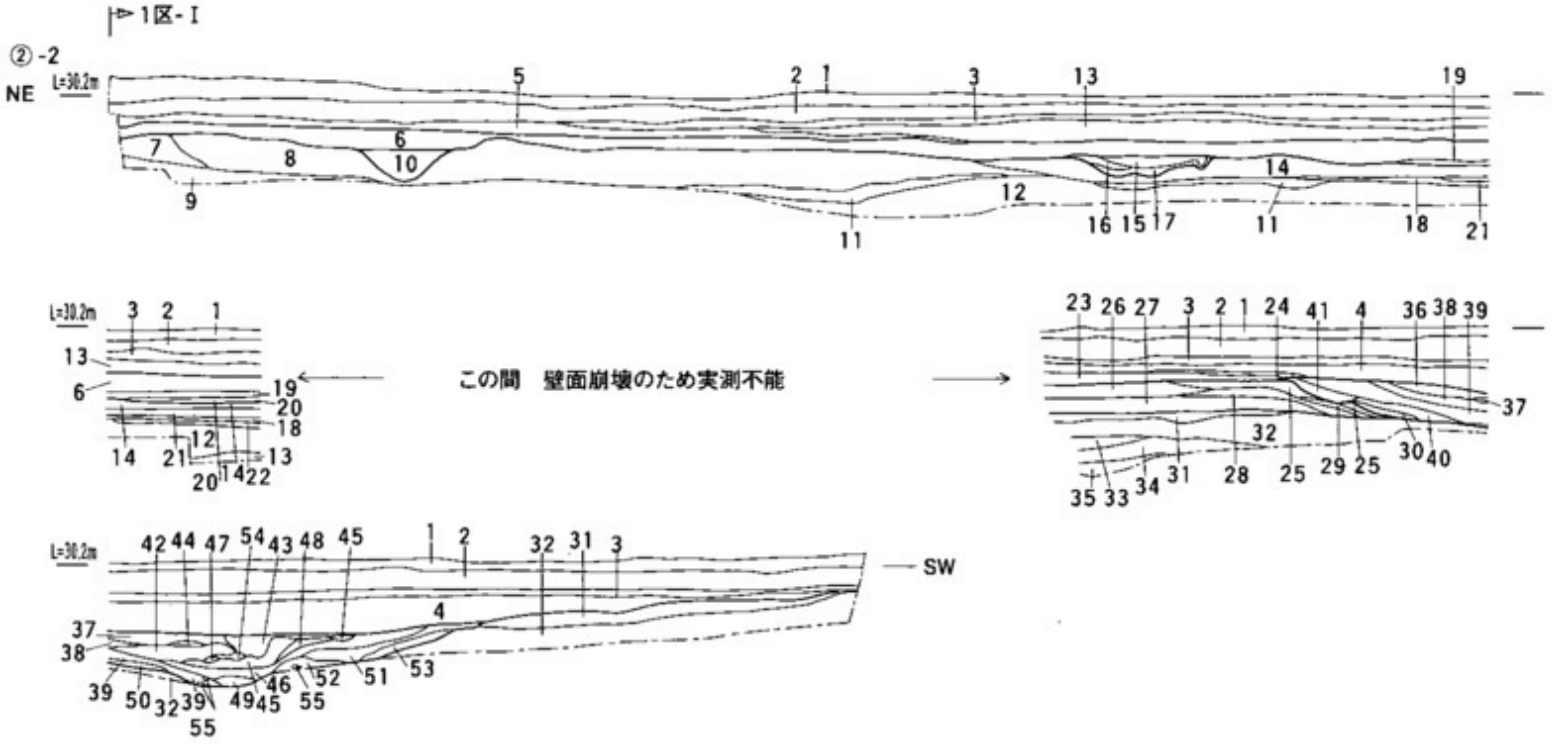
1 耕作土
2 灰茶色粘質土
3 茶色粘質土
4 灰褐色粘質土（混 Mn）
5 灰白色粘土
6 灰色砂（SD13）
7 褐色粘質土
8 灰黄褐色粘質土
9 黒色シルト
10 灰褐色粘質土（混 Mn，4より褐色強い）
11 暗褐色粘質土
12 暗灰色シルト
13 灰色シルト
14 灰黄色粘質土
15 淡茶灰色粘質土
16 淡茶色粘質土
17 灰褐色砂質土（包含層）
18 淡灰紫色砂質土
19 SD15
20 淡褐色砂
21 黄土色～褐色の粘質土塊混在
22 灰色細砂（混シルト）
23 淡灰色細砂質シルト（混 Mn）
24 灰褐色粘土
25 灰黒紫色シルト（弥生包含層）
26 灰茶色細砂質土（混 Mn）
27 淡褐色細砂質土（混 Fe）
28 暗灰褐色粘質土
29 暗灰色粘質土
30 淡灰褐色粘質土
31 灰色細砂（混 Fe・Mn 多い）
32 黄灰色粘土（混細砂）
33 黄灰色粘土（混 Mn 多い）
34 黄灰色粘質土（混 Fe）
35 淡褐色細砂質土（混 Fe・Mn 少量）
36 淡灰色細砂質土（混 Fe 少量）
37 灰褐色粘土（19より Mn が少ないがそれでも多い）
38 茶色粘質土
39 淡灰色粘質土（混 Mn 多い）
40 淡灰褐色細砂質土（混 Mn 多い）
41 灰黄色粘土（混 Mn・Fe）
42 灰褐色粘土
43 暗渠
44 撹乱
45 灰色細砂
46 灰褐色粘質土

第8図 調査域土層図①—2（1/80）



1 耕作土
2 黄灰色粘質土
3 暗灰紫色粘質土
4 灰黄色粘土
5 灰黒色粘土（SD24）
6 灰茶色粘質土
7 淡灰褐色粘質土
8 灰焦茶色粘質土
9 黄灰色粘質土
10 暗灰紫色粘質土
11 灰黄色粘質土
12 灰紫色粘土
13 淡灰褐色粘質土
14 暗灰茶色粘質土
15 灰褐色粘質土
16 灰茶色砂質土
17 暗灰紫色粘土

第9図 調査区土層図②—1（1/80）

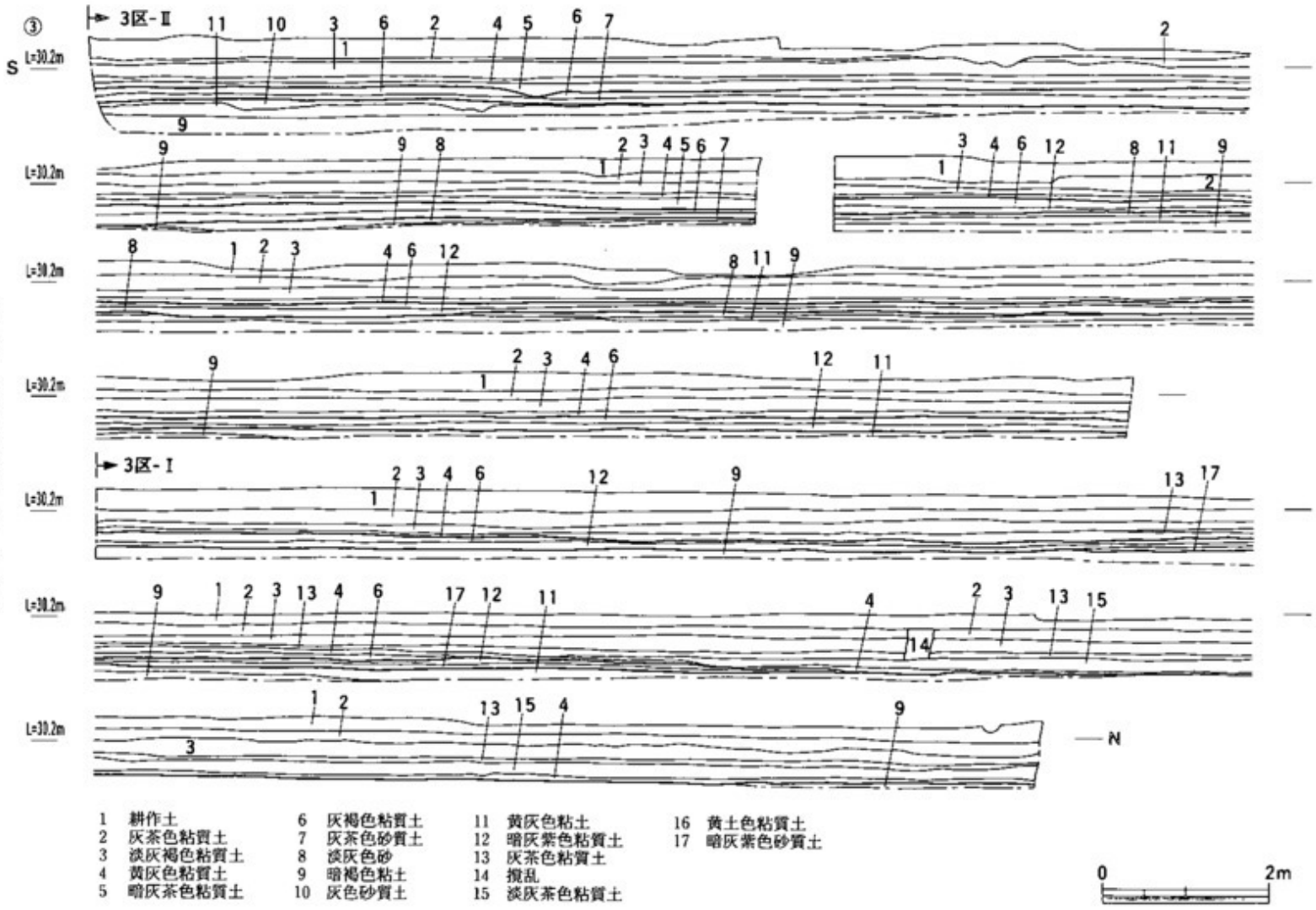


1 耕作土
2 灰橙色粘質土
3 淡褐色粘質土（混 Mn・Fe）
4 灰褐色粘質土（混 Fe）
5 淡灰褐色粘質土（混 Mn）
6 灰色砂質土（混 Mn 多い）
7 灰黄色細砂質シルト（混 Mn）
8 灰黄色粘土（混 Mn）
9 淡灰色細砂質シルト（混 Mn 多い）
10 暗灰褐色粘質土
11 橙色シルト
12 灰緑色シルト
13 茶灰色粘質土
14 淡灰色～灰紫色シルト
15 暗灰褐色粘質土
16 灰茶色粘質土
17 灰色粗砂
18 灰色粗砂（混灰白色シルト）
19 灰褐色シルト
20 灰色粗砂
21 暗褐色シルト
22 灰白色砂質土
23 黄灰色粘質土
24 灰色粘質土
25 灰橙色粘質土
26 暗橙色粘質土
27 灰橙色粘質土
28 灰色粘質土
29 暗灰色粘質土
30 白色粘質土
31 黄土色粘土（風化礫多い）
32 灰白色粘土（混 Fe）
33 灰色粘土
34 灰白色粘土
35 白黄色粘土
36 灰褐色粘質土
37 灰色シルト
38 淡灰紫色シルト
39 暗灰色砂
40 灰色粘質土
41 白色粘質土
42 暗灰色シルト（混砂）
43 灰色と淡灰色のシルト塊混在
44 黒色シルト（混砂）
45 黒色シルト
46 暗灰色シルト
47 灰白色シルトブロック
48 灰色シルト
49 暗灰色礫（混黒色シルト）
50 褐色砂
51 暗灰色シルト
52 灰黒色シルト
53 灰色シルト質細砂
54 灰白色シルトブロック
55 石

(10—SD04)
(15～17—SD03)
(36～54—SD01・02)

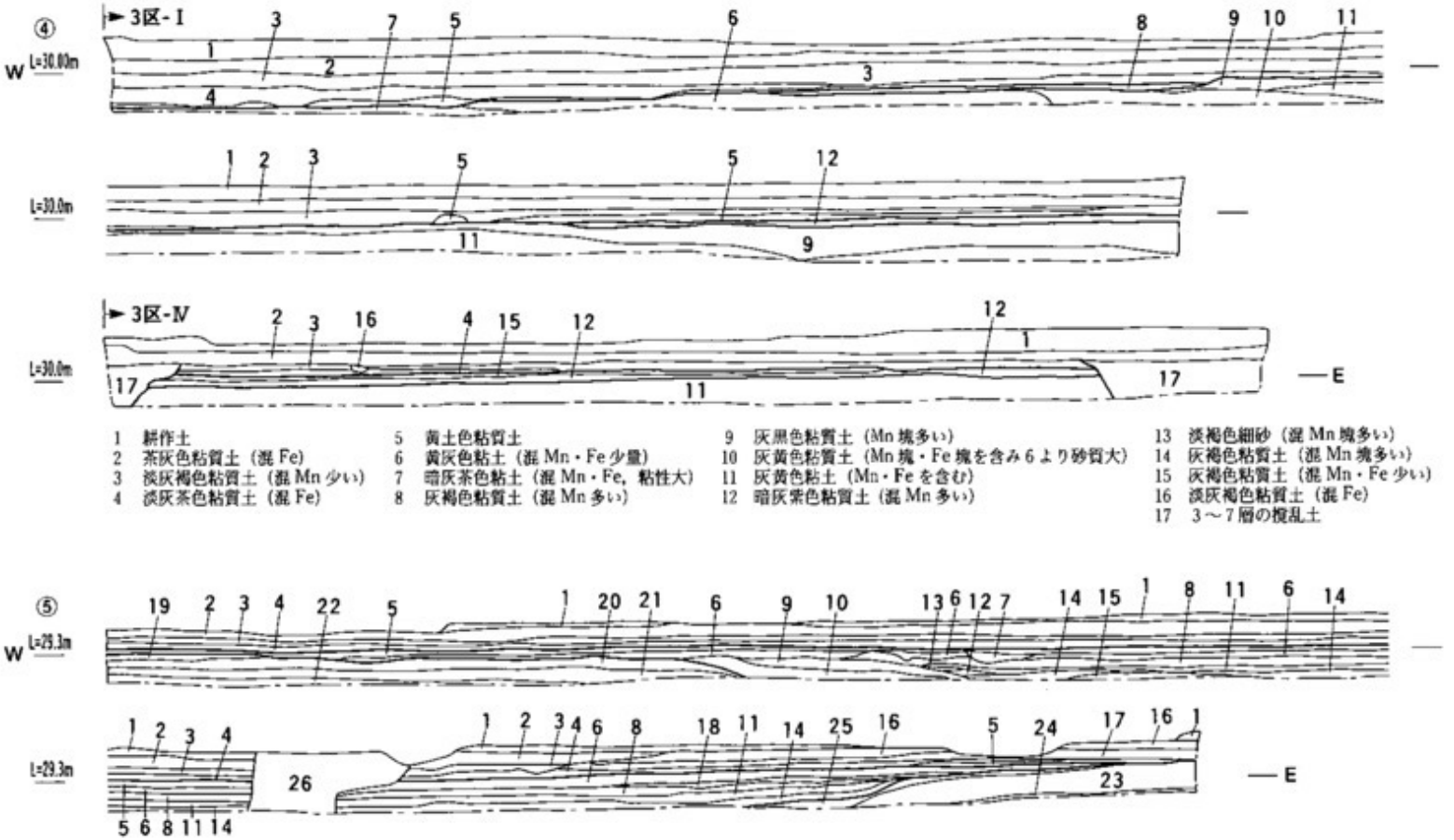
0　2m

第10図　調査域土層図②—2（1/80）



1 耕作土
2 灰茶色粘質土
3 淡灰褐色粘質土
4 黄灰色粘質土
5 暗灰茶色粘質土
6 灰褐色粘質土
7 灰茶色砂質土
8 淡灰色砂
9 暗褐色粘土
10 灰色砂質土
11 黄灰色粘土
12 暗灰紫色粘質土
13 灰茶色粘質土
14 撹乱
15 淡灰茶色粘質土
16 黄土色粘質土
17 暗灰紫色砂質土

第二図 調査地土層図③（1/80）

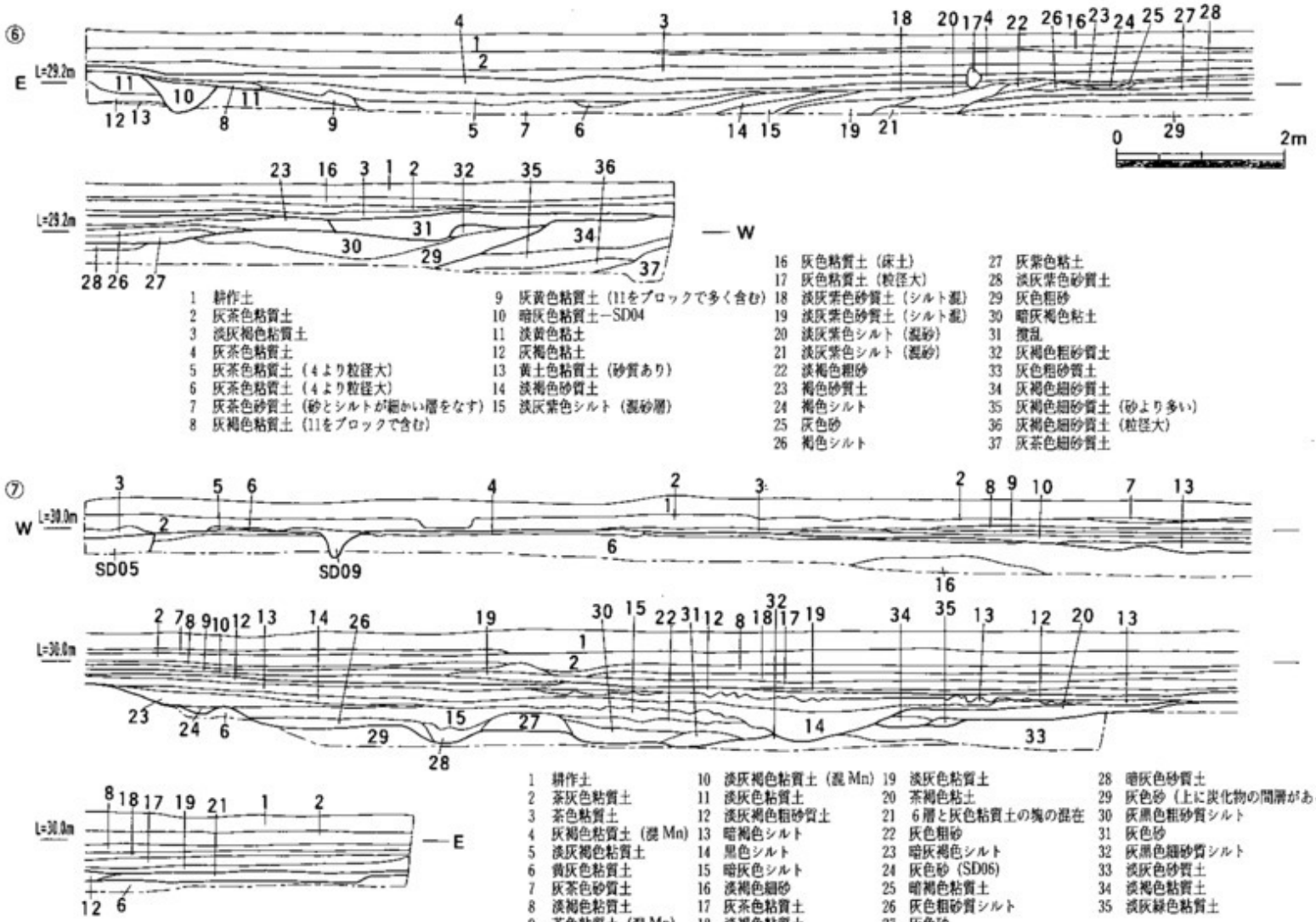


1 耕作土
2 茶灰色粘質土（混 Fe）
3 淡灰褐色粘質土（混 Mn 少い）
4 淡灰茶色粘質土（混 Fe）
5 黄土色粘質土
6 黄灰色粘土（混 Mn・Fe 少量）
7 暗灰茶色粘土（混 Mn・Fe，粘性大）
8 灰褐色粘質土（混 Mn 多い）
9 灰黒色粘質土（Mn 塊多い）
10 灰黄色粘質土（Mn 塊・Fe 塊を含み 6 より砂質大）
11 灰黄色粘土（Mn・Fe を含む）
12 暗灰紫色粘質土（混 Mn 多い）
13 淡褐色細砂（混 Mn 塊多い）
14 灰褐色粘質土（混 Mn 塊多い）
15 灰褐色粘質土（混 Mn・Fe 少い）
16 淡灰褐色粘質土（混 Fe）
17 3～7 層の撹乱土

1 耕作土
2 灰茶色粘質土
3 淡灰褐色粘質土
4 褐色粘質土（砂多混）
5 灰色粗砂質土
6 淡灰紫色砂
7 撹乱
8 暗褐色シルト（混白色砂）
9 灰色粗砂
10 灰色砂質土（混 Fe・Mn 多い）
11 黒褐色粘土（混 Mn・Fe）
12 灰紫色シルト（混砂 Mn・Fe）
13 灰紫色粗砂質土（混 Mn・Fe）
14 灰紫色粘土
15 灰色粗砂
16 茶灰色粘質土（混 Mn・Fe）
17 灰褐色粘質土（混 Mn・Fe）
18 灰紫色シルト（混 Mn・Fe）
19 黄土色粘質土（砂多混）
20 灰褐色細砂質土
21 灰色砂
22 淡褐色細砂
23 灰茶色粘土（混 Mn・Fe）
24 灰褐色粘土（混 Fe）
25 茶灰色粘土（混 Mn・Fe）
26 試掘坑

0 2m

第12図 調査域土層図④・⑤（1/80）



1 耕作土
2 灰茶色粘質土
3 淡灰褐色粘質土
4 灰茶色粘質土
5 灰茶色粘質土（4より粒径大）
6 灰茶色粘質土（4より粒径大）
7 灰茶色砂質土（砂とシルトが細かい層をなす）
8 灰褐色粘質土（11をブロックで含む）
9 灰黄色粘質土（11をブロックで多く含む）
10 暗灰色粘質土－SD04
11 淡黄色粘土
12 灰褐色粘土
13 黄土色粘質土（砂質あり）
14 淡褐色砂質土
15 淡灰紫色シルト（混砂層）
16 灰色粘質土（床土）
17 灰色粘質土（粒径大）
18 淡灰紫色砂質土（シルト混）
19 淡灰紫色砂質土（シルト混）
20 淡灰紫色シルト（混砂）
21 淡灰紫色シルト（混砂）
22 淡褐色粗砂
23 褐色砂質土
24 褐色シルト
25 灰色砂
26 褐色シルト
27 灰紫色粘土
28 淡灰紫色砂質土
29 灰色粗砂
30 暗灰褐色粘土
31 撹乱
32 灰褐色粗砂質土
33 灰色粗砂質土
34 灰褐色細砂質土
35 灰褐色細砂質土（砂より多い）
36 灰褐色細砂質土（粒径大）
37 灰茶色細砂質土

1 耕作土
2 茶灰色粘質土
3 茶色粘質土
4 灰褐色粘質土（混Mn）
5 淡灰褐色粘質土
6 黄灰色粘質土
7 灰茶色砂質土
8 淡褐色粘質土
9 茶色粘質土（混Mn）
10 淡灰褐色粘質土（混Mn）
11 淡灰色粘質土
12 淡灰褐色粗砂質土
13 暗褐色シルト
14 黒色シルト
15 暗灰色シルト
16 淡褐色細砂
17 灰茶色粘質土
18 淡褐色粘質土
19 淡灰色粘質土
20 茶褐色粘土
21 6層と灰色粘質土の塊の混在
22 灰色粗砂
23 暗灰褐色シルト
24 灰色砂（SD06）
25 暗褐色粘質土
26 灰色粗砂質シルト
27 灰色砂
28 暗灰色砂質土
29 灰色砂（上に炭化物の間層がある）
30 灰黒色粗砂質シルト
31 灰色砂
32 灰黒色細砂質シルト
33 淡灰色砂質土
34 淡褐色粘質土
35 淡灰緑色粘質土

第13図　調査基土層図⑥・⑦（1/80）

調査域土層図⑦（第13図）

1区II北壁である。2区IV・IIIにつながる窪みから西側は近現代の耕作土下に最終遺構面が現れる。窪みは標高29.1m付近までを人間に関係する埋没層と判断したが，下層確認をしていないため断定はできない。特に30層からは多くのプラント・オパールが検出されており（第4章第1節参照），埋没河川の湿地を利用した水田が営まれた可能性も充分考えられる。

第２節　遺構・遺物

１　ピット

SP 01（第14図）

３区Ｉ北部の弥生時代中期の包含層が堆積する南北方向の浅い落ち込みに注ぐ溝状の地形内で検出した。径40cm弱の浅いピットで底には石が存在した。１は小型の壷である。他に弥生土器細片が１点出土した。上を覆う包含層の時期と出土遺物から，弥生時代の遺構と判断する。

SP 02（第14図）

SP 01の南側で検出した。遺物は出土しなかったが，埋土が似ることからSP 01と同じ時期のものと考える。

SP 03（第14図）

３区Ｖ東端中央部で検出した。平面形が1.7×0.9mの浅い隅丸方形の穴である。遺物は出土していない。埋土が似ることからSP 04と同じ時期のものと考える。

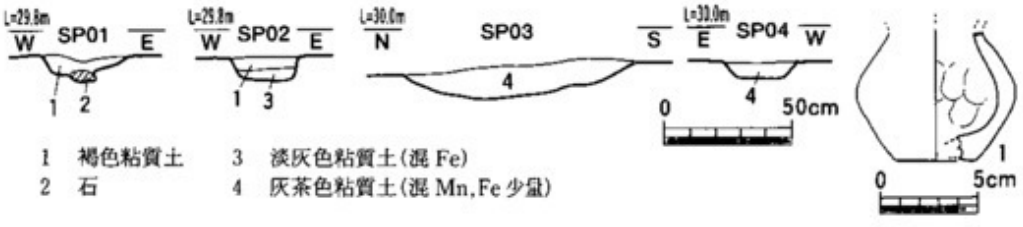
SP 04（第14図）

SP 03南で検出した。小さく浅いピットである。遺物は出土していない。埋土が似ることからSX 06と同じ時期のものと考える。

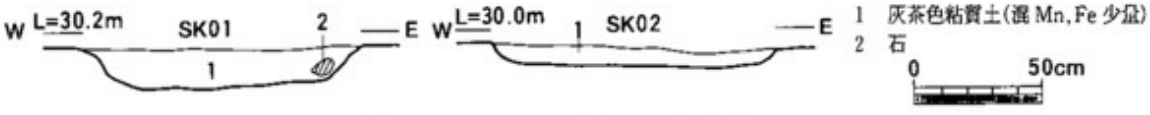
２　土坑

SK 01（第15図，図版14）

３区Ｖ東端中央部で検出した。径１ｍの浅い土坑である。遺物は出土していない。埋土



第14図　SP 01～04断面図（１/30），SP 01出土遺物実測図（１/４）



第15図　SK 01・02断面図（１/30）

が似ることからSD 26と同じ時期のものと考える。

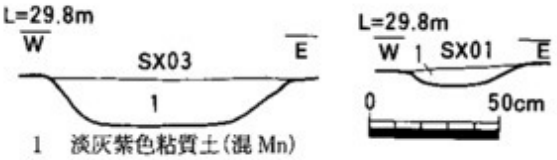
SK 02（第15図）

3区V北部中央で検出した。径1.1mの浅い土坑である。遺物は出土していない。埋土が似ることからSD 26と同じ時期のものと考える。

3　性格不明遺構

SX 01（第16図）

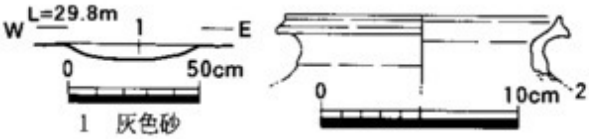
2区IIIで検出した長さ2m・幅0.5mの溝状の落ち込みである。磨滅した弥生土器細片1を出土した他，埋土に多く炭化物を含んでいた。埋土の色から古代頃のものと判断する。



第16図　SX 01・03断面図（1/30）

SX 02（第17図）

2区III南西部で検出した。長さ6mの浅い溝状の落ち込みである。2は弥生土器の壺である。磨滅している。口縁平坦面には1～2条の凹線が走る。この他弥生土器細片2が出土している。土器の磨滅・埋土から弥生時代とは判断しにくく，時期不明としておく。



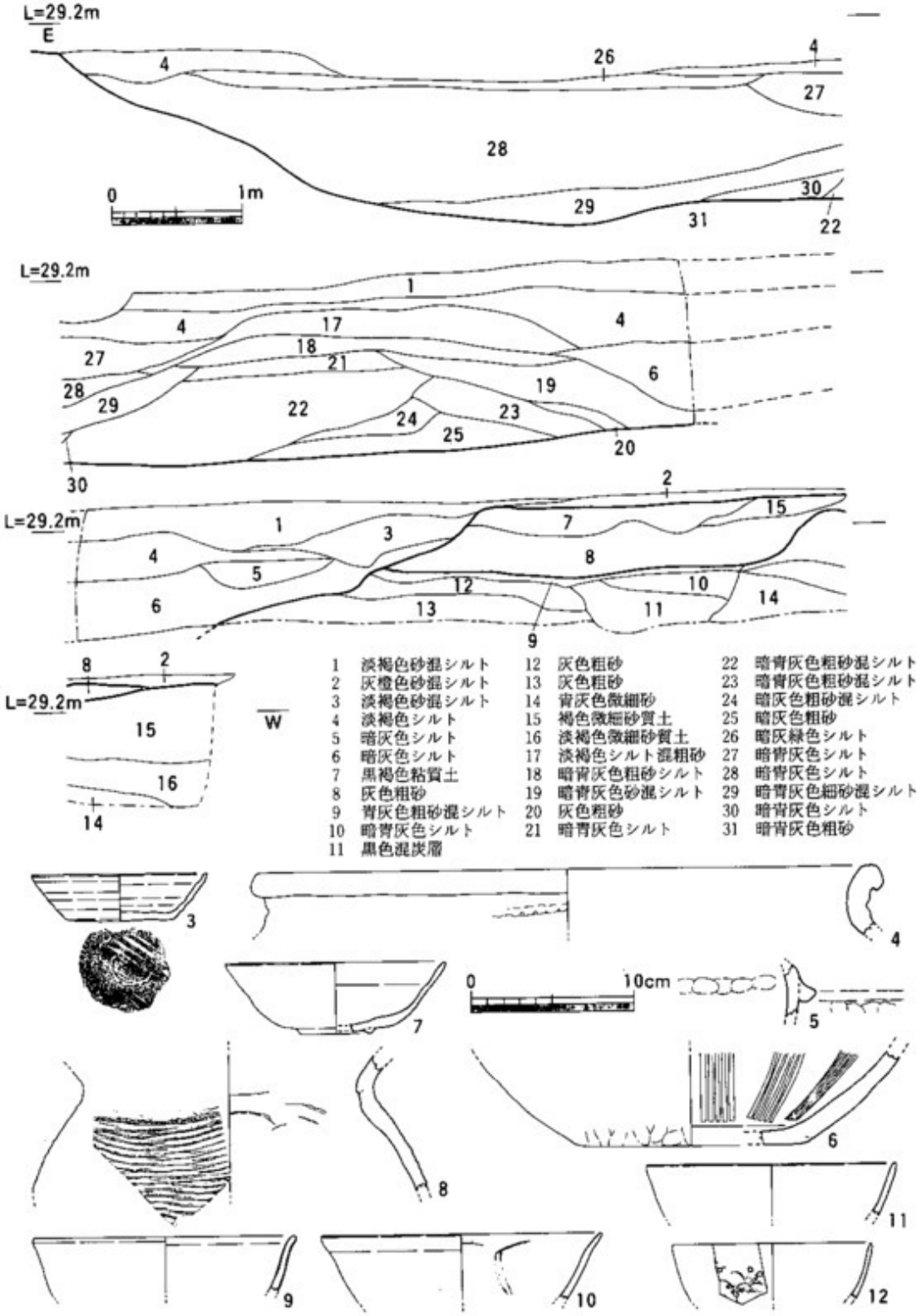
第17図　SX 02断面図(1/30)，出土遺物実測図(1/4)

SX 03（第16図）

2区III北部で検出した。径約1mの土坑状のものである。遺物の出土はなく，埋土の色からSX 01同様古代頃のものと判断する。

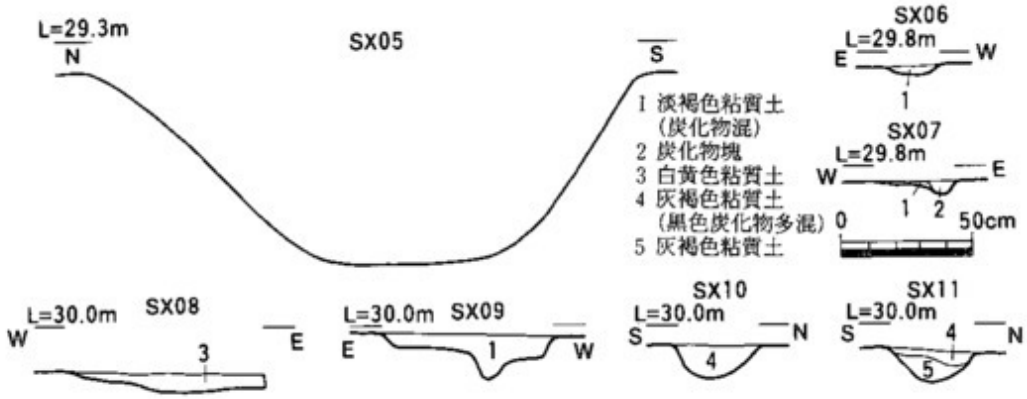
SX 04（第18図，図版8）

2区IV南部で検出した。東西径約15mの深い落ち込みである。南部の平面形を確認していないが，町道際での土層断面(第13図調査域土層図⑥)によるとSX 04に対応するものが見られないことから，町道下には及んでいない。底までの傾斜は緩やかで，最深部で深さ1.6mほどある。第18図断面図は埋土の堆積が単純でなかったことを示している。中央部（17～19・21・22層等）のみある程度まで堆積した後に周囲が堆積し，これが2度繰り返される。自然の堆積では起こるものでなく，人為の介在を考慮せざるを得ない。一案として，SX 04を溜め池状のものと判断した上で，泥土の浚渫により底に高低ができ，それが繰り返された後に最終埋没したと考えておく。



1 淡褐色砂混シルト
2 灰橙色砂混シルト
3 淡褐色砂混シルト
4 淡褐色シルト
5 暗灰色シルト
6 暗灰色シルト
7 黒褐色粘質土
8 灰色粗砂
9 青灰色粗砂混シルト
10 暗青灰色シルト
11 黒色混炭層
12 灰色粗砂
13 灰色粗砂
14 青灰色微細砂
15 褐色微細砂質土
16 淡褐色微細砂質土
17 淡褐色シルト混粗砂
18 暗青灰色粗砂シルト
19 暗青灰色砂混シルト
20 灰色粗砂
21 暗青灰色シルト
22 暗青灰色粗砂混シルト
23 暗青灰色粗砂混シルト
24 暗灰色粗砂混シルト
25 暗灰色粗砂
26 暗灰緑色シルト
27 暗青灰色シルト
28 暗青灰色シルト
29 暗青灰色細砂混シルト
30 暗青灰色シルト
31 暗青灰色粗砂

第18図　SX 04断面図（1/50），出土遺物実測図（1/4）



第19図　SX 05～11断面図（1/30）

遺物はそれほど多くは出土していない。3は土師器杯である。底にヘラ切り後に回転台と土器の間にヘラを差し込んだと思われる痕跡が残っている。4は土師質の甕である。外面に撫で消せなかった叩きの痕跡が残っている。北東2kmに同じ横断道調査で発見された中世土器生産遺跡である国分寺楠井遺跡があり，形態等から5・6とともにそこの生産品であると考える。それにより14世紀ごろのものと判断する。6は土師質のすり鉢で卸し目は5本1単位である。7・8は形態等から十瓶山窯跡産と思われ，13世紀頃のものである。9・10は中国産青磁で，9は釉が厚い。10は内面に花文が描かれる。12世紀後半から13世紀前半頃のものである。11は京焼風陶器で17世紀後半から18世紀前半のものである。12は肥前磁器の染付碗である。口縁形態から18世紀代のものと考える。

以上より，SX 04は18世紀以降の遺構である。性格については旧河川上に位置すること，またその形態から溜め池の可能性を考えている。明治41年大日本帝国陸地測量部発行の二万分の一地形図「國分」には溜め池らしい印は記されてなく，この時期には現在の水田に変化している。

SX 05（第19図）

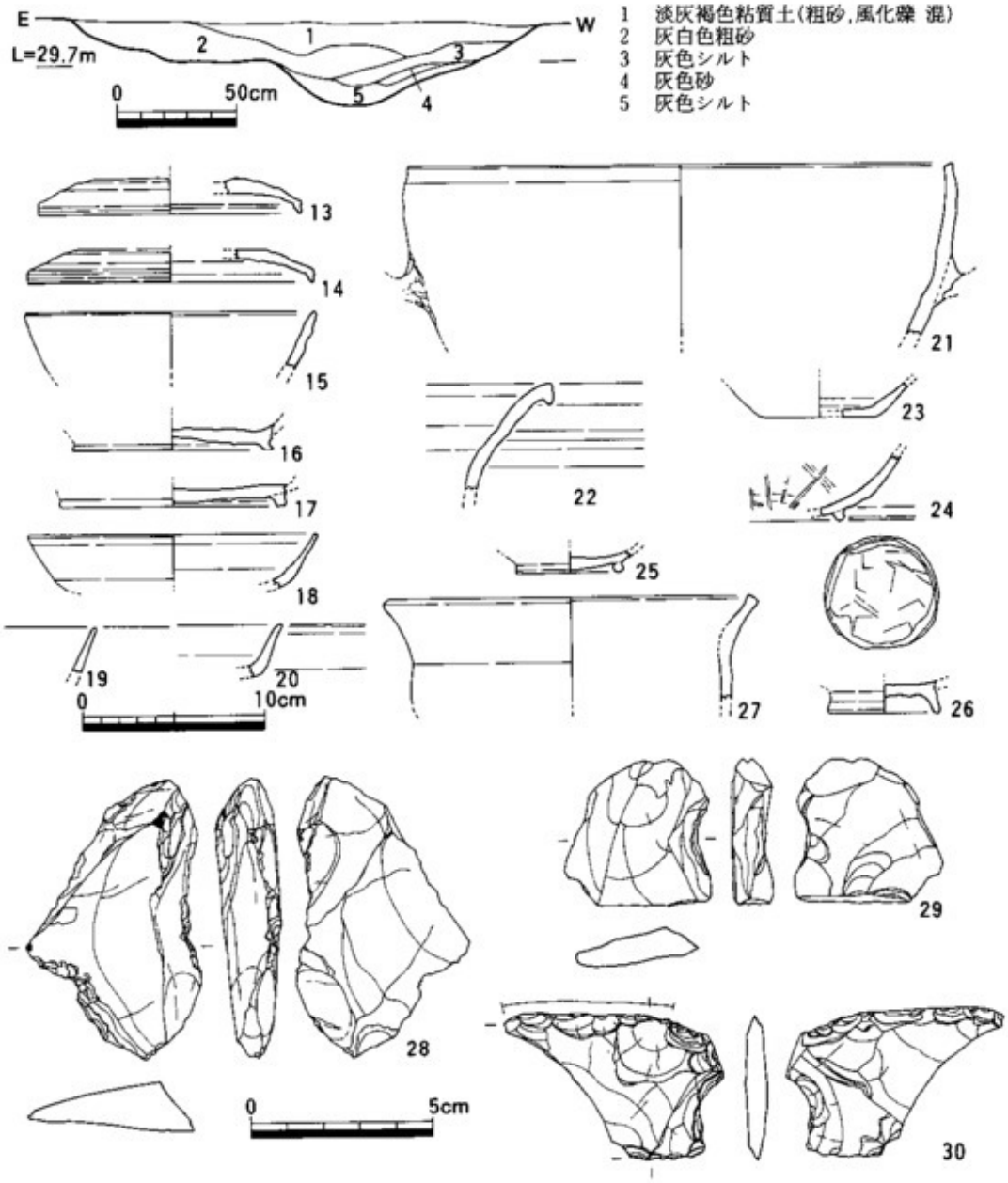
2区Ⅳ北部で検出した。径約2m・深さ約0.7mの比較的大きな土坑状のものである。遺物の出土はなく，時期も判断できない。

SX 06・07（第19図）

3区Ⅰ北部で並んで検出した。浅く小さい窪みで，埋土には炭化物が多く含まれていた。遺物の出土はないが，埋土色から比較的新しい時期のものと考える。

SX 08（第19図）

3区Ⅲ南部で検出した。長さ4mの溝状のもので，東側は予備調査トレンチで削られて



第20図　SD 01断面図（1/30），出土遺物実測図（1/4，1/2）

いる。中からは須恵器片1，土師器細片1，中世以降の土師質土器1が出土した。埋土色から比較的新しい時期のものと考える。

SX 09（第19図）

3区III中央部で検出した。全体に浅いが，中心が若干深い。埋土には炭化物が多く含ま

れていた。遺物の出土はないが，埋土色から比較的新しい時期のものと考える。

SX 10・11（第19図）

3区V南部で検出した。径30cm程の小さな窪みで，埋土には炭化物が多く含まれていた。遺物の出土はないが，埋土色から比較的新しい時期のものと考える。

4　溝

SD 01（第20図，図版11）

1区西端で検出した。南端でSD 02と合流する。溝底の標高は南ほど低く，SD 02との合流部では30cmほどの急激な落ち込みを示している。断面図は第10図にも掲載されている。埋土はシルトや砂の層が細かく堆積しており，水の流れが絶えずあったことを窺わせる。

13～22は須恵器である。17は底外面に左回りの粘土紐巻き痕が残る。21はやや軟質である。236と同一個体の可能性がある。23は土師器杯である。24～26は内面黒色の黒色土器である。24は内面放射状磨き，26は底内面にヘラの木口痕が多数残る。27は土師器甕である。28・29は旧石器である。28は翼状剝片石核である。下部は翼状剝片をとった後に折れている。30は石庖丁である。他に中量の須恵器・土師器片等が出土している。

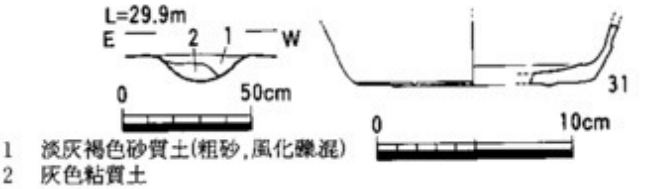
24～26の存在からSD 01は11～12世紀ごろの溝と考える。

SD 02（第21図，図版11）

1区で検出した。細く浅い直線の溝で，N06°Wの向きに掘削されている。溝底の標高は一定しており，SD 01との合流後のみ著しく低い。

31は須恵器杯である。他に少量の須恵器片等が出土している。

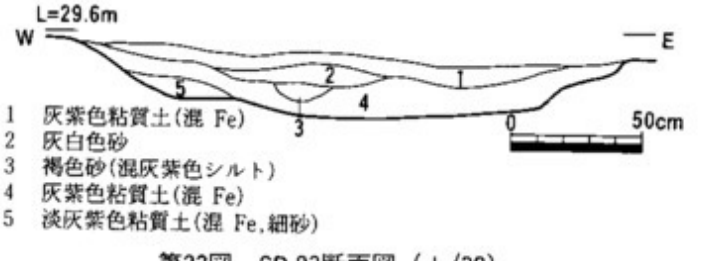
SD 01と合流することから，それと同時期の溝と考える。



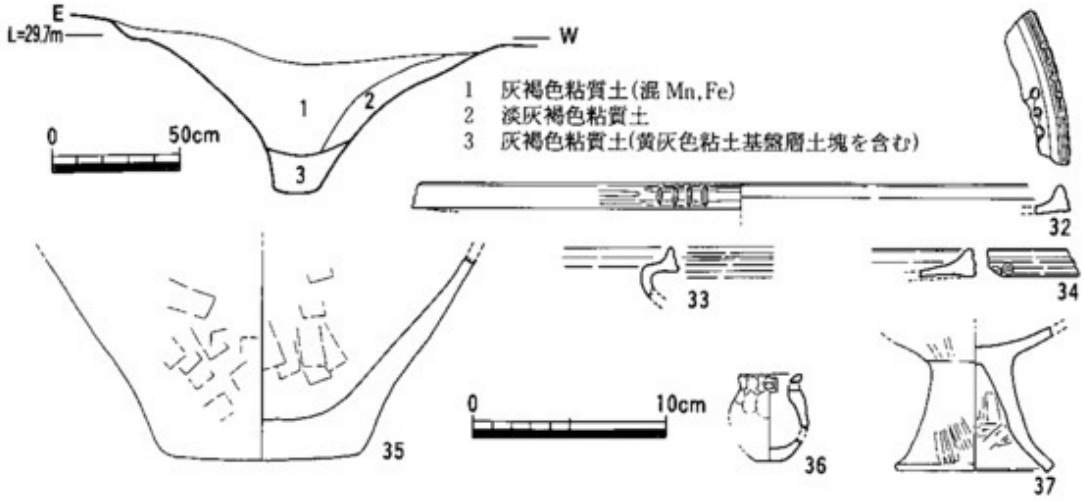
第21図　SD 02断面図（1/30），出土遺物実測図（1/4）

SD 03（第22図）

1区I中央部で検出した。幅の広い溝で，溝底の標高は北が低い。埋土は中央に砂の層を噛む。1区II



第22図　SD 03断面図（1/30）



第23図　SD 04断面図（1/30），出土遺物実測図（1/4）

側では未検出で，これは動物の足跡痕（SZ 01）の下層の確認を怠ったためか，消滅しただけなのかわからない。第12図調査域土層図⑤では該当する断面は見あたらない。

遺物は弥生土器の細片が1つ出土したのみである。

時期判断は難しいが，埋土の色を包含層と比べるなら，弥生時代から古代となろう。SZ 01との関係も明らかにできなかった。

SD 04（第23図）

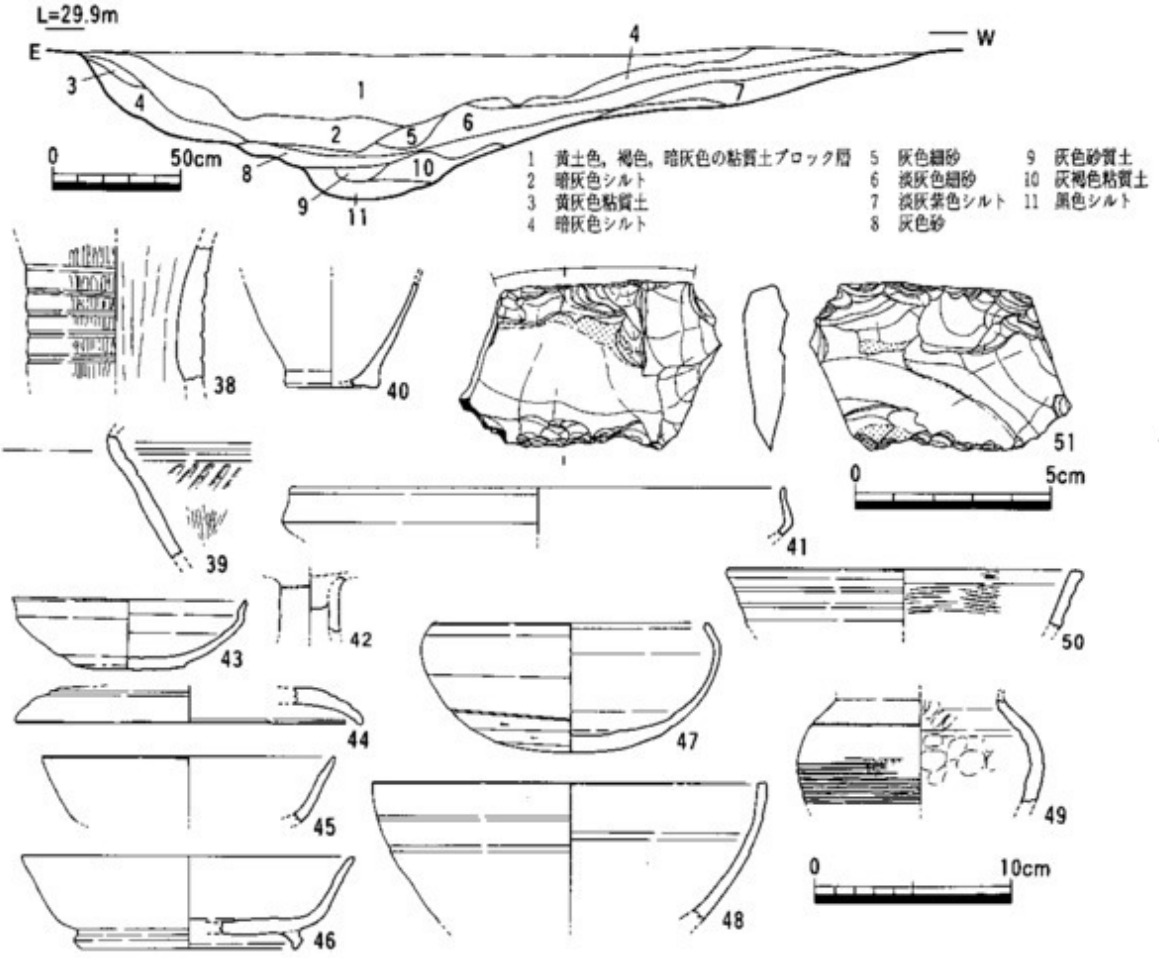
1区東部で検出した。調査域中央を南北に抜ける微高地の西縁辺部に作られている。道路北の2区Ⅳで少し顔を覗かせ消える。底幅が上面に比べて極端に狭い逆台形の溝で，溝底の標高は北が低い。埋土底には基盤層土の塊が多く堆積している。

溝内からは中量の弥生土器片が出土した。いずれも磨滅している。32・34は竹管文を施す。34は下面が剝離している。36は口縁下に穿孔が行われる。数は不明である。37は外面が磨かれている。

出土土器から，SD 04は弥生時代Ⅳ期の溝と考える。

SD 05（第24図，図版12）

1区西部で検出した。平面あるいは後述する遺物から，SD 01・02より古いと判断したが，第10図の断面にはSD 01・02の左に現れない。溝の向きからSD 01・02と重なってしまい，見あたらないのかもしれない。溝は幅広く深い。溝の向き・出土遺物から後述するSD 13と同一のものであると考えられる。この場合溝底の標高は全体的な傾向として南に行くほど低くなる。埋土は中位に砂層が堆積し，溝の半分ほど埋没した段階で埋め戻しを行なった



第24図　SD 05断面図（1/30），出土遺物実測図（1/4，1/2）

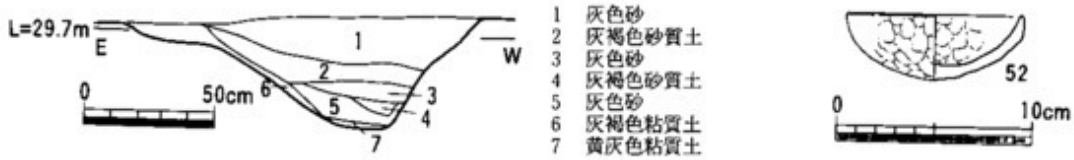
らしく1層は多数の基盤層土の塊で形成されていた。

SD 05からはコンテナ1箱程度の弥生土器・須恵器等が出土している。38はヘラ磨き後に沈線に近い凹線を施す。39は壺の肩部と判断したが膨らみがなく，全体像が思い浮かばない。沈線2条の下に連続ヘラ圧痕文を施す。40は小型の甕である。42は高杯の脚部である。43〜49は須恵器である。46・47は砂粒が左回りの回転ヘラ削りを行う。49は外面に叩き目が残る。50は土師器甕である。51は両面が一部磨滅する。

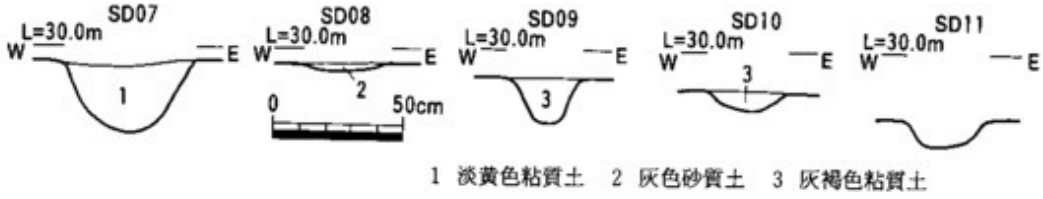
出土須恵器から，SD 05は7世紀後半の溝と考える。

SD 06（第25図，図版12）

1区中央で検出した。逆台形の大きな溝で，SD 02等とほぼ同じ向きに掘削されている。埋土は灰色砂と灰褐色の粘性のある砂が互いに堆積する。溝底の標高は南がわずかに高い。



第25図　SD 06断面図（1/30），出土遺物実測図（1/4）



第26図　SD 07～11断面図（1/30）

SD 05より古い。

SD 06からは弥生土器片が少量出土している。52は弥生時代終末から古墳時代初頭頃の鉢である。粘土塊から引き延ばして成形している。胎土には雲母粒を多数含み，このような胎土は付近では珍しい。

SD 07（第26図，図版12）

1区II西端で検出した。細い直線の溝で，N06°Wの向きに掘削される。図版12に示すように溝西肩に沿って杭列を検出している。溝内からは中世の土鍋片1が出土している。埋土色，杭が遺構面より上まで残っていること，現行の地割り境ともなっていることなどから，より新しい近世以降の溝と考える。

SD 08（第26図）

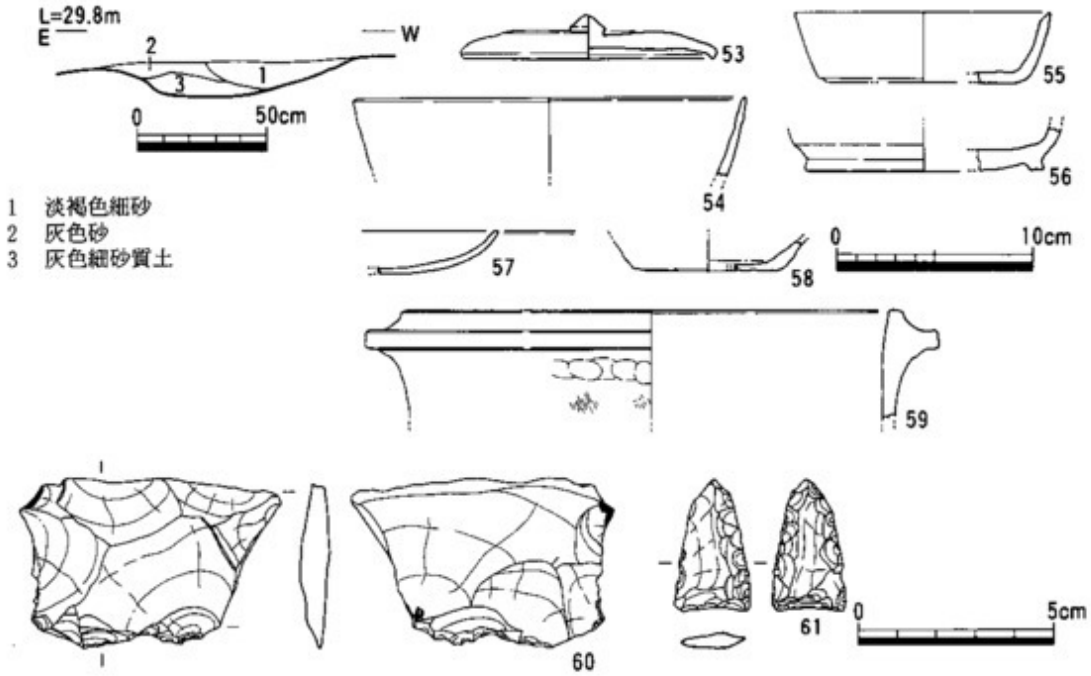
SD 07の東に並んで検出した。同様に細い直線の溝で浅い。向きも全く同じであることからすれば，SD 07の前身の溝と考えることも可能である。溝内からは弥生土器・須恵器片が数点出土した。

SD 09（第26図）

1区II北西部で検出した。細い溝である。土色から古代以前に属するとも考える。SD 05との関係は明らかにできていない。溝内から弥生土器の細片1点が出土した。内面はヘラ削りされている。

SD 10（第26図）

1区II中央部で検出した。細い直線の溝である。SD 07・08と同じ向きに掘削されている。SD 05より新しい。遺物の出土はない。



第27図　SD 12断面図（1/30），出土遺物実測図（1/4，1/2）

SD 11（第26図）

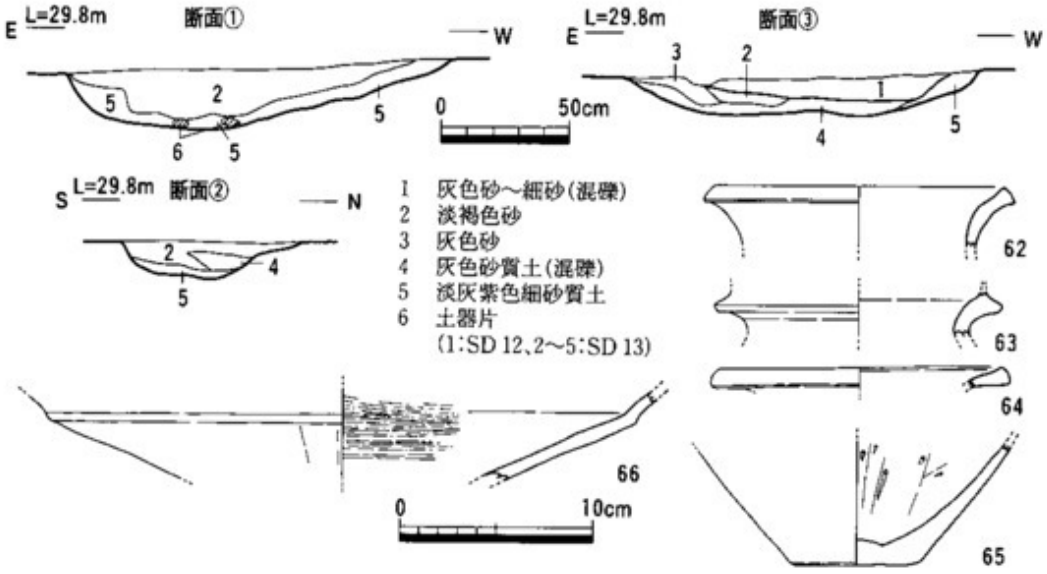
2区Ⅰ中央東寄りで検出した。細く浅い直線の溝で，N18°Wの向きに掘削される。基盤層上に弥生時代の包含層が薄く堆積した面から掘削されている。溝内からは須恵器細片3点が出土した。

SD 12（第27図，図版8・13）

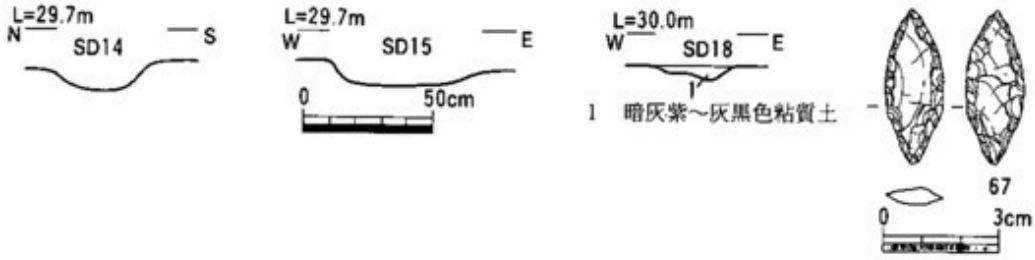
2区Ⅰ～Ⅱ西端で検出した。両調査区には中央部に周囲との標高差20cmほどで幅の広い低地が南北にひろがる。SD 12はこの低地から西の舌状丘陵末端に標高が上がり始めた地点にその裾に沿うように設けられ，南北とも調査区外に延びている。溝内の標高差は北が若干低い。第28図断面③からSD 13より新しい。埋土は砂主体であり，ある程度の水の流れが想定できる。

SD 12からは図化した遺物の他に弥生土器片が少量出土している。53～56は須恵器である。53は外面に自然釉が付着する。57～59は土師器である。57は粘土塊を薄く引き延ばして成形している。60は石庖丁と思われる。背部の細部調整がなく，加工途中で折れて捨てられたものであろう。

59から11～12世紀ごろの遺構と考える。



第28図　SD 13断面図（1/30），出土遺物実測図（1/4）



第29図　SD 14・15・18断面図（1/30），SD 18出土遺物実測図（1/2）

SD 13（第28図，図版 8 ・13）

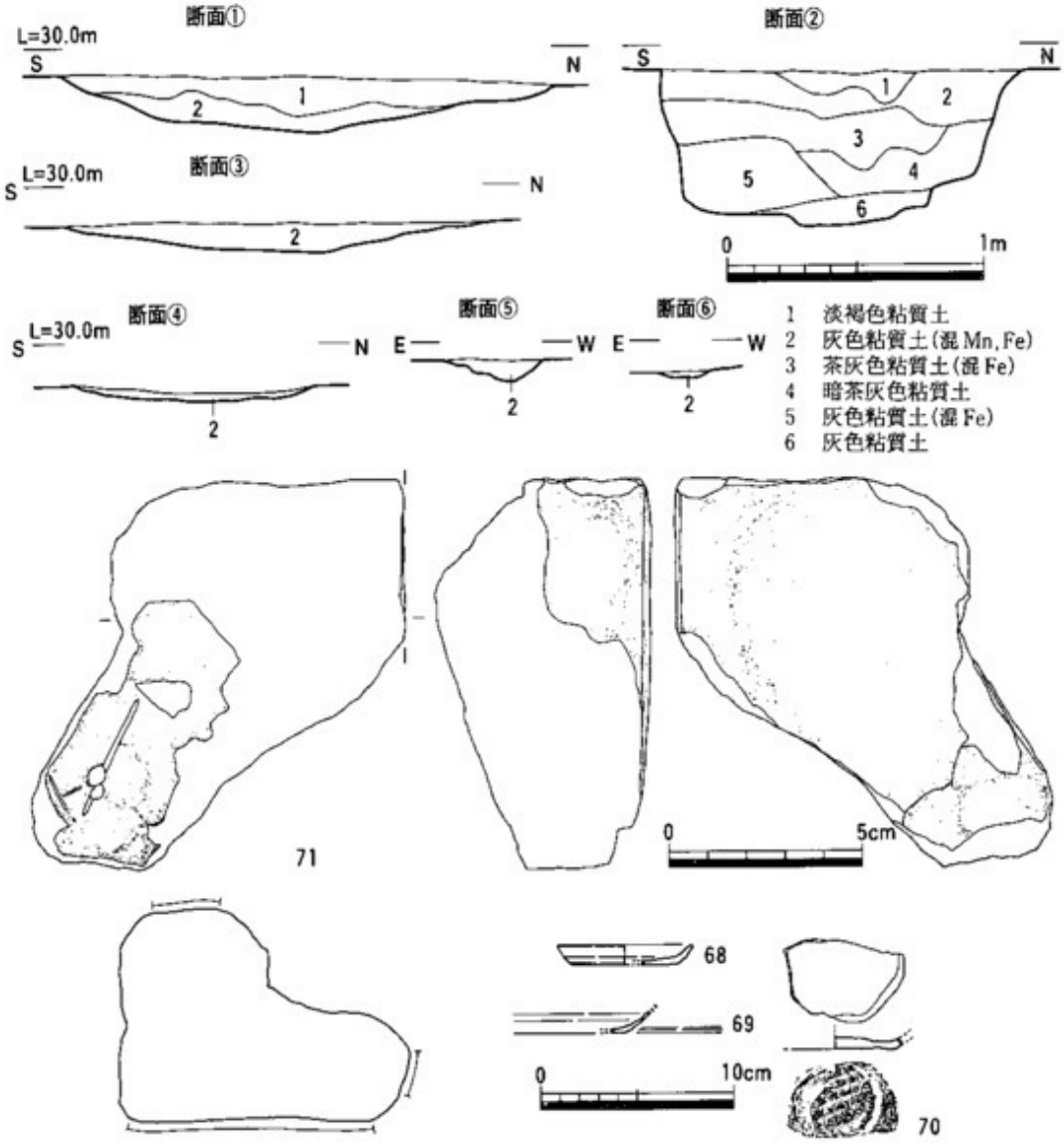
2区Ⅰ西南部で検出した。SD 12より古い。SD 12と重なった後の続きが見あたらず，埋没したSD 13を再掘削してSD 12とした可能性もある。とはいえ両者は1,000年ほどの時間差がある。またSD 13はSD 05と同一の溝の可能性がある。埋土は砂を主体とする。

溝内からは弥生土器片中量と数片の須恵器細片が出土した。62～66は弥生土器である。66は高杯で，径は確定できない。

弥生土器は磨滅が著しいものが多く，SD 05の続きとすれば，SD 13は7世紀後半のものとも考えられる。

SD 14（第29図）

2区Ⅱ床土直下で検出した。細く浅い溝で，東西方向に掘削されている。溝内からの遺



第30図　SD 19断面図（1/30），出土遺物実測図（1/4，1/2）

物の出土はなかった。

SD 15（第29図，図版16）

2区III床土直下で検出した。調査区内を南北に抜けており，溝底の標高は北が低い。溝内からの遺物の出土はなかった。

SD 17

3区Ⅰで検出した。3区中央を南東―北西方向に抜ける浅い低地があり，この低地の北

肩に低地に向けて排水するかのような溝として掘削されている。低地には厚さ30cmほどで弥生時代の包含層が堆積し，その上に10cm以下の古代の包含層が堆積している。

溝内から弥生土器の細片数個が出土した。いずれも磨滅している。

SD 18（第29図）

3区Ⅰで検出した。SD 17同様低地に向けて掘削されたと考えられる溝である。細くて浅い。

溝内から奈良時代の須恵器片1と67が出土した。

SD 19（第30図，図版13）

3区Ⅱ～Ⅲで検出した。3区Ⅱ側ではN87°Eの向きに掘削されている。削平されたためか西は狭く，東は広い。東の3区Ⅲ側では北に直角に折れ曲がる。予備調査のトレンチに壊されたため，南北溝の幅はわからない。折れ曲がりの角の地点のみ急な落ち込み状に深くなっている。

溝内から須恵器・土師器等が少量出土した。68～70は土師器である。70は底部のみが残存することから，円盤状土製品の破片の可能性もある。外底にヘラ切り後の筋状の圧痕が残る。71は砥石で研ぎ面3面が残る。左面には細い擦痕もある。

出土土器から，SD 19は12～13世紀ごろの遺構と考える。

SD 20（第31図）

3区Ⅱで検出した。N02°Wの向きに掘削されている。細くて浅い溝である。溝内からの遺物の出土はなかった。SD 21と埋土が似ている。

SD 21（第31図）

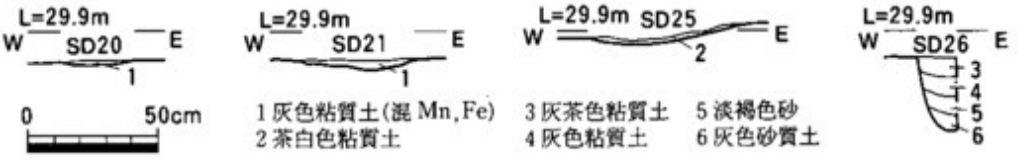
3区Ⅱで検出した。N06°Eの向きに掘削されている。細くて浅い溝である。溝内から磨滅した弥生土器・須恵器・土師器細片が数点出土した。埋土色から中世頃の遺構の可能性がある。

SD 24（第32図，図版14）

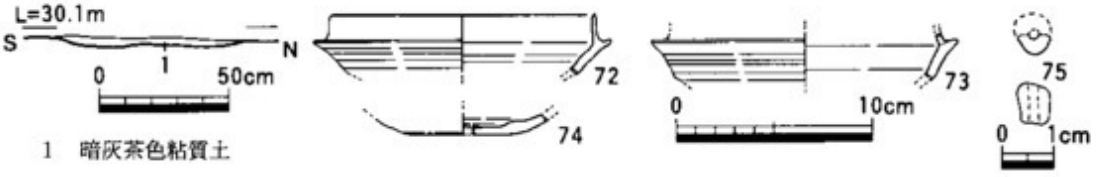
3区Ⅲ～Ⅳにかけて検出した。N34°Wの方向を向き，北で大きく屈曲する。南では小さな支流を2つ伴う。浅く，溝底の深さはほぼ一定している。支流はより浅い。

溝内から弥生土器・須恵器片等が少量出土した。72～74は須恵器である。72・73は同一個体の可能性がある。74は外面ヘラ切りで，蓋の可能性も残る。75はガラス玉で青色をしている。

72の立ち上がり部の形態と74の外面調整から，SD 24を6世紀後半～7世紀前半の溝と



第31図　SD 20・21・25・26断面図（1/30）



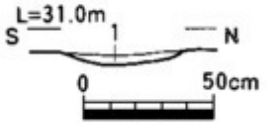
第32図　SD 24断面図（1/30），出土遺物実測図（1/4，2/3）

第33図　SD 27断面図（1/30），出土遺物実測図（1/4）

考える。

SD 25（第31図）

3区III南部で検出した浅く短い溝である。SD 19より新しい。溝内からの遺物の出土はなかった。



1　淡灰褐色粘質土

第34図　SD 28断面図（1/30）

SD 26（第31図，図版14）

3区V東端で検出した。調査区東境となる用水路に溝の東肩を壊され，溝幅は明らかでない。四角な突出部が西に付属するが，別遺構の可能性もある。溝内からの遺物の出土はなかった。

SD 27（第33図，図版15）

3区V南東部で検出した。溝の北端は深さ10cm強の低地に達し，その上に弥生時代の包含層が堆積している。溝底の標高はほぼ一定だが，低地に達した地点は低い。

溝内からは弥生土器片が少量出土している。76は甕で，口縁に凹線が2筋めぐる。

出土土器からSD 27は弥生時代IV期の溝と考える。

SD 28（第34図）

3区V中央で検出した。浅い直線の溝で，N89°Eの向きに掘削されている。溝内からは磨滅した弥生土器細片1が出土したのみである。上述の低地に達した地点で消滅するが，溝の時期も明らかでなく，低地との関係は結論が出せない。

第35図　SZ 01検出状況（Ⅰ区Ⅱ，1/20）

5　その他の遺構

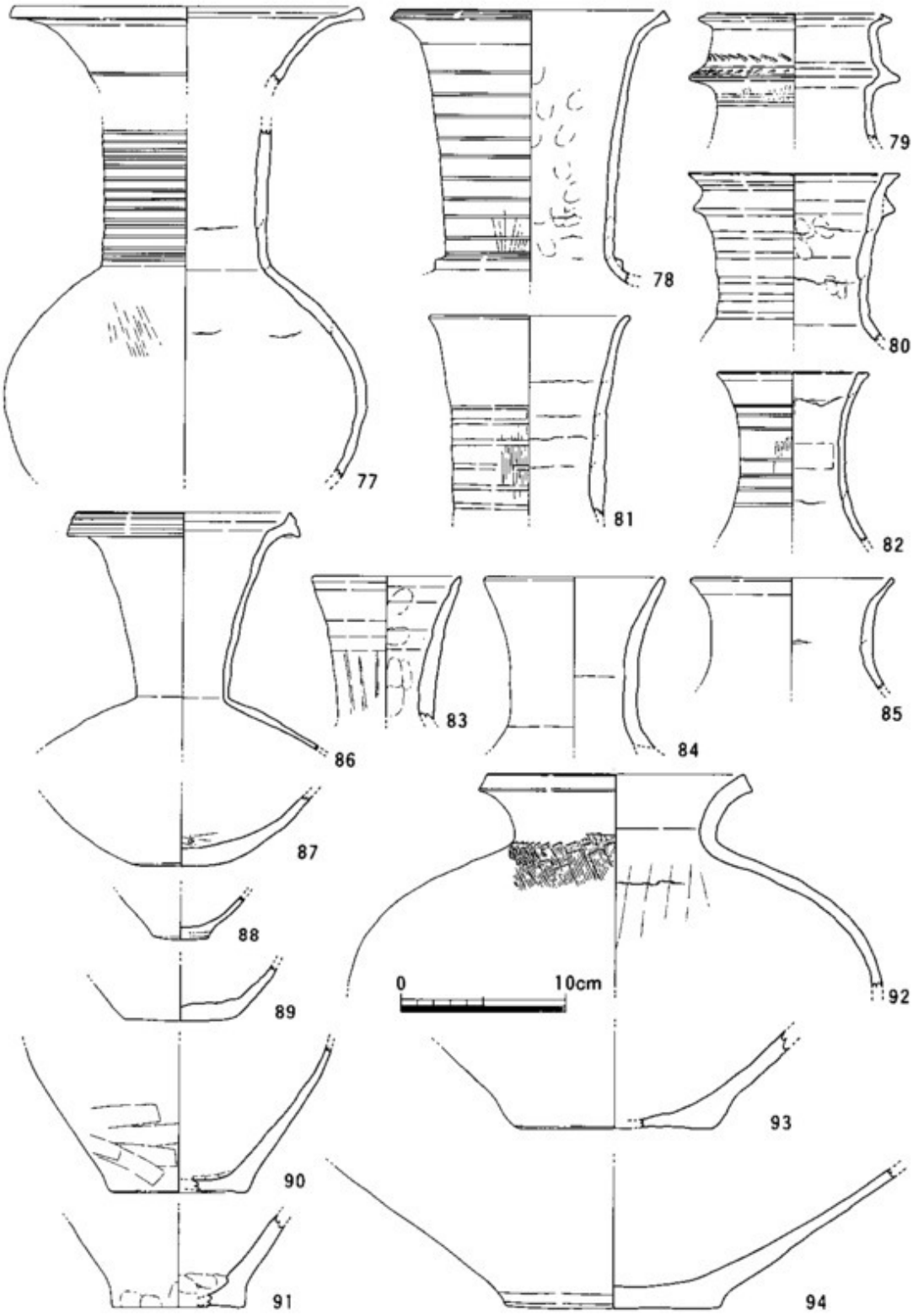
SZ 01（第７・13・35図，図版15・16）

調査域内には低地が幾つか存在し，微妙な等高線の出入りがある。その中の西側の川跡の低地で動物の足跡を検出した。１区Ⅰ・ⅡではSD 03と重なる地点（SD 03との関係は不明。SD 03の項参照）で検出している。第13図調査域土層図⑦13層の土層線の乱れはこの多くの足跡を残すような行為の結果を示している。その上層の12層は砂質土で，足跡の中には砂が埋まっていた。一方，２区Ⅲでは中央を南北に貫く川跡の上面で，数ヶ所に分かれて検出した。１区同様密集しており，第７図21・24・25層の粘質土上面で検出した。上にかぶさる20層が砂である。検出面・状況とも似ており，すべて同一の時期の所産と判断した。但し層位から見た時期判断では，弥生時代Ⅳ期より後で中世以前としか言えない。両地点でプラント・オパール分析を行っており（第４章第１節），１区Ⅱ側では粘質土の13層でプラント・オパール含有量の小さなピークが認められる。痕跡を残した動物の種については，判明するものに雨滴状の痕跡が２個１組となる偶蹄目のものがあり，遺跡に痕跡を残すことが多い牛とするなら，当時の限られた役割の中から湿地と関係するのは水田の牛耕となり，プラント・オパールと結びつきやすい。

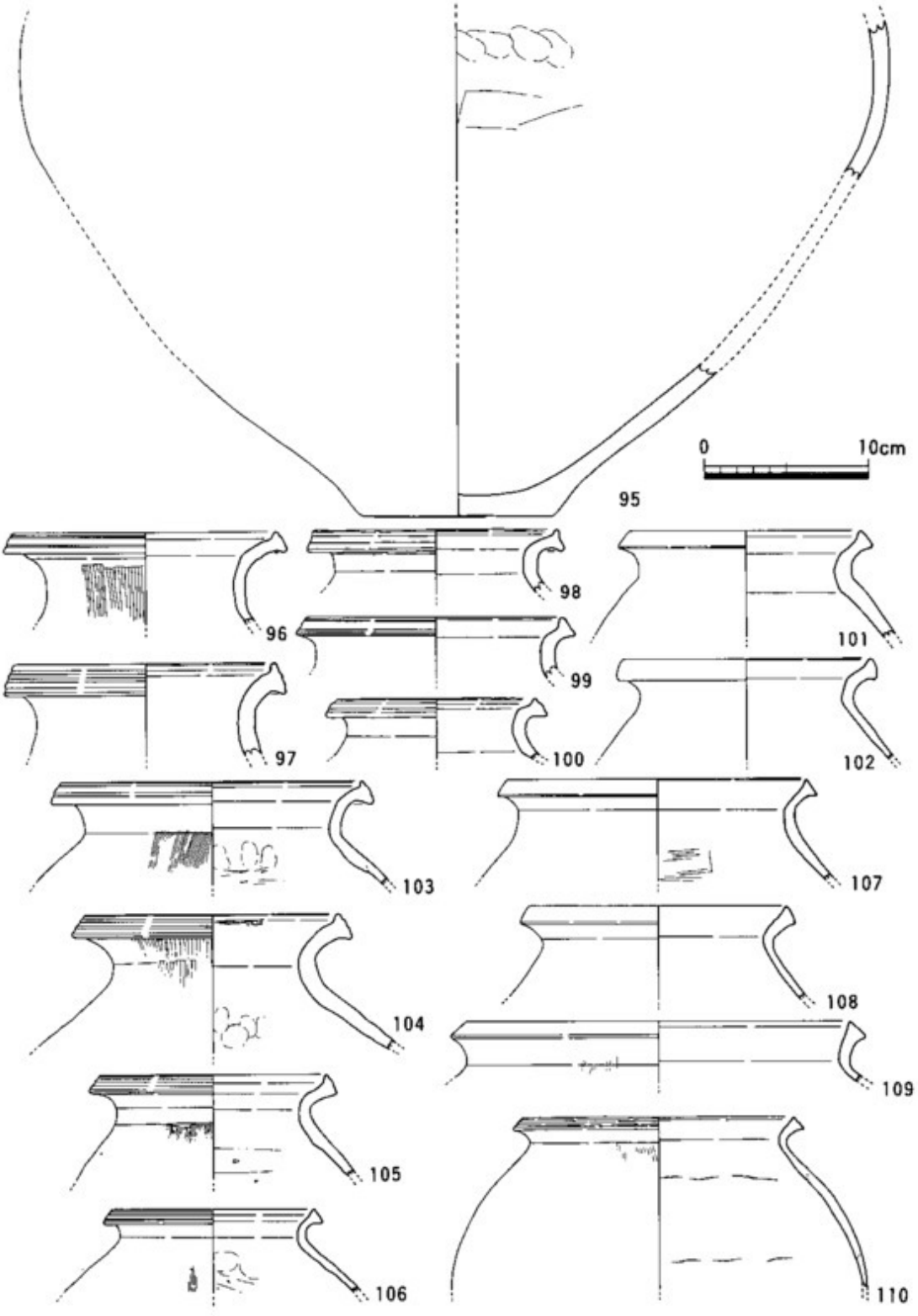
6　包含層出土の遺物

全出土遺物の７割ほどが包含層から出土した。もとより全出土遺物といえどもコンテナ30箱以下の量でしかない。出土地点では２区Ⅰでの出土が飛び抜けて多く，３区は少ない。３区は微高地と浅い低地という地形のため包含層が少ないことにもよろうが，周辺の地形を含めて考えてみた場合，西の舌状丘陵末端に居住域があったとすれば，居住域から離れるほど遺物の出土が少なくなるということも考えられるであろう。２区Ⅰでの出土は，川跡が地形的に特に低く，包含層が厚いことにもよるのであろう。

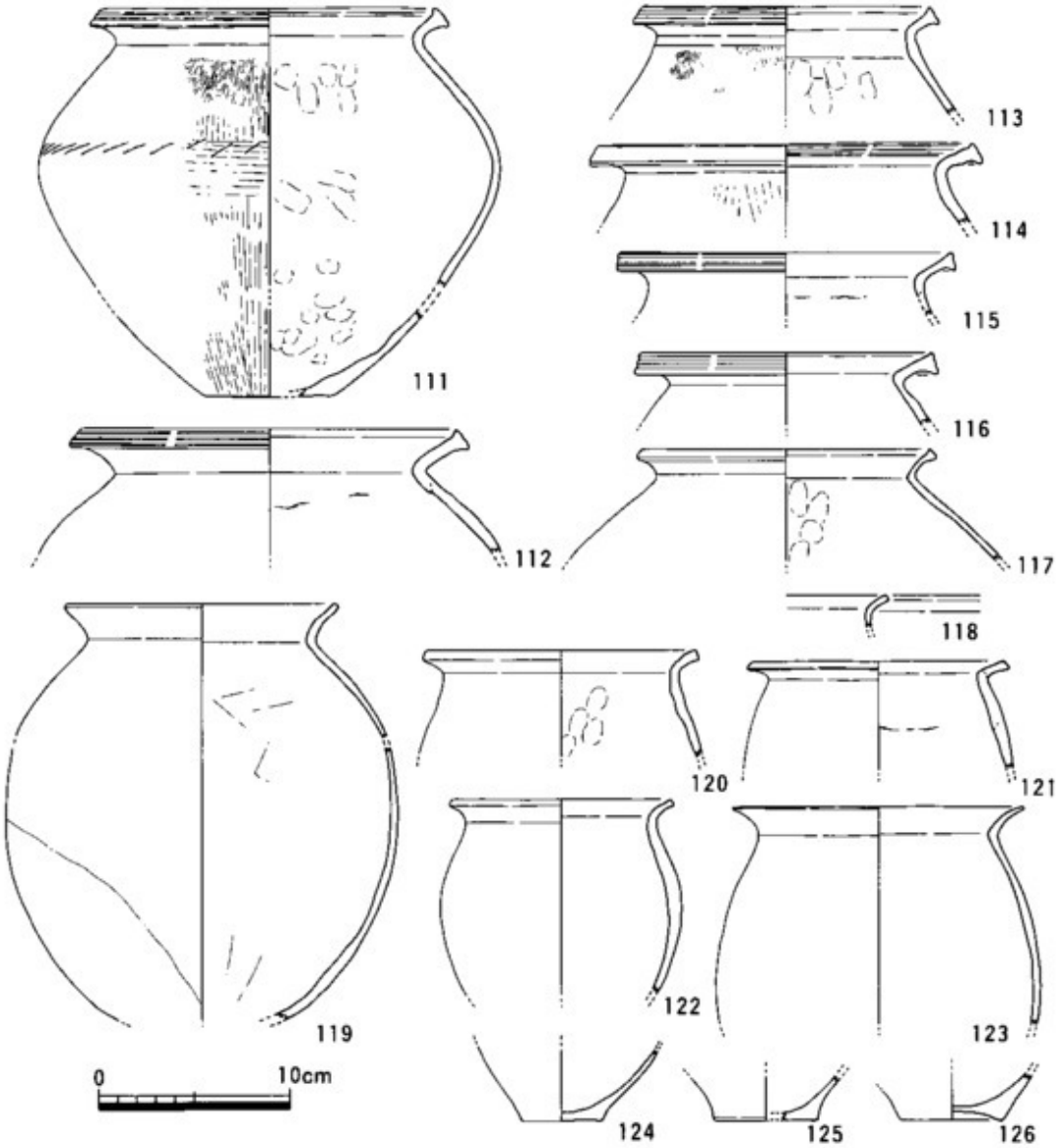
77～146は弥生土器である。77～110は壺である。77～81は若干上に開く円筒状の頸部を持つ。77は口縁が特に大きく開く。この形態の器種に占める比率は低い。80・81は凹線がめぐり，77・78は沈線に取って代わられている。78は下川津Ｂ類の胎土を持つ。79は頸部の途中が特徴的な屈曲を持つ。83の凹線は幅が広い。86は頸部のすぼまり方が大きい。92は頸部に揃えられた刷毛目上端の深い木口痕が文様となっている。87～91・93～95は壺の底である。88の底部直径をつなぐ穿孔は泥詰まりのため貫通するか明らかでない。96～110は頸部が短く丸く屈曲する壺である。96・106は凹線でなく沈線が巡る。102は下川津Ｂ類



第36図　包含層出土遺物実測図(1)（1/4）



第37図　包含層出土遺物実測図(2)（1／4）

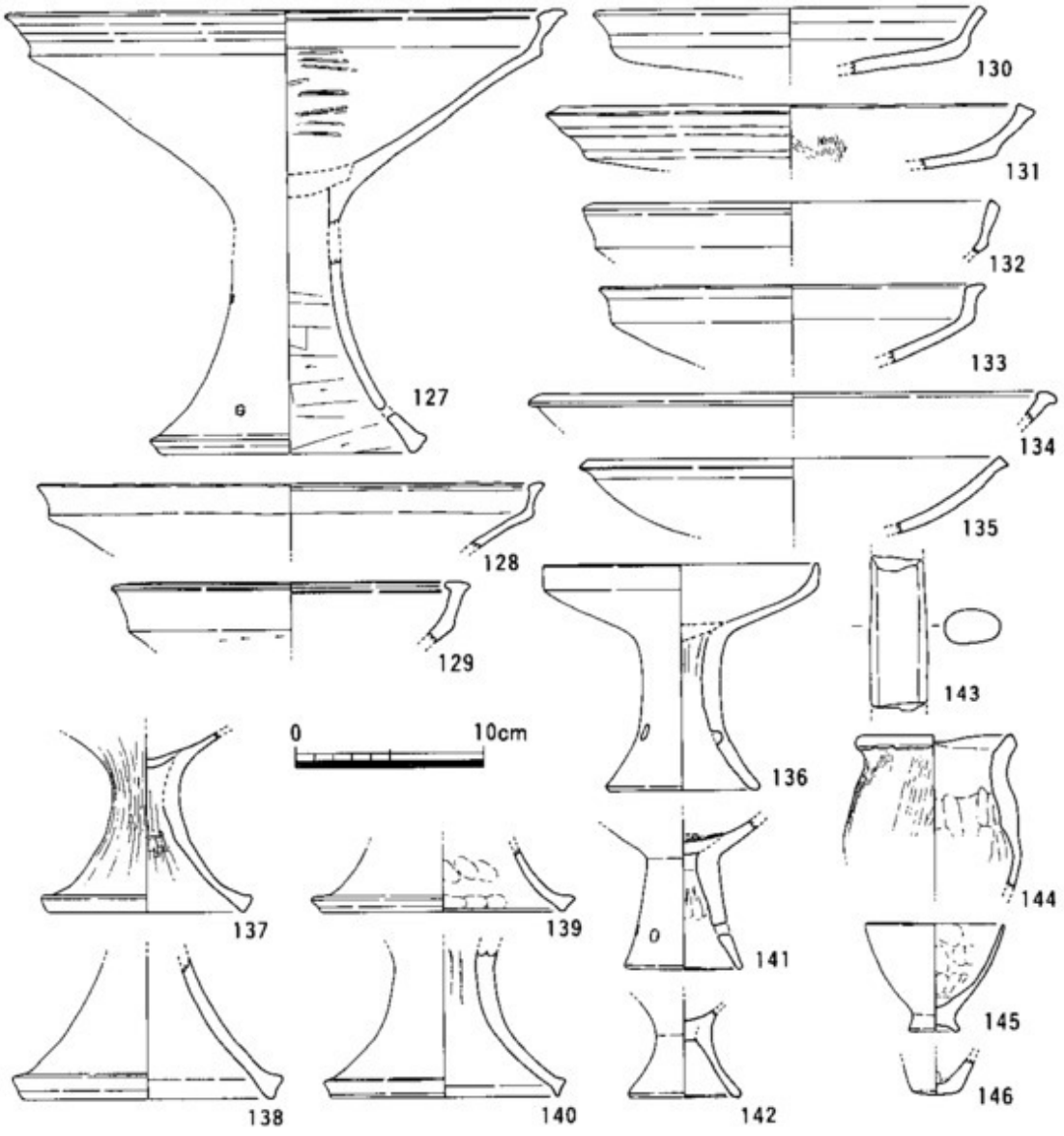


第38図　包含層出土遺物実測図(3)（1／4）

の胎土に近い。107は内面に炭化物が付着する。111〜126は甕である。111〜117は頸部の屈曲が強い。113・117は下川津B類の胎土を持つ。123は胎土に結晶片岩状の細粒を多数含む。119は球形で土師器の可能性もある。127〜142は高杯である。136の穿孔は5個の内4個が未貫通。杯部と脚部の接続は図上復元である。142は脚が小さく台付鉢かもしれない。143は大きな容器の取手らしい。145・146は小型の鉢である。

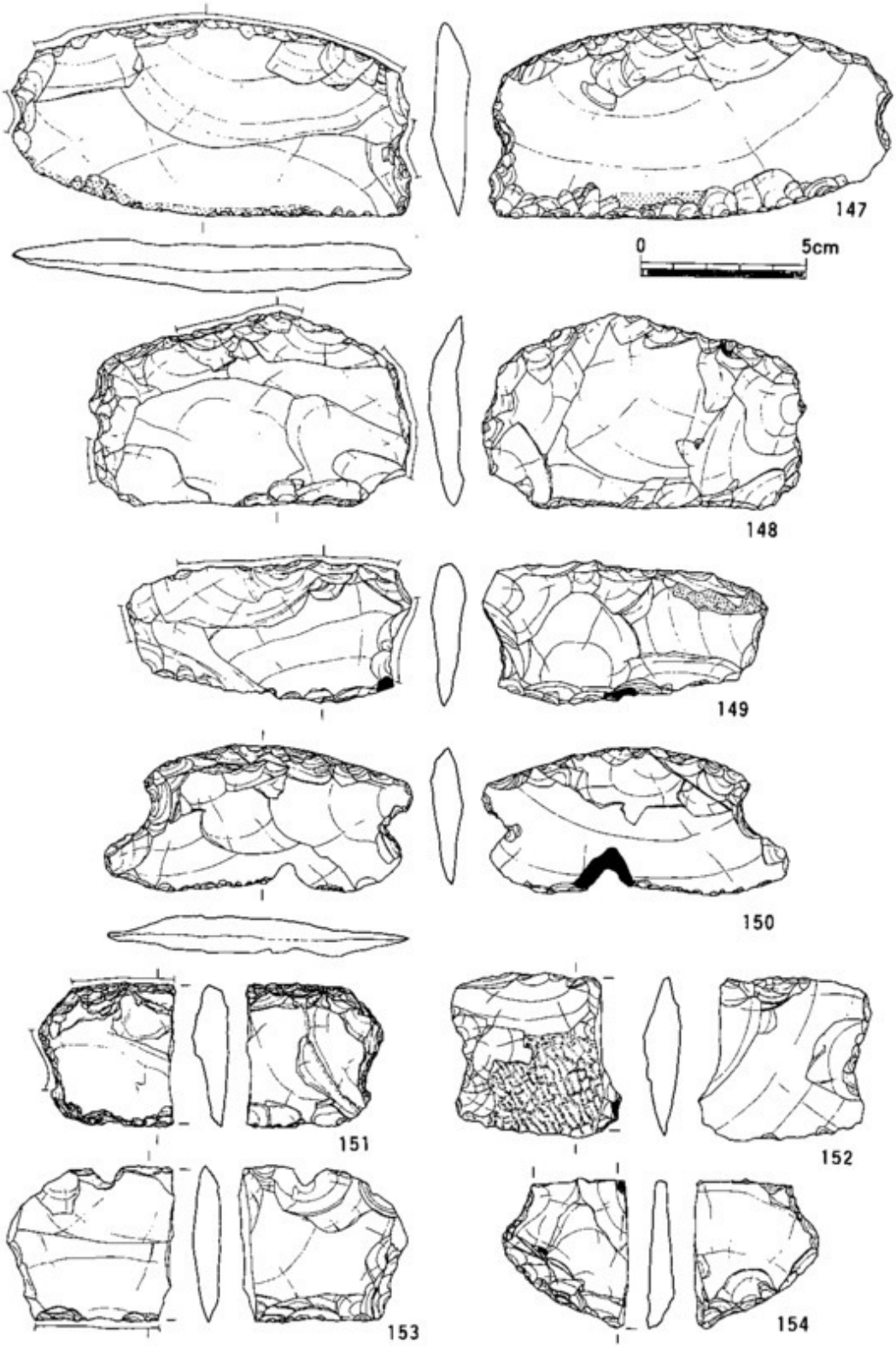
以上の弥生土器はⅣ期のものを主体とする。

147〜187は弥生時代の石器である。147〜161は石庖丁である。147は刃部が磨滅している。

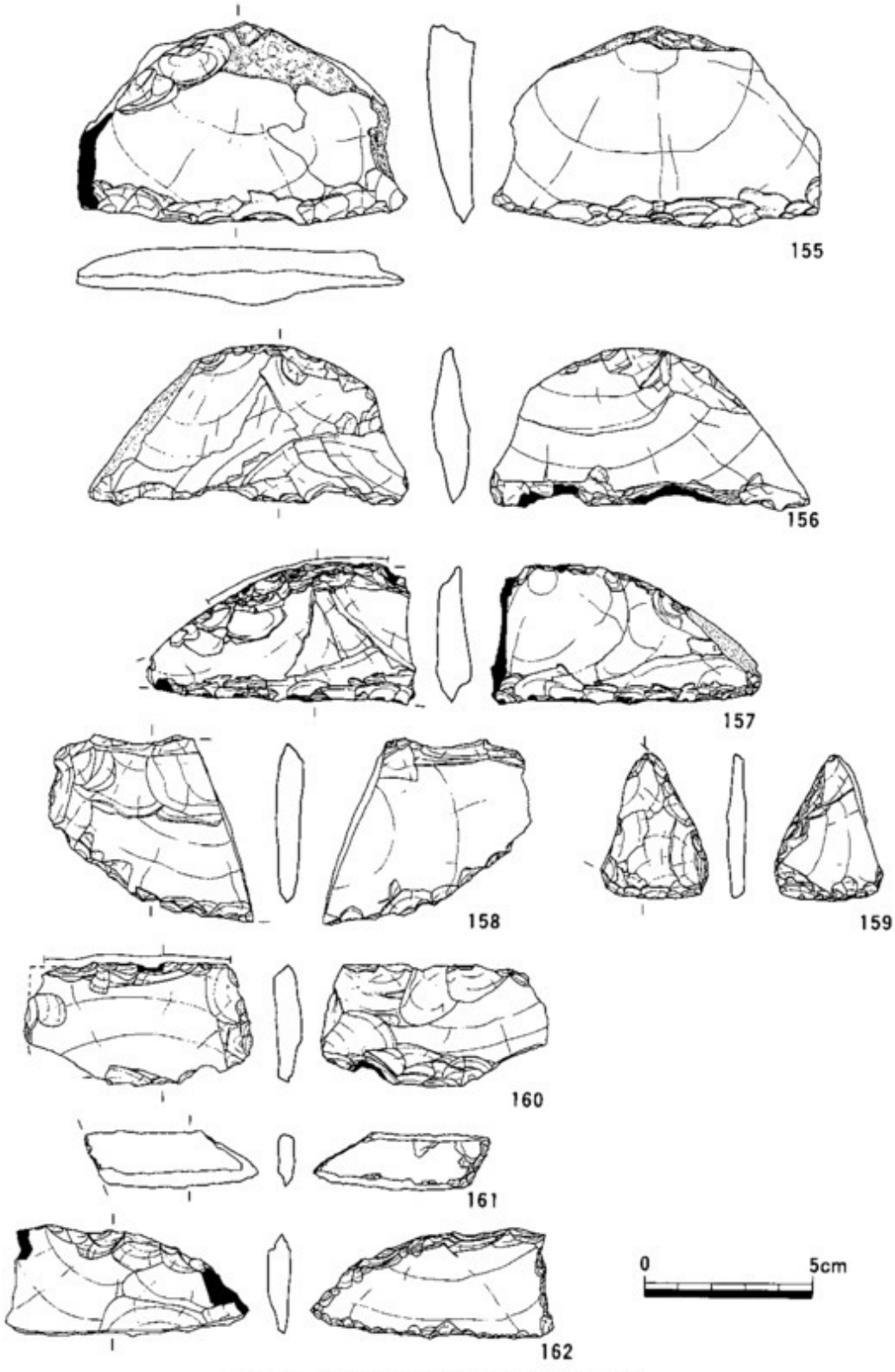


第39図　包含層出土遺物実測図(4)（1／4）

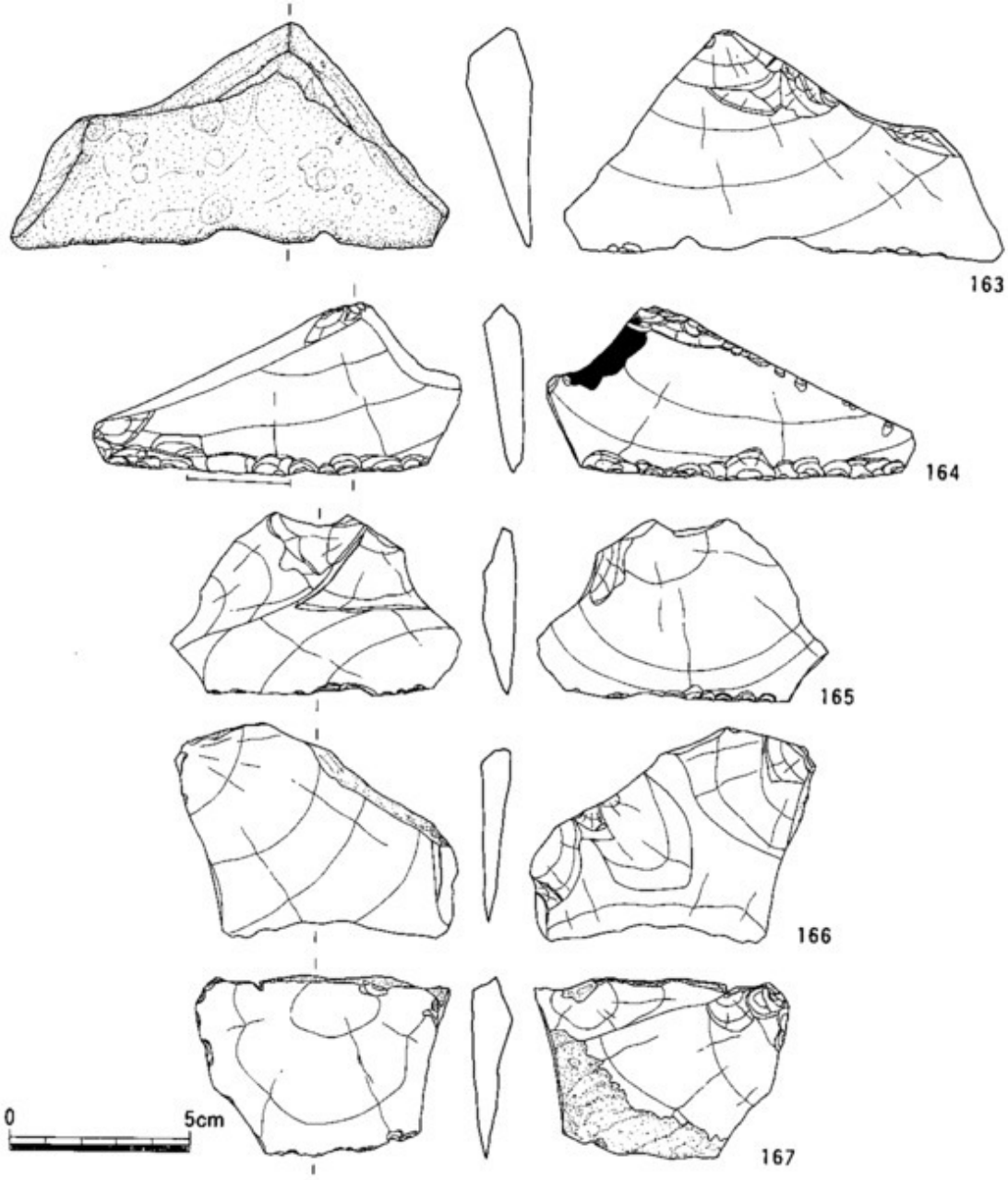
153・156は未製品か。159は他器種の可能性もある。161は結晶片岩製である。162は石鎌である。163～167はスクレイパーである。164は左面刃部が磨滅している。168～170は石斧である。170は表面の磨滅が著しい。擦痕も残り，側面と平面で方向が一致せず，垂直から少し斜めに振り下ろして用いていたらしい。171は叩き石だが，その痕跡はわずかである。172は最終的な用途は不明なものの，最初斧等として使用中に折れ廃棄したものを年を経て再加工したものであることが，剝離・調整面の風化による色の違いからわかる。173～186は石鏃である。177は側縁に見事な細部調整が施され，両面に平坦面を残さない丁寧なつくり



第40図　包含層出土遺物実測図(5)（1/2）



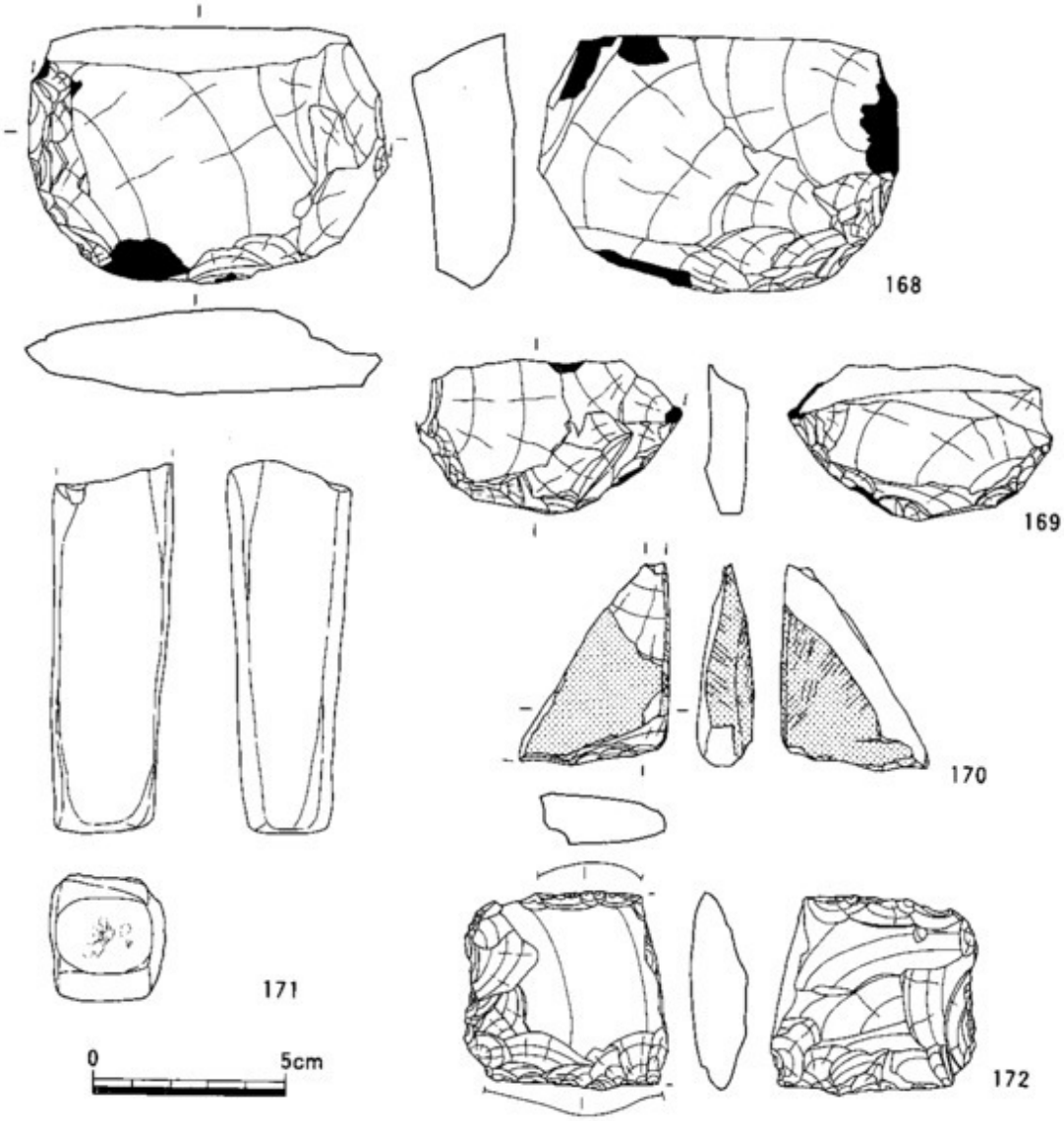
第41図　包含層出土遺物実測図(6)（1/2）



第42図　包含層出土遺物実測図(7)（1/2）

である。182は風化が著しい。187も剝離・調整面に風化による色の違いがあり，風化の小さいもの(左面右側縁及び下部)は廃棄後の折損と思われる。

188〜237・245は須恵器である。188〜192はSD 24出土の須恵器杯と同じ時期と考えられるが，外底は回転ヘラ削りを行っている。209外底の刻みは文字かヘラ記号か判断できない。211・219〜221は平高台状の底を持つ。222は椀である。223・224は西村産のいわゆる瓦質

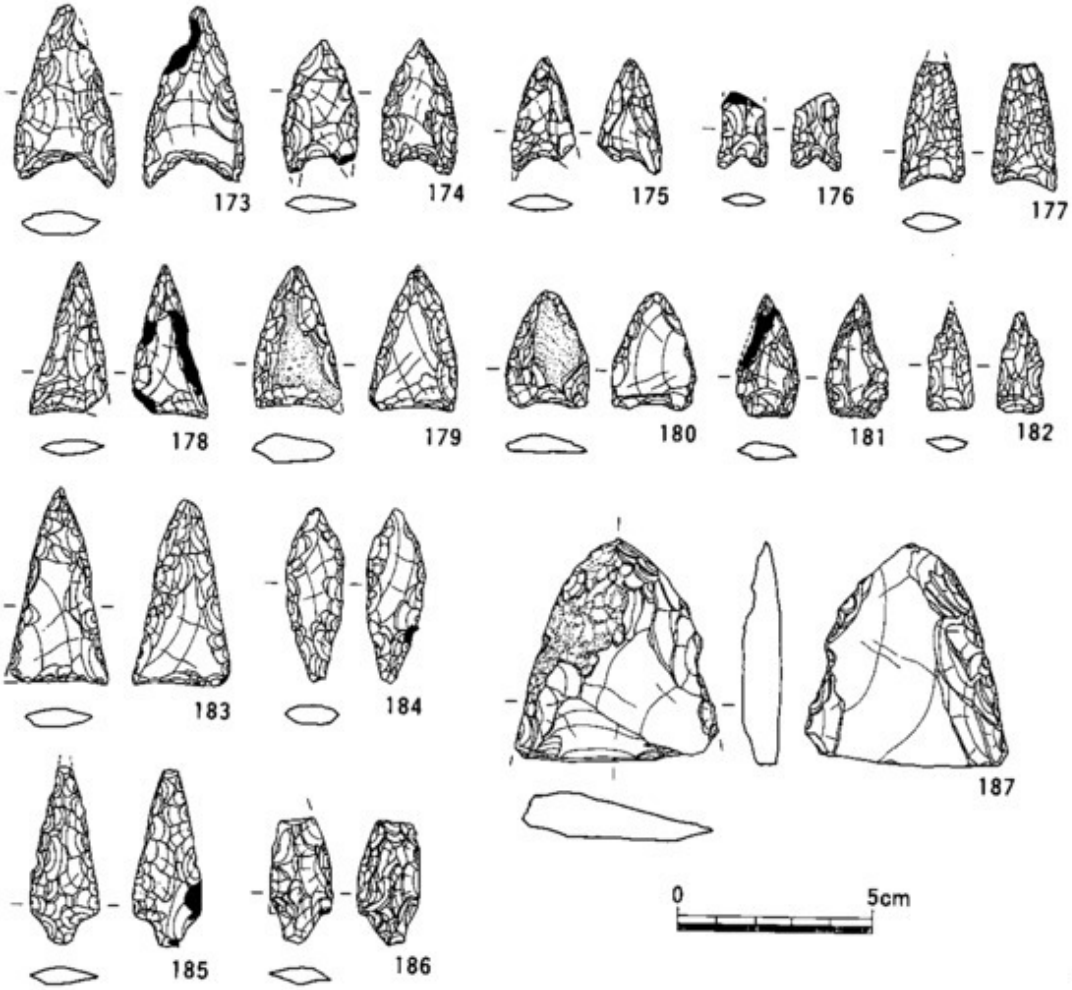


第43図　包含層出土遺物実測図(8)（1/2）

土器である。225は器壁が厚く大型の高杯であろうか。231は杯とも見える。232は大きく深い鉢である。236は把手で軟質，21と同一個体の可能性がある。237は硯で，ヘラ記号が脚部外面にある。透かしの数は不明。245は杯底を円盤状土製品に転用している。須恵器は6世紀後半から12世紀ごろまでのものが見られる。

238～244・246は土師器である。238は内外面に赤色顔料を塗っている。244は平高台である。8世紀から12世紀ごろまでのものが見られる。

247～249は内面黒色の黒色土器A類である。



第44図　包含層出土遺物実測図(9)（1/2）

250は白磁である。

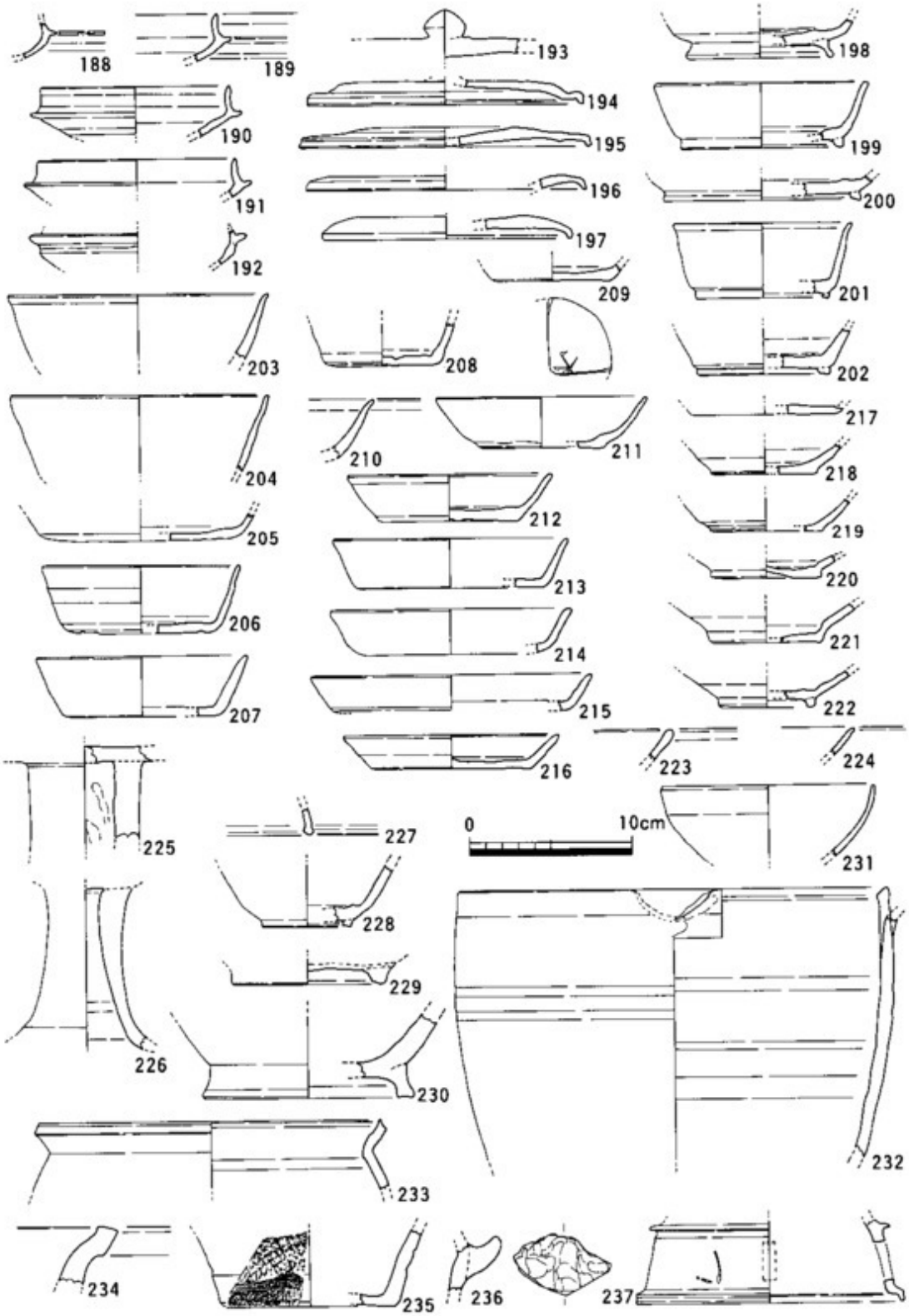
251は瓦器である。

252～254は土師器甕である。253は取手である。255は土師器鍋である。256・257は土師質土釜である。258は土師質土鍋の脚である。

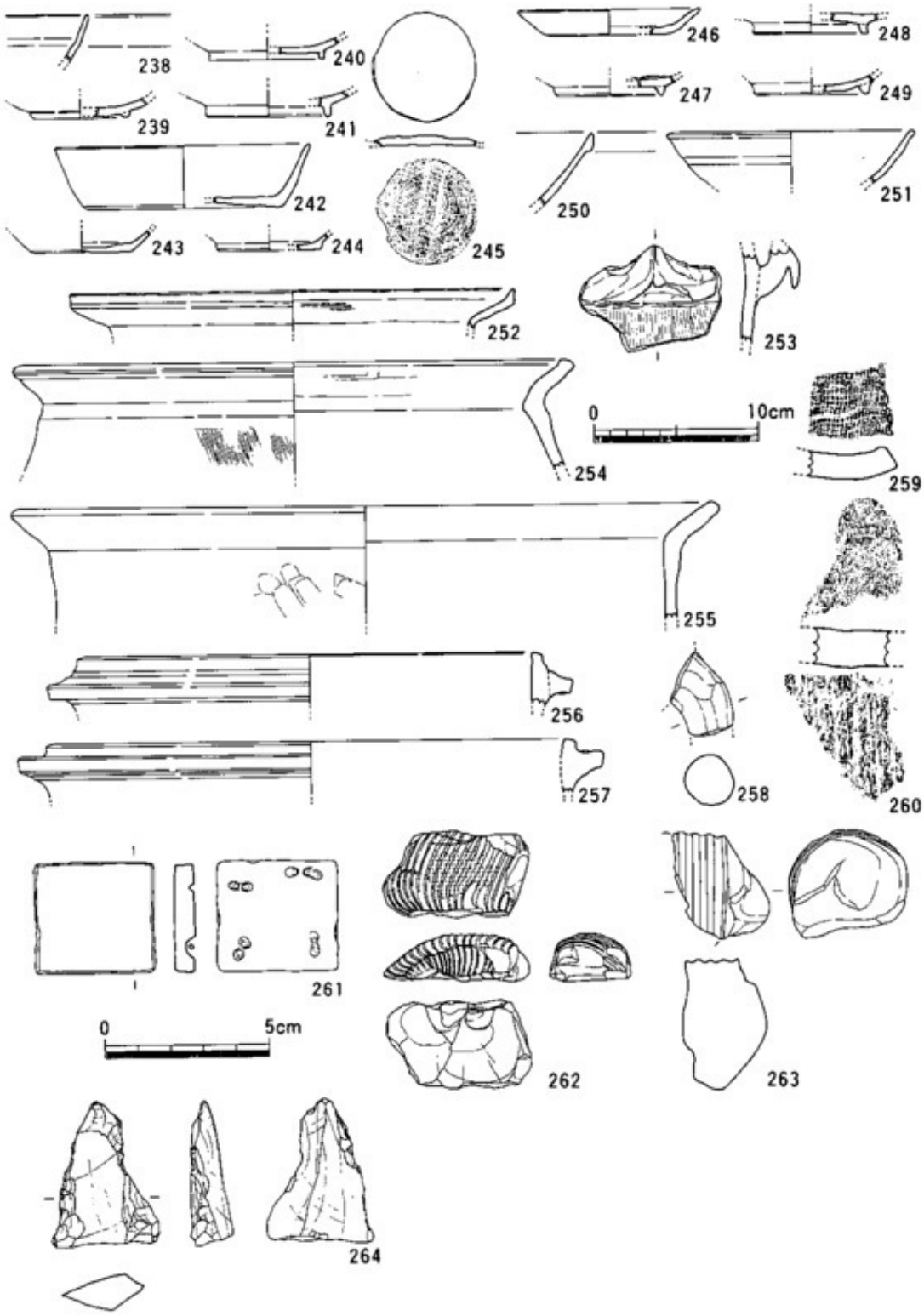
259・260は平瓦である。凹面に布目痕が残り，260の凸面には叩きの縄目痕が残る。

261は石帯巡方である。石材は花崗岩に近い質で，紐を通して留めるための穴が4ヶ所開けられる。

262は化石で，アンモナイト類の殻の出入り口の部分である。クリーニングが既に行われており，破れ面も人為的な欠損の可能性がある。手ずれなのか磨滅も認められる。付近にはアンモナイト化石を産する土地は見あたらない。



第45図　包含層出土遺物実測図(10)（1/4）



第46図　包含層出土遺物実測図(II)（1/4，1/2）

263は茶色く粒子の認められない石？で，材質不明。筋状の凹凸は人工的には見えないものの整っている。

264は旧石器の石核で，右面左半分が翼状剥片剥離面。もう１回剥片を取ろうとして失敗し廃棄されている。

第４章　　自然科学調査の成果

第１節　国分寺下日名代遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

１．はじめに

この調査は，プラント・オパール分析を用いて，国分寺下日名代遺跡における稲作跡の探査を試みたものである。

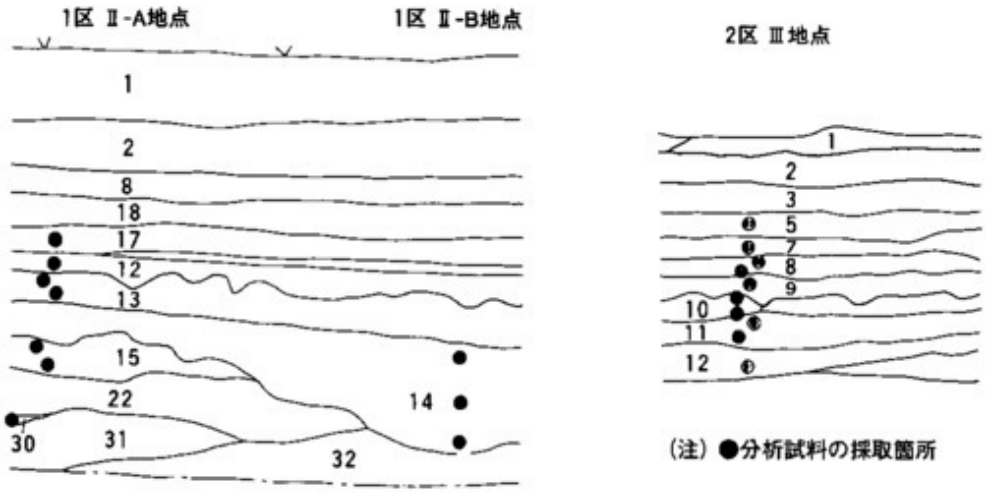
２．試料

試料は，遺跡の調査担当者によって容量50㎤の採土管を用いて採取され，当研究所に送付されたものである。第47図に土層断面図を，付図に分析試料の採取箇所を示す。試料数は計20点である。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は，「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに，次の手順で行った。

(1)　試料土の絶乾（105℃・24時間），仮比重測定



第47図　試料採取地点の土層断面図（S＝1/30）

1区Ⅱ-A地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
17	60	8	1.00	1,900	1.57	0	29,800	0	0
12	68	7	1.00	1,700	1.23	800	13,300	0	0
13-1	75	5	1.00	3,500	1.80	800	33,200	800	0
13-2	80	5	1.00	2,800	1.44	0	32,600	900	0
15-1	97	6	1.00	1,700	1.05	800	13,400	1,700	0
15-2	103	6	1.00	1,700	1.05	800	15,400	1,700	0
30	122	3	1.00	4,400	1.36	800	13,400	800	0

1区Ⅱ-B地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
14-1	94	12	1.00	900	1.11	0	10,800	900	0
14-2	106	12	1.00	800	0.99	0	30,100	1,600	0
14-3	118	13	1.00	800	1.07	800	19,000	800	0

2区Ⅲ地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
5	25	8	1.00	900	0.74	900	49,900	0	0
7	33	7	1.00	600	0.43	600	17,600	0	0
8-1	40	3	1.00	1,900	0.59	900	14,800	0	0
8-2	43	3	1.00	900	0.28	0	19,600	0	0
9	46	10	1.00	1,900	1.96	0	33,700	900	0
10-1	56	2	1.00	1,700	0.35	800	25,200	2,600	0
10-2	58	2	1.00	800	0.16	800	18,300	2,600	0
11-1	60	5	1.00	1,800	0.93	900	18,700	900	0
11-2	65	5	1.00	1,000	0.52	0	21,000	2,000	0
12	70	10	1.00	800	0.82	0	6,400	0	0

第5表　プラント・オパール分析結果

(2)　試料土約1gを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μm，約0.02g）

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

(3)　電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)　超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

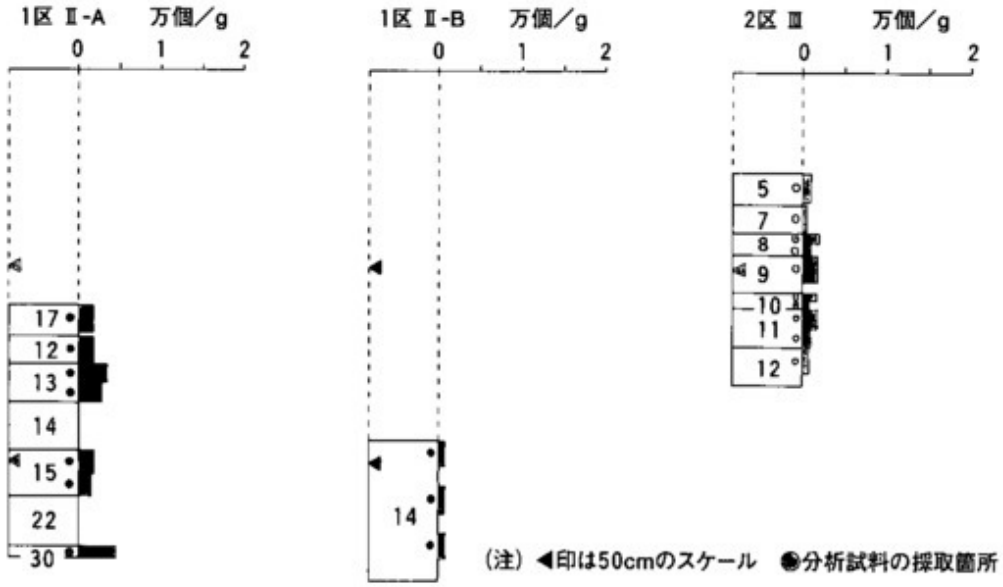
(5)　沈底法による微粒子（20μm以下）除去，乾燥

(6)　封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

(7)　検鏡・計数

同定は，機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下，プラント・オパールと略す）をおもな対象とし，400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は，ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に，計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて，試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また，この値に試料の仮比重と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体



第48図　イネのプラント・オパールの検出状況

乾重，単位：10^{-5}g）をかけて，単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は，イネは赤米，ヨシ属はヨシ，タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は，それぞれ2.94（種実重は1.03），6.31,0.48である（杉山・藤原，1987）。

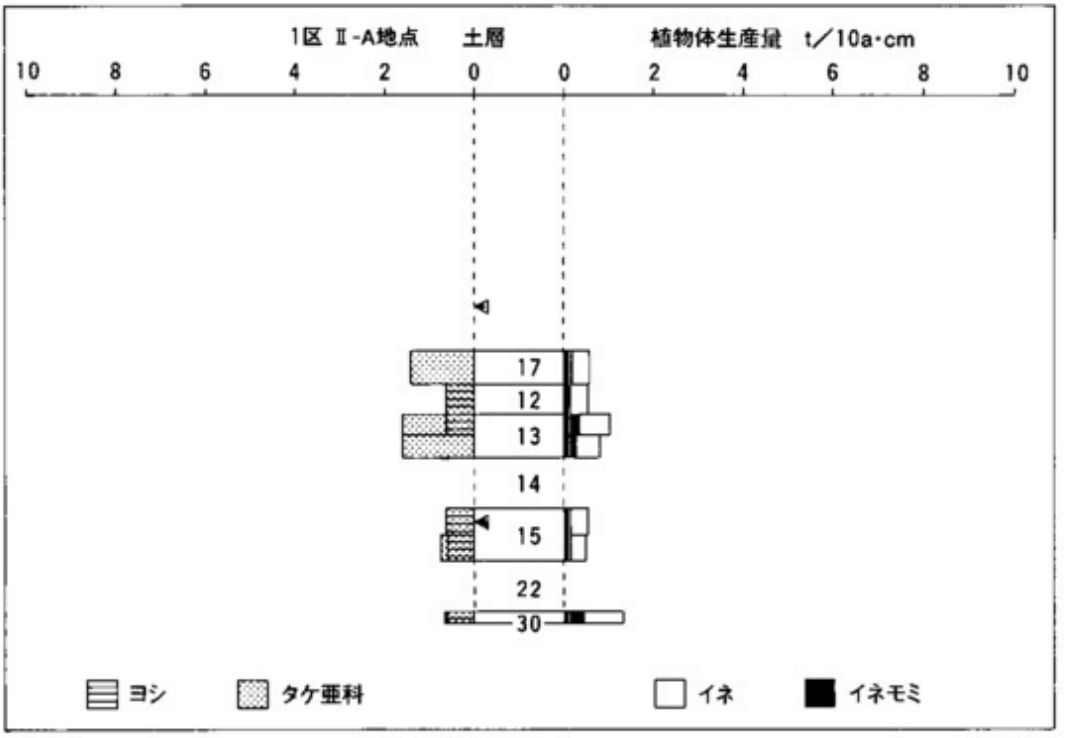
4．分析結果

プラント・オパール分析の結果を第5表および第48～50図に示す。なお，稲作跡の検証および探査が主目的であるため，同定および定量は，イネ，ヨシ属，タケ亜科，ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる），キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

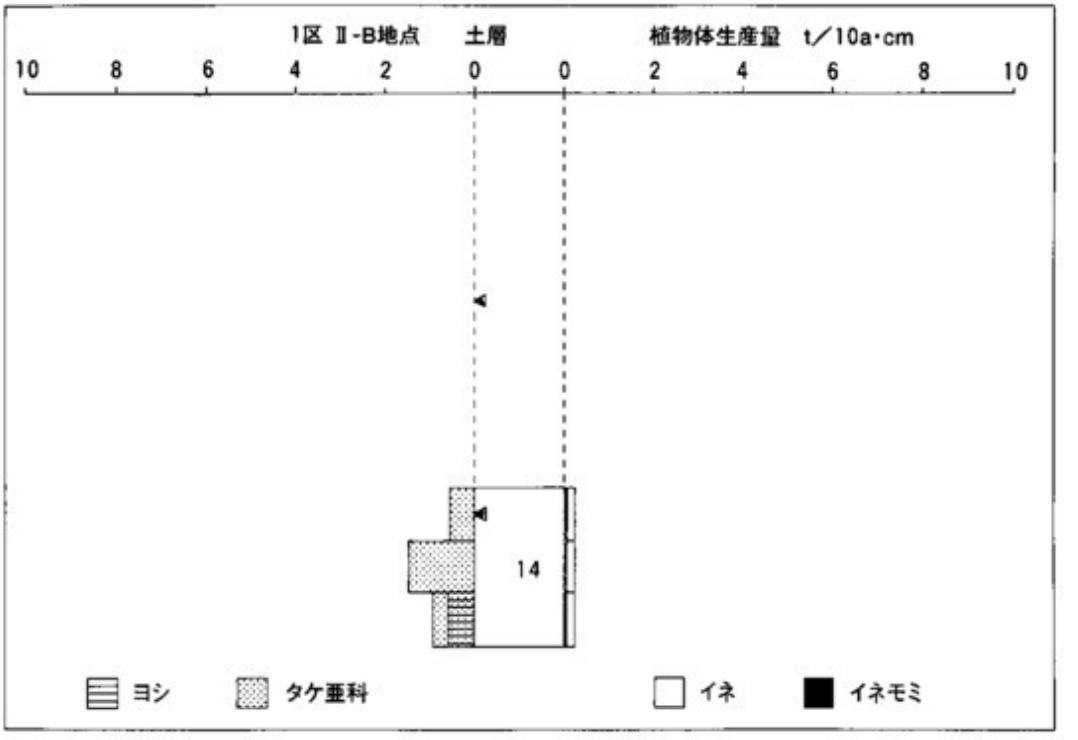
5．考察

(1) 稲作の可能性

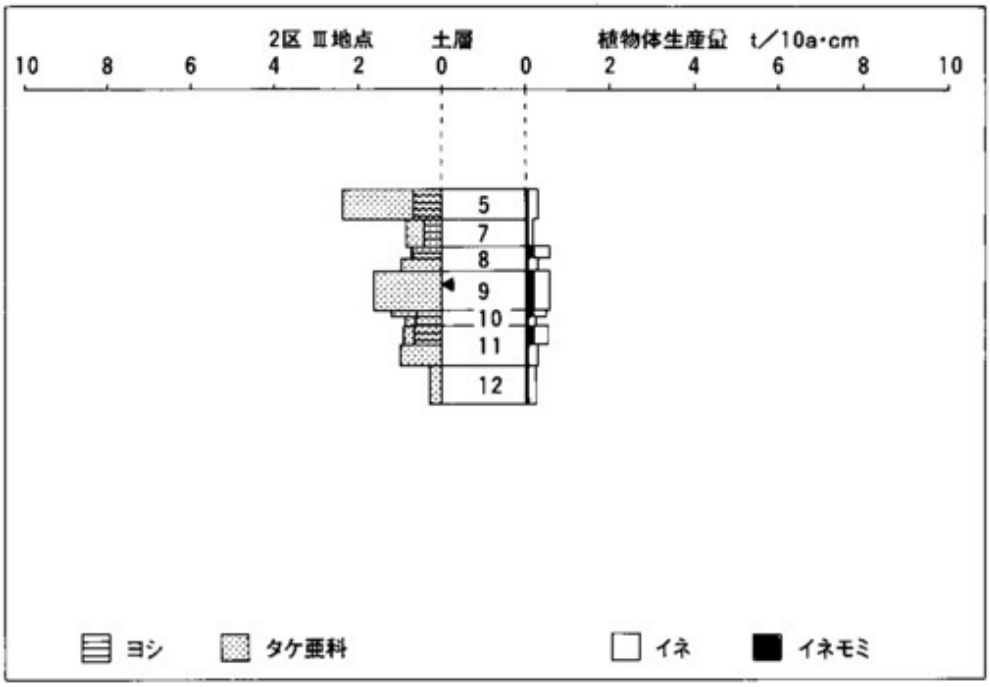
水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合，一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に，そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また，その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば，上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり，その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて，各地点ごとに稲作の



(注) ◀ 印は50cmのスケール



第49図　おもな植物の推定生産量と変遷(1)



第50図　おもな植物の推定生産量と変遷(2)

可能性について検討を行った。

1区II地点では，17層，12層，13層，14層，15層，30層の各層について分析を行った。その結果，これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。このうち，30層では，密度が4,400個/gと比較的高いことから，同地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。その他の層では，密度が1,700～3,500個/gとやや低いことから，稲作が行われていた可能性はあるものの，上層や他所からの混入の危険性も考えられる。

2区III地点では，5層，7層，8層，9層，10層，11層，12層の各層について分析を行った。その結果，これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。密度が1,700～3,500個/gとやや低いことから，稲作が行われていた可能性はあるものの，上層や他所からの混入の危険性も考えられる。

以上のように，同遺跡では，分析を行ったすべての層からイネのプラント・オパールが検出され，稲作の可能性が認められた。

参 考 文 献

杉山真二・藤原宏志．1987．川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山―古環境編―．川口市遺跡調査会報告，第10集，281-298．

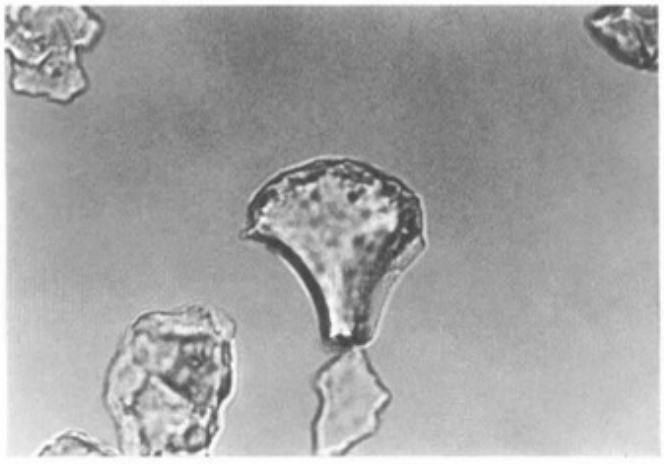
藤原宏志．1976．プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，9：15-29．

藤原宏志．1979．プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)―福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定―．考古学と自然科学，12：29-41．

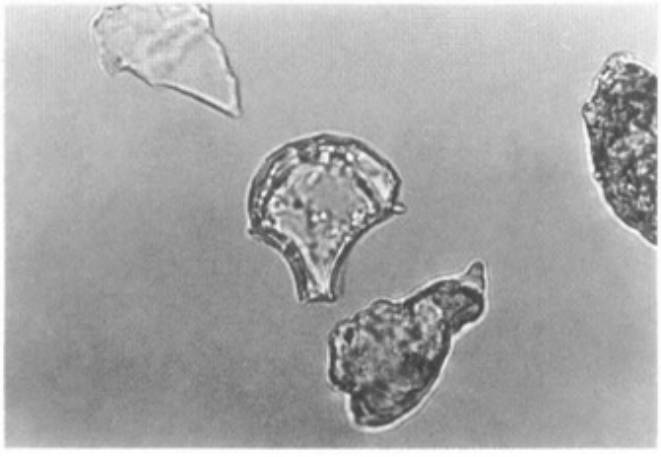
藤原宏志・杉山真二．1984．プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田跡の探査―．考古学と自然科学，17：73-85．

プラント・オパールの顕微鏡写真(1)〜(3)

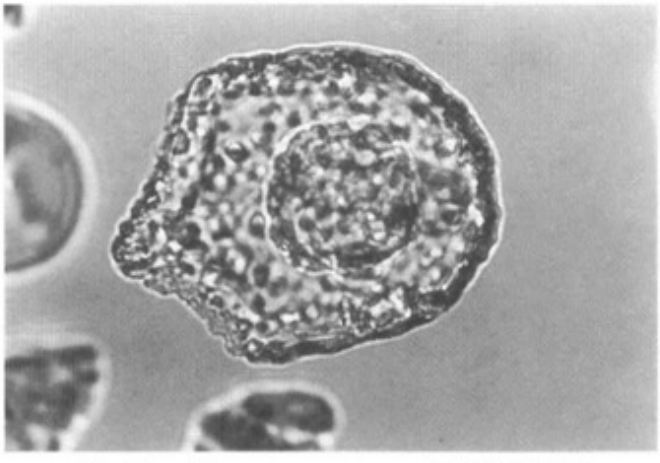
NO.	分類群	地点	試料名	倍率
1	イネ	1区II－A	30	500
2	イネ	1区II－A	30	500
3	ヨシ属	1区II－A	15	500
4	タケ亜科（ネザサ節）	1区II－A	13-1	500
5	タケ亜科（クマザサ属）	2区III	9	500
6	ウシクサ族	1区II－A	30	500
7	棒状珪酸体	1区II－A	17	500
8	樹木起源	2区III	5	500
9	樹木起源	1区II－A	17	500



No. 1

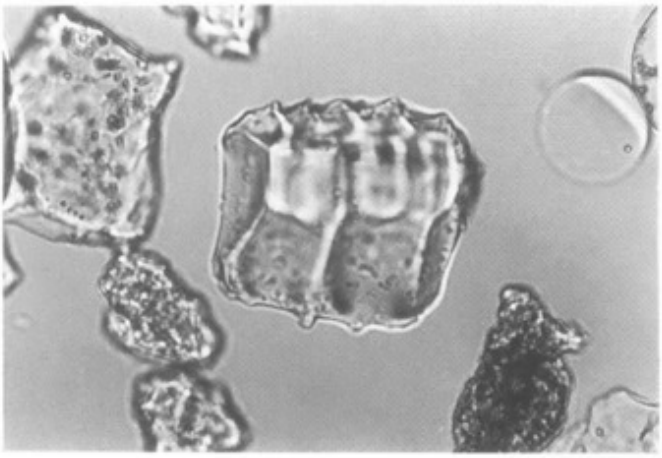


No. 2

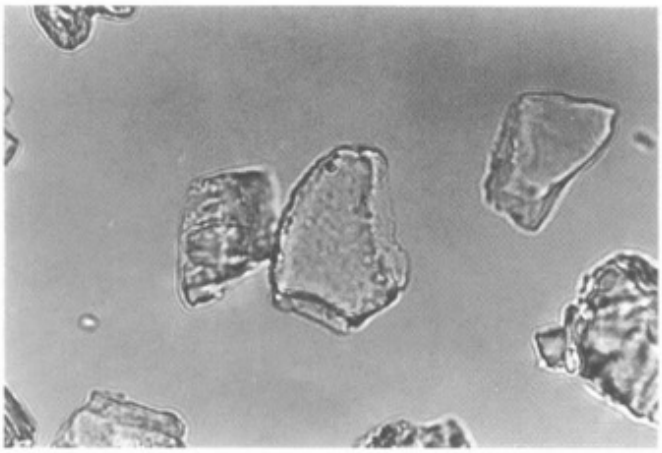


No. 3

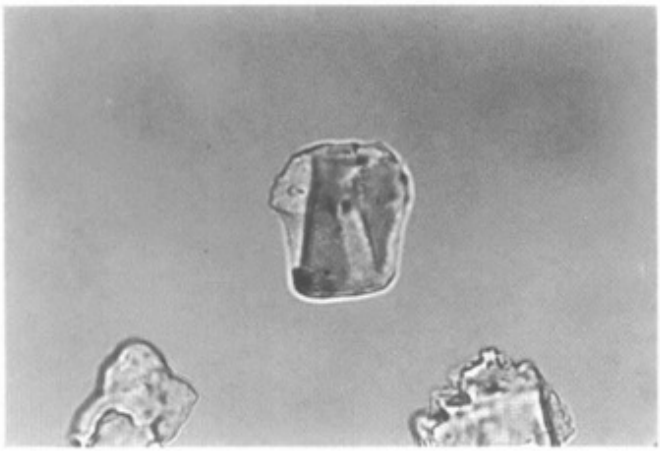
第51図　プラント・オパールの顕微鏡写真(1)



No. 4

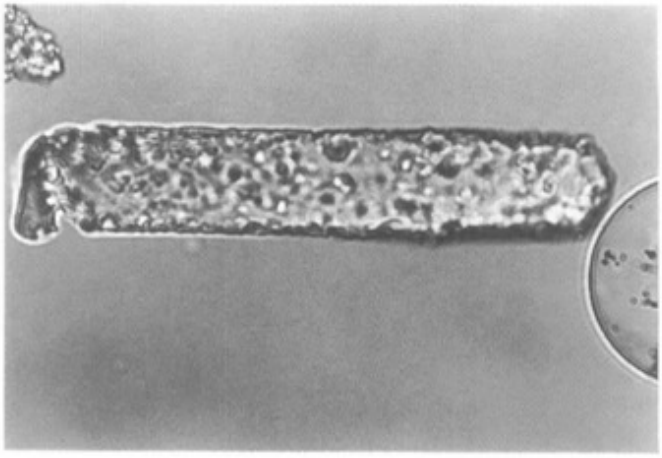


No. 5

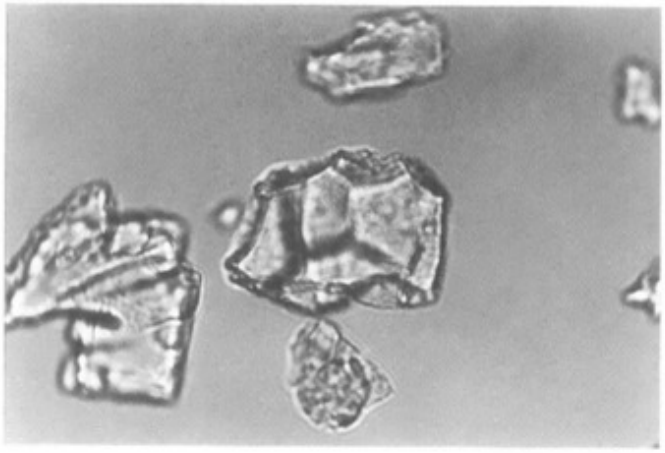


No. 6

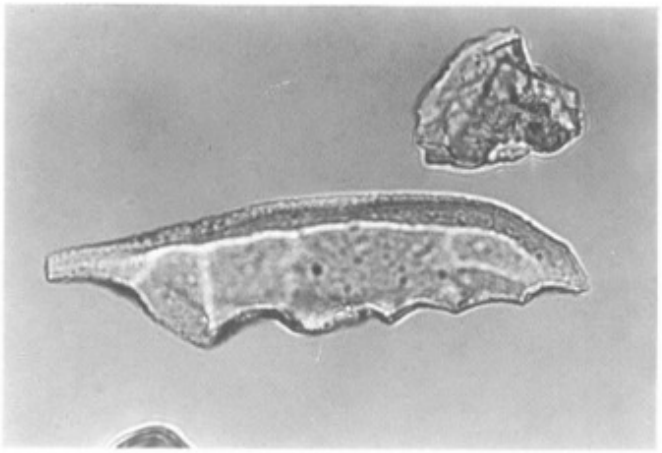
第52図　プラント・オパールの顕微鏡写真(2)



No. 7



No. 8



No. 9

第53図　プラント・オパールの顕微鏡写真(3)

第5章　ま　と　め

以上遺構種別毎に各遺構の客観的事実の記載に加え，図面には表し得なかった観察記録，注意点，そしてそれらの資料から編者が推論した年代観や用途などの事項を記してきた。

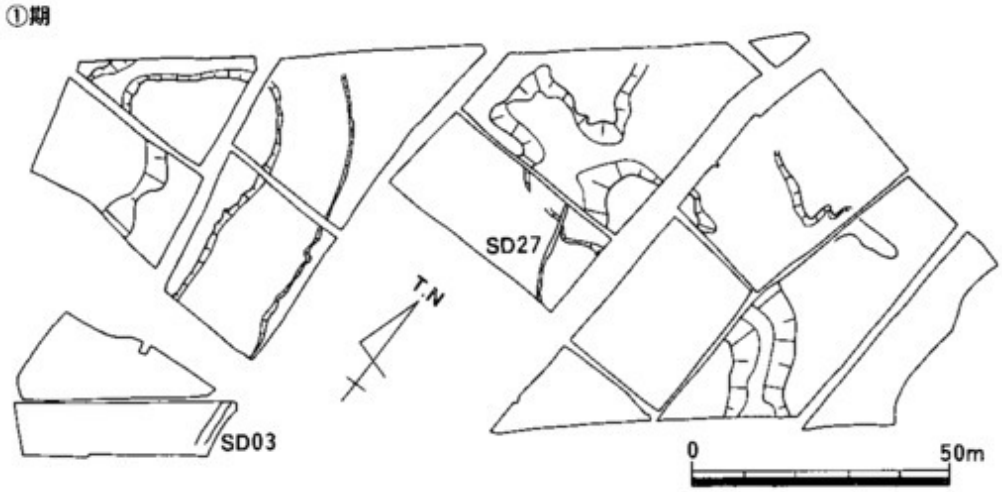
ここでは得られた年代観によって遺構を並べ直し，遺跡全体の変遷を辿ってみたい。以下4期に区分して記述して行くが，ある期間遺構が現れては次の出現まで数世紀間遺構の認められない状態が続く繰り返しの中での，遺構の存在する時期を一つの時期としている。

①期（弥生時代Ⅳ期）

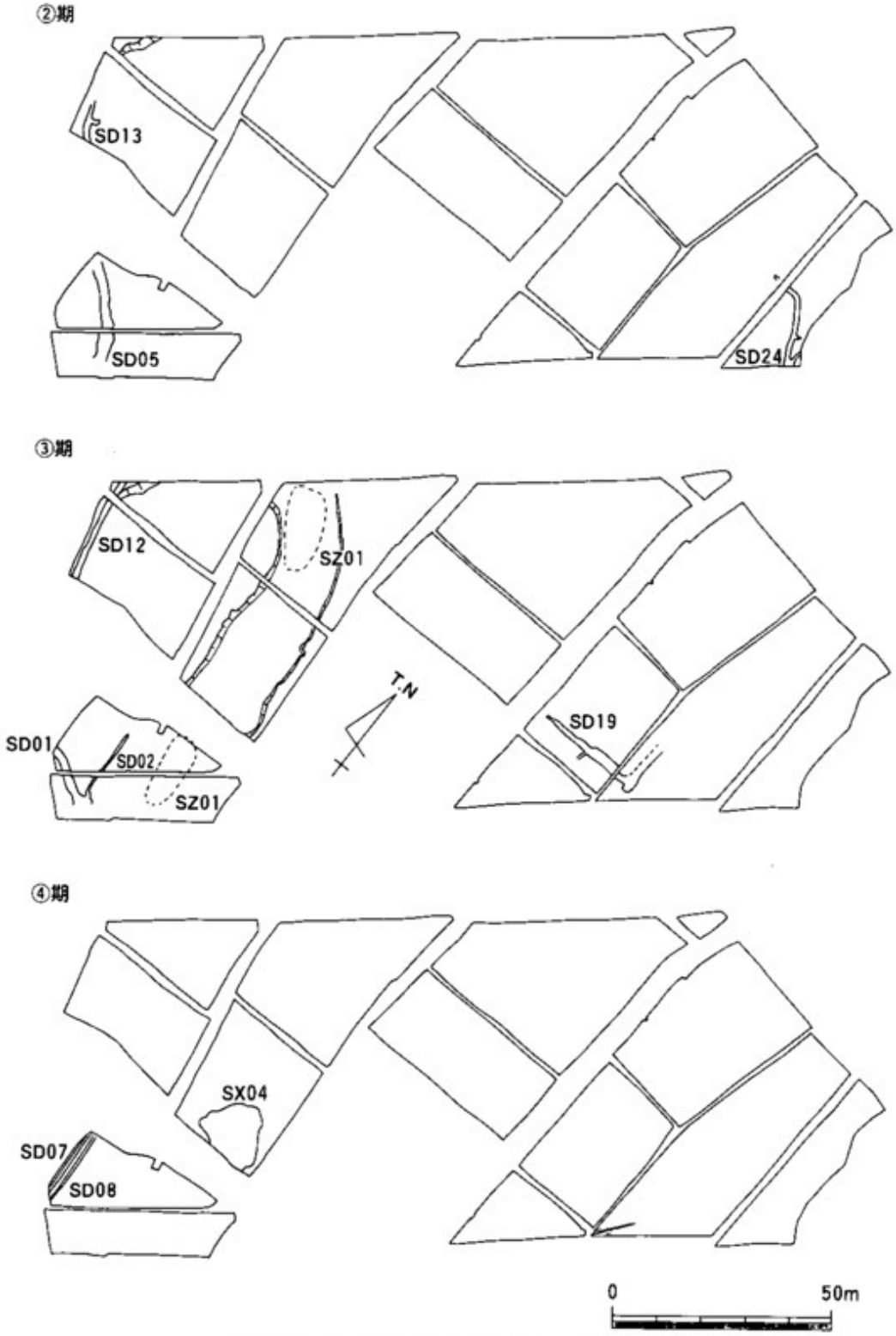
これ以前の遺物として，旧石器が少量存在するが，遺跡が沖積地に立地することもあり，これらは付近よりの流れ込みと判断できる。また縄文時代に属すると考えられる石器（石匙・石鏃）も数点存在する。

しかし，遺構や遺物が具体的に残されるようになるのはこの弥生時代Ⅳ期になってからである。溝が2条あり，それらは遺跡中央に南からのびてくる微高地部分の縁辺部に位置する。遺物も包含層下部から出土している。土器には角閃石を含む胎土のものが若干見られ，また結晶片岩らしき細粒を多く含むものも1点見られた。

この時期以後，弥生時代の遺物は終末から古墳時代初頭の可能性がある土器が若干存在する程度で，遺構も見あたらない。



第54図　遺構変遷図(1)（①期）（1/1,500）



第55図　遺構変遷図(2)（②～④期）（1/1,500）

②期（6世紀後半～7世紀後半）

国分寺町内で見つかっている古墳の状況からいえば，古墳時代後期の集落が町内に点在するとみられる。国分寺下日名代遺跡でもその一端として溝を検出できた。SD 24は遺跡東端の微高地上に掘削されていた。SD 05及びSD 13は遺跡西に接する丘陵末端の裾を巡るような状況である。この時期の遺物は包含層内でも極めて少ない。

③期（8～13世紀）

限定できる遺構はなかったが，8世紀の遺物がこの時期に含めた幾つかの溝あるいは包含層の中から一定量出土している。またSZ 01をはじめ時期を特定できないが古代という時期幅の中に収まりそうな遺構も他に存在する。石帯・硯の出土，耕作用の牛の足跡の痕跡というのは，遺跡周辺が必ずしも辺鄙な土地ではなく，ある程度の有力者層がいたことを示しているように思える。

溝に関しては，この期に方向の揃った直線的な溝が出現している。これらは条里型地割の施行に伴うものである。真北から数度どちらかに振れる範囲内で揃い，これは現在見られる国分寺町内の条里型地割の方向と一致する。この溝の中ではSD 19が比較的大きく直角に展開する。またSD 01・02は南部で合流するが，SD 02は条里方向に揃うのにSD 01はSD 05同様丘陵末端裾に沿うような様相を呈している。

④期（近世）

この期の遺跡はおそらく現在とあまり変わらぬ景観だったと考えられる。その中でSX 04は埋没した溜め池として貴重である。香川県では水不足に対する備えとして溜め池の発達が見られる。その中でSX 04が何故に最終的に自然埋没のまま放置されてしまったのか，あるいは溜め池とは別の用途が考えられるのか，疑問は解けないままである。

溝等しか見られないことからいえば，国分寺下日名代遺跡は集落の縁辺部ということができよう。しかしその中でも③期を一つの画期として変遷の跡を辿ることができる。集落は周辺の同じ地を選び続けたと思われるが，その発見により国分寺下日名代遺跡の評価もより深めることができるであろう。

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
1	14		弥生土器・壺	SP 01	3／8	石・大・多，他・中・少	10 YR 8/4 浅黄橙色	不明	指押さえ後ナデ	*
2	17		弥生土器・壺	SX 02	1／8	石・中・普，他・小・少	2.5 Y 8/4 淡黄色	不明	不明	*
3	18		土師器・杯	SX 04	4／8	石・小・少	2.5 Y 8/4 淡黄色	回転ナデ，回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ，ナデ	*
4	18		土師質土器・甕	SX 04	小破片	石・小・少，他・小・多	7.5 YR 6/6 橙色	横ナデ，タタキ目後横ナデ	横ナデ	口径不確定
5	18		土師質土器・土釜	SX 04	小破片	石・中・普，他・小・少	10 YR 8/4 浅黄橙色	横ナデ，指押さえ	指押さえ，ナデ	*
6	18		土師質土器・すり鉢	SX 04	4／8	石・中・普，赤・中・少，他・小・少	10 YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ，指押さえ，ナデ	ナデ	卸し目5本1組，全部で14～15組
7	18		須恵器・椀	SX 04	小破片	精良	N 7 灰白	回転ナデ，ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ	*
8	18		須恵器・壺	SX 04	*	他・小・少	N 6 灰色	ナデ，タタキ目	ナデ，当て具痕ナデ消し	外面平行叩き，内面当て具痕ナデ消し
9	18		青磁・碗	SX 04	1／8	精良	7.5 GY 6/1 緑灰色	回転ナデ	回転ナデ	厚い釉。新しいものか
10	18		青磁・碗	SX 04	1／8	精良	10 Y 6/2 オリーブ灰色	回転ナデ	回転ナデ	内面花文
11	18		近世陶磁器・碗	SX 04	1／8	精良	2.5 Y 8/3 淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	*
12	18		染付・碗	SX 04	小破片	精良	5 Y 8/1 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外面花文
13	20		須恵器・杯蓋	SD 01	2／8	石・中・少，他・小・普	N 5 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
14	20		須恵器・杯蓋	SD 01	2／8	石・小・少	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
15	20		須恵器・杯	SD 01	1／8	石・大・多，他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
16	20		須恵器・高台付杯	SD 01	2／8	石・小・少，他・小・少	N 6 灰色	回転ヘラ切り後回転ナデ，回転ヘラ切り	回転ナデ後ナデ	*
17	20		須恵器・高台付杯	SD 01	4／8	他・小・少	N 4 灰色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ナデ	外底に粘土紐巻き痕(左回り)
18	20		須恵器・皿	SD 01	2／8	石・小・普，他・小・少	N 7 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外面白色自然釉
19	20		須恵器・杯	SD 01	小破片	石・大・少	N 5 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
20	20		須恵器・皿	SD 01	小破片	石・小・少	N 5 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*

第6表　土器観察表(1)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
21	20	17	須恵器・鉢	SD 01	1／8	石・中・多	N 6 灰色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，回転ナデ後指押さえ，回転ナデ	やや軟質，236と同一個体？，体部調整後把手貼り付け
22	20		須恵器・壺	SD 01	小破片	石・中・普	N 4 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
23	20		土師器・杯	SD 01	2／8	石・大・多，赤・中・少	10 YR 8/3 浅黄橙色	横ナデ，ヘラ切り	横ナデ，ナデ	*
24	20		黒色土器A類・椀	SD 01	2／8	他・小・少	10 YR 7/3 にぶい黄橙色	横ナデ	ミガキ	内面放射状ミガキ
25	20		黒色土器A類・椀	SD 01	5／8	石・大・普，赤・中・少	10 YR 6/6 明黄褐色	横ナデ，ナデ	ナデ	*
26	20		黒色土器A類・椀	SD 01	6／8	他・小・普	10 YR 7/2 にぶい黄橙色	横ナデ	板ナデ	内底に板木口痕多数
27	20		土師器・甕	SD 01	1／8	石・中・多	5 YR 6/3 にぶい橙色	ナデ	ナデ	*
31	21		須恵器・杯	SD 02	2／8	石・小・少，他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	*
32	23		弥生土器・壺	SD 04	小破片	石・小・普，赤・小・少	2.5 Y 6/2 灰黄色	不明	横ナデ	沈線2条，刻み目は4本1単位，上面に竹管文。径不確定
33	23		弥生土器・甕	SD 04	小破片	石・小・普	2.5 Y 7/2 灰黄色	横ナデ	横ナデ，ナデ	凹線2条
34	23		弥生土器・壺	SD 04	小破片	石・大・普，赤・小・少	10 YR 8/3 浅黄橙色	不明	横ナデ	凹線2条，竹管文2個，下面は剥離面か？
35	23		弥生土器・壺	SD 04	4／8	石・大・普，赤・小・少，他・中・少	10 YR 8/2 灰白色	板ナデ	板ナデ	*
36	23		弥生土器・壺	SD 04	5／8	石・中・少，赤・小・少	2.5 Y 8/3 淡黄色	指押さえ後ナデ，指押さえ，指押さえ後板ナデ	指押さえ後ナデ	全穿孔数不明
37	23	17	弥生土器・高杯	SD 04	6／8	石・中・普，赤・中・少	2.5 Y 8/2 灰白色	ミガキ，横ナデ	不明，ヘラ削り	*
38	24		弥生土器・壺	SD 05	小破片	石・中・普，赤・中・少	2.5 Y 7/2 灰黄色	ヘラミガキ	絞り目	凹線，ヘラミガキは見えにくい
39	24		弥生土器・壺？	SD 05	小破片	石・大・普	7.5 YR 7/6 橙色	ヘラミガキ	不明	沈線2条，ヘラ圧痕文。肩部と判断したが膨らみがない，他に似た破片有り

第7表　土器観察表(2)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
40	24		弥生土器・甕	SD 05	2／8	石・大・多，赤・小・少	10 YR 7/3 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	*
41	24		弥生土器・高杯	SD 05	小破片	石・小・少，他・小・少	10 YR 7/2 にぶい黄橙色	横ナデ	横ナデ	*
42	24		弥生土器・高杯	SD 05	小破片	石・小・多	10 YR 6/4 にぶい黄橙色	ハケ目，不明	不明	円盤充塡か杯底挿入か不明
43	24		須恵器・杯	SD 05	8／8	他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ，ヘラ切後ナデ	回転ナデ	内底に底径 6.1 cm の杯を重ねて焼いた痕跡
44	24		須恵器・杯蓋	SD 05	1／8	石・小・少，他・小・少	N 6 灰色	回転ヘラ削り，回転ナデ	回転ナデ	*
45	24		須恵器・杯	SD 05	2／8	他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
46	24	17	須恵器・高台付杯	SD 05	4／8	石・大・普，他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ，ナデ，回転ヘラ削り	回転ナデ	外底回転ヘラ削り（砂粒左回り）
47	24	17	須恵器・鉢	SD 05	1／8	石・小・多	N 7 灰白色	回転ナデ，回転ヘラ削り	回転ナデ	口縁端部は弱い平坦面，回転ヘラ削りは砂粒左回り
48	24		須恵器・鉢	SD 05	1／8	石・中・多	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ，回転ナデ後ナデ	沈線 1 条
49	24	17	須恵器・壺	SD 05	*	石・小・普	N 5 灰色	回転ナデ，タタキ目後カキ目後ナデ	回転ナデ後指押さえ	外面にタタキ目が残る
50	24		土師器・甕	SD 05	1／8	石・中・普，赤・小・少	10 YR 6/4 にぶい黄橙色	指ナデ	ハケ目後ナデ，ハケ目	*
52	25		弥生土器・鉢	SD 06	1／8	雲・中・多，石・大・多	10 YR 6/4 にぶい黄橙色	指押さえ	指押さえ	粘土塊から成形。雲母粒多数混
53	27	18	須恵器・蓋	SD 12	7／8	石・大・少，他・小・普	N 6 灰色	ナデ，回転ナデ	ナデ，回転ナデ	外面自然釉
54	27		須恵器・杯	SD 12	1／8	他・小・少	N 5 灰色	回転ナデ	回転ナデ	大型品
55	27		須恵器・杯	SD 12	2／8	他・小・少	N 4 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
56	27		須恵器・高台付杯	SD 12	1／8	他・小・少	N 7 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	底厚い。壺？
57	27		土師器・椀	SD 13	小破片	他・小・少	10 YR 7/3 にぶい黄橙色	不明	指ナデ	粘土塊を薄くひきのばす。浅い。皿？
58	27		土師器・杯	SD 12	2／8	石・中・少	10 YR 8/2 灰白色	不明	不明	*
59	27		土師器・土釜	SD 12	1／8	石・小・普	10 YR 7/3 にぶい黄橙色	横ナデ，指押さえ，ハケ目	横ナデ，ナデ	*
62	28		弥生土器・壺	SD 13	1／8	石・大・多	10 YR 6/4 にぶい黄橙色	不明	不明	*
63	28		弥生土器・壺	SD 13	2／8	他・小・普	10 YR 8/2 灰白色	ナデ	ナデ	*

第 8 表　土器観察表(3)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
64	28		弥生土器・甕	SD 13	1／8	石・大・多，赤・中・普	10 YR 7/3 にぶい黄橙色	不明	不明	*
65	28		弥生土器・壺	SD 13	6／8	石・大・多，赤・大・普	2.5 Y 8/3 淡黄色	不明	ヘラ削り，ナデ	*
66	28		弥生土器・高杯	SD 13	*	石・大・多，赤・中・少	2.5 Y 7/3 浅黄色	横ナデ，板ナデ	ハケ目，ナデ	傾き不確定
68	30		土師器・小皿	SD 19	1／8	石・小・多，赤・小・少	10 YR 8/4 浅黄橙色	回転ナデ，不明	不明	*
69	30		土師器・杯	SD 19	小破片	石・小・少，他・小・少	10 YR 7/4 にぶい黄橙色	横ナデ，ヘラ切り	横ナデ	*
70	30		土師器・皿	SD 19	1／8	石・小・普，他・小・少	10 YR 8/3 浅黄橙色	回転ヘラ切り後板状圧痕	回転ナデ	円盤状土製品の破片？，底部にヘラ圧痕
72	32		須恵器・杯	SD 24	1／8	石・中・普，他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	73 と同一個体？
73	32		須恵器・杯	SD 24	*	石・中・普	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	72 と同一個体？
74	32		須恵器・杯	SD 24	1／8	石・中・普	N 6 灰色	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	蓋の可能性もある
76	33		弥生土器・甕	SD 27	小破片	石・大・普，赤・小・普	7.5 YR 6/6 橙色	横ナデ，不明	不明	凹線 2 条
77	36		弥生土器・壺	包含層	1／8	石・大・多，赤・大・少，他・中・普	7.5 YR 6/6 橙色	横ナデ，不明，ハケ目，不明	横ナデ，不明	沈線多数
78	36		弥生土器・壺	包含層	4／8	角・小・多，石・中・少，他・小・少	5 YR 6/6 橙色	横ナデ，横ナデ後ハケ目，ナデ	横ナデ，指押さえ後ナデ，ナデ	下川津B類，凹線 2 条，沈線 10 条
79	36		弥生土器・壺	包含層	1／8	石・大・多	2.5 Y 7/2 灰黄色	横ナデ，ナデ，ハケ目	横ナデ，ナデ	ヘラ連続押圧文 2 条，沈線 2 条
80	36		弥生土器・壺	包含層	1／8	石・大・多，赤・中・普	5 YR 6/3 にぶい橙色	不明	不明，ナデ，指押さえ	凹線 5 条
81	36		弥生土器・壺	包含層	2／8	石・中・普，他・中・普	10 YR 8/2 灰白色	ナデ，ハケ目	ナデ	凹線 6 条
82	36		弥生土器・壺	包含層	1／8	石・大・少，赤・大・少，他・大・普	5 YR 7/6 橙色	ナデ，ハケ目	板ナデ，不明	沈線多数
83	36		弥生土器・壺	包含層	2／8	石・小・普，赤・小・少	10 YR 8/3 浅黄橙色	横ナデ，板ナデ	指押さえ後横ナデ，指押さえ後ナデ	幅広い凹線
84	36		弥生土器・壺	包含層	2／8	石・小・少，他・小・少	2.5 Y 7/3 浅黄色	横ナデ	横ナデ	下端は剥離面
85	36		弥生土器・壺	包含層	3／8	石・中・普，赤・中・普	7.5 YR 7/2 明褐灰色	横ナデ，不明	横ナデ，不明	*
86	36		弥生土器・壺	包含層	4／8	石・大・多	5 YR 5/6 明赤褐色	横ナデ，不明	横ナデ，不明	凹線 3 条

第 9 表　土器観察表(4)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
87	36		弥生土器・壺	包含層	8／8	石・大・多，赤・小・少	10 YR 7/2 にぶい黄橙色	不明	不明(ヘラ削り)	*
88	36		弥生土器・壺	包含層	8／8	石・小・多，他・小・少	2.5 Y 6/3 にぶい黄色	不明	不明	底部直径をつなぐ穿孔は貫通するか不明
89	36		弥生土器・壺	包含層	8／8	石・大・普，赤・中・普，他・中・普	10 YR 7/3 にぶい黄橙色	不明	不明	*
90	36		弥生土器・壺	包含層	4／8	石・大・多，他・中・普	10 YR 6/6 明黄褐色	不明，板ナデ	指押さえ	*
91	36		弥生土器・壺	包含層	3／8	石・中・普，赤・小・少	7.5 YR 6/6 橙色	不明	不明，指押さえ	*
92	36		弥生土器・壺	包含層	6／8	石・大・普	10 YR 7/3 にぶい黄橙色	ナデ，ハケ目	ナデ，板ナデ	刷毛目上端の木口痕を強く残し，文様としている
93	36		弥生土器・壺	包含層	2／8	石・大・多，赤・中・少	2.5 Y 7/3 浅黄色	不明	不明	*
94	36		弥生土器・壺	包含層	8／8	石・大・多，赤・大・普	10 YR 7/4 にぶい黄橙色	不明	不明	*
95	37		弥生土器・壺	包含層	7／8	石・大・多，他・大・多	10 YR 6/4 にぶい黄橙色	ナデ	指押さえ，板ナデ，ナデ	*
96	37		弥生土器・壺	包含層	3／8	石・大・多，他・中・普	2.5 Y 7/2 灰黄色	横ナデ，ハケ目	不明	口縁端に沈線に近い凹線
97	37		弥生土器・壺	包含層	8／8	石・大・多，赤・小・普	2.5 Y 7/2 灰黄色	横ナデ	不明	凹線3条
98	37		弥生土器・壺	包含層	2／8	石・大・多	2.5 Y 8/2 灰白色	横ナデ，ナデ	横ナデ，ナデ	*
99	37		弥生土器・壺	包含層	7／8	石・小・少，他・小・普	2.5 Y 7/3 浅黄色	横ナデ	横ナデ	凹線2条
100	37		弥生土器・壺	包含層	7／8	石・大・多，赤・中・少	2.5 Y 7/2 灰黄色	不明	不明	凹線2条
101	37		弥生土器・壺	包含層	3／8	石・大・多，赤・大・少	10 YR 7/3 にぶい黄橙色	不明	不明	*
102	37		弥生土器・壺	包含層	1／8	雲・小・少，角・小・少，石・小・少，赤・小・少，他・小・普	7.5 YR 5/6 明褐色	横ナデ	ナデ	下川津B類？
103	37		弥生土器・壺	包含層	4／8	石・大・少，他・中・普	2.5 Y 8/3 淡黄色	横ナデ，ハケ目	ナデ，指押さえ，ヘラ削り	凹線2条
104	37	18	弥生土器・壺	包含層	8／8	石・大・多，赤・大・普，他・中・少	2.5 Y 7/2 灰黄色	ハケ目，不明	不明	凹線3条
105	37		弥生土器・壺	包含層	7／8	石・大・普，赤・中・少	10 YR 8/3 浅黄橙色	横ナデ，不明	横ナデ，不明，ヘラ削り	凹線3条，内面ヘラ削り

第10表　土器観察表(5)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
106	37		弥生土器・壺	包含層	1／8	石・小・少，他・中・少	7.5 YR 6/6 橙色	横ナデ，不明，ハケ目	横ナデ，指押さえ後ナデ，ヘラ削り	沈線3条
107	37		弥生土器・壺	包含層	3／8	石・大・普，赤・小・普	5 YR 6/6 橙色	ナデ	ナデ，ハケ目	内面炭化物付着
108	37		弥生土器・壺	包含層	小破片	石・小・少，赤・小・少	7.5 YR 7/6 橙色	不明	不明	*
109	37		弥生土器・壺	包含層	1／8	石・大・少，他・大・少	10 YR 7/2 にぶい黄橙色	不明，ハケ目	不明	*
110	37		弥生土器・壺	包含層	2／8	石・大・多	10 YR 7/6 明黄褐色	不明，ハケ目，不明	不明	凹線2条
111	38		弥生土器・甕	包含層	2／8	角・小・多，石・大・普	10 YR 5/3 にぶい黄褐色	横ナデ，ハケ目，ヘラミガキ，ナデ	横ナデ，ナデ，指押さえ	凹線2条，連続ヘラ圧痕文，傾き不確定，低い甕。下川津B類
112	38		弥生土器・甕	包含層	8／8	石・大・普，赤・中・少，他・中・普，	10 YR 8/2 灰白色	ナデ，不明	ナデ，不明	口縁に弱い凹線3条
113	38		弥生土器・甕	包含層	2／8	雲・小・少，角・中・多，石・中・少，赤・大・少	7.5 YR 5/6 明褐色	横ナデ，ハケ目	横ナデ，指押さえ	下川津B類，凹線2条
114	38		弥生土器・甕	包含層	1／8	角・中・多，石・中・少	7.5 YR 6/4 にぶい橙色	横ナデ，ハケ目	横ナデ，ナデ	*
115	38		弥生土器・甕	包含層	4／8	石・大・多，赤・中・少	10 YR 7/6 明黄褐色	不明	不明	凹線2条，口径不確定
116	38		弥生土器・甕	包含層	1／8	他・小・少	2.5 Y 7/3 浅黄色	不明	不明	凹線2条
117	38		弥生土器・甕	包含層	1／8	角・中・少，石・中・少，赤・小・少，他・小・普	7.5 YR 6/4 にぶい橙色	横ナデ	横ナデ，指押さえ	下川津B類
118	38		弥生土器・甕	包含層	小破片	石・大・少，赤・小・少	7.5 YR 8/2 灰白色	不明	不明	*
119	38		弥生土器・甕	包含層	1／8	石・大・多，他・中・少	10 YR 7/4 にぶい黄橙色	横ナデ，不明	横ナデ，板ナデ	土師器？
120	38		弥生土器・甕	包含層	1／8	赤・中・少，他・小・少	10 YR 7/3 にぶい黄橙色	横ナデ，ナデ	ナデ，指押さえ	*
121	38		弥生土器・甕	包含層	1／8	石・大・多	7.5 YR 6/6 橙色	横ナデ，不明	横ナデ，不明	*
122	38		弥生土器・甕	包含層	1／8	石・大・多，赤・大・多	7.5 YR 7/3 にぶい橙色	不明	不明	*
123	38		弥生土器・甕	包含層	1／8	石・大・多，赤・大・少，他・中・多	5 YR 6/6 橙色	不明，ナデ	ナデ	胎土に結晶片岩状の細粒多数混

第11表　土器観察表(6)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
124	38		弥生土器・甕	包含層	8／8	他・中・多	10 YR 8/3 浅黄橙色	不明，ナデ	不明	*
125	38		弥生土器・甕	包含層	4／8	石・中・普	10 YR 6/3 にぶい黄橙色	ナデ，ハケ目	不明	外面ミガキの可能性有り
126	38		弥生土器・甕	包含層	7／8	石・大・多	2.5 YR 6/6 橙色	不明	不明	*
127	39	18	弥生土器・高杯	包含層	6／8	赤・小・少，他・小・少	5 Y 7/1 灰白色	横ナデ，ナデ	横ナデ，ミガキ，ヘラ削り	凹線2条，穿孔上下3個ずつと想定
128	39		弥生土器・高杯	包含層	1／8	石・大・多，赤・中・少	10 YR 8/3 浅黄橙色	不明	不明	*
129	39		弥生土器・高杯	包含層	1／8	石・中・普，他・小・普	10 YR 7/4 にぶい黄橙色	横ナデ，ヘラ削り	横ナデ	凹線2条
130	39		弥生土器・高杯	包含層	小破片	石・大・多，赤・中・少	10 R 5/6 赤色	横ナデ，不明	横ナデ，不明	傾き不確定
131	39		弥生土器・高杯	包含層	小破片	石・大・多，赤・小・少	2.5 Y 8/3 淡黄色	横ナデ，ナデ	横ナデ，ナデ後ヘラミガキ	*
132	39		弥生土器・高杯	包含層	1／8	石・中・普，赤・小・少	7.5 YR 6/6 橙色	不明	不明	*
133	39		弥生土器・高杯	包含層	1／8	赤・小・少，他・小・少	10 YR 7/4 にぶい黄橙色	横ナデ，不明	不明	*
134	39		弥生土器・高杯	包含層	小破片	他・小・少	7.5 YR 6/4 にぶい橙色	横ナデ	横ナデ	*
135	39		弥生土器・高杯	包含層	1／8	石・大・普，他・中・普	10 YR 5/6 黄褐色	不明	不明	*
136	39		弥生土器・高杯	包含層	8／8	石・中・普，赤・中・少，他・小・普	2.5 Y 8/1 灰白色	不明，ナデ	不明，ナデ	外から内に穿孔しているようなのに，5個の内4個が不完全貫通。杯部と脚部の接続は図上復元
137	39		弥生土器・高杯	包含層	1／8	角・小・少，石・中・普，赤・小・少	10 YR 6/4 にぶい黄橙色	ヘラミガキ，横ナデ	不明，絞り目後ハケ目	円盤充填
138	39		弥生土器・高杯	包含層	3／8	赤・中・少，他・大・少	10 YR 6/4 にぶい黄橙色	ナデ	不明，指押さえ，ナデ	*
139	39		弥生土器・高杯	包含層	1／8	石・中・普，赤・中・少	5 YR 6/8 橙色	不明	指押さえ後ナデ	*
140	39		弥生土器・高杯	包含層	4／8	石・中・普	2.5 Y 8/3 淡黄色	ナデ	ナデ	*
141	39		弥生土器・高杯	包含層	6／8	石・大・多，赤・大・少	2.5 Y 7/3 浅黄色	不明	ナデ後ヘラミガキ，ナデ，絞り目，ナデ，指押さえ，不明	穿孔5ヶ所

第12表　土器観察表(7)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
142	39		弥生土器・高杯	包含層	3/8	石・大・普，赤・大・少	7.5YR 7/4 にぶい橙色	不明	不明，板ナデ	低脚高杯か鉢か
143	39		弥生土器・用途不明	包含層	*	石・中・少，他・小・普	2.5Y 8/3 淡黄色	ナデ	*	大きな容器の把手？
144	39	18	弥生土器・鉢	包含層	7/8	石・大・多	10YR 8/2 灰白色	ナデ，ハケ目	ナデ，指押さえ	*
145	39		弥生土器・鉢	包含層	1/8	石・大・多，赤・中・少	5YR 7/6 橙色	不明	指押さえ	*
146	39		弥生土器・鉢	包含層	7/8	雲・小・多，石・中・多	7.5YR 5/6 明褐色	ナデ	ナデ	蓋などの可能性有り
188	45		須恵器・杯	包含層	小破片	他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ，回転ヘラ削り	回転ナデ	*
189	45		須恵器・杯	包含層	小破片	石・小・普，他・小・普	N 6 灰色	回転ナデ，回転ヘラ削り（左回り）	回転ナデ	*
190	45		須恵器・杯	包含層	1/8	石・小・少	N 6 灰色	回転ナデ，回転ヘラ削り	回転ナデ	傾き不確定
191	45		須恵器・杯	包含層	小破片	他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
192	45		須恵器・杯	包含層	*	精良	N 7 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	*
193	45		須恵器・杯蓋	包含層	小破片	石・小・少，他・中・少	N 7 灰白色	不明	不明	*
194	45		須恵器・杯蓋	包含層	小破片	石・中・多	N 4 灰色	回転ナデ，ヘラ切り	回転ナデ	*
195	45		須恵器・杯蓋	包含層	2/8	石・小・普	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ，ナデ	*
196	45		須恵器・杯蓋	包含層	1/8	石・小・普，他・小・普	N 7 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外面自然釉
197	45		須恵器・杯蓋	包含層	1/8	精良	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
198	45		須恵器・高台付杯	包含層	小破片	石・中・普，他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ，回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	*
199	45		須恵器・高台付杯	包含層	1/8	石・中・普，他・小・少	N 7 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	*
200	45		須恵器・高台付杯	包含層	1/8	他・小・普	N 6 灰色	ナデ，回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	*
201	45		須恵器・高台付杯	包含層	1/8	石・小・少	N 5 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
202	45		須恵器・高台付杯	包含層	2/8	他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
203	45		須恵器・杯	包含層	小破片	石・小・少	N 5 灰色	回転ナデ	回転ナデ	口径不確定
204	45		須恵器・杯	包含層	1/8	他・小・少	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*

第13表　土器観察表(8)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
205	45		須恵器・杯	包含層	1／8	石・小・普，赤・小・普	N 6 灰色	回転ナデ，回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	胴外面のみ灰色，底径不確定
206	45		須恵器・杯	包含層	2／8	石・小・普，他・中・少	N 6 灰色	回転ナデ，回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	*
207	45		須恵器・杯	包含層	1／8	石・小・少，他・中・普	N 6 灰色	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	*
208	45		須恵器・壺	包含層	2／8	石・中・少	N 7 灰白色	回転ナデ，ヘラ切り	回転ナデ	内外面自然釉
209	45	18	須恵器・杯	包含層	2／8	石・小・少	N 6 灰色	回転ナデ，ヘラ切り	回転ナデ	外底の刻みは文字かヘラ記号か
210	45		須恵器・杯	包含層	小破片	他・中・少	N 7 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	傾き不確定
211	45		須恵器・杯	包含層	2／8	石・小・少	N 5 灰色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ	平高台状
212	45		須恵器・皿	包含層	1／8	石・大・多	N 5 灰色	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	*
213	45		須恵器・皿	包含層	小破片	石・小・少	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
214	45		須恵器・皿	包含層	小破片	石・小・少	N 4 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
215	45		須恵器・皿	包含層	1／8	石・中・普	N 6 灰色	回転ナデ，ヘラ切り	回転ナデ	*
216	45		須恵器・皿	包含層	2／8	石・小・普	N 7 灰白色	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	*
217	45		須恵器・杯	包含層	2／8	石・小・少，他・小・少	N 5 灰色	回転ナデ，ヘラ切り	回転ナデ	*
218	45		須恵器・杯	包含層	3／8	石・小・少	N 6 灰色	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ，ナデ	*
219	45		須恵器・杯	包含層	2／8	石・小・少	N 5 灰色	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	平高台
220	45		須恵器・杯	包含層	2／8	石・小・少	N 6 灰色	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ後ナデ	平高台状
221	45		須恵器・杯	包含層	3／8	石・小・少	N 6 灰色	回転ナデ，ヘラ切り	回転ナデ	平高台
222	45		須恵器・高台付椀	包含層	1／8	石・中・少	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	高台のしっかりした椀
223	45		瓦質土器・椀	包含層	小破片	石・小・普	2.5 Y 7/1 灰白色	回転ナデ，板ナデ	回転ナデ，ヘラミガキ	西村産(口縁から外面灰色，内面白)
224	45		瓦質土器・椀	包含層	小破片	石・小・普，赤・小・普	N 7 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	傾き不確定，口縁内外面灰色

第 14 表　土器観察表(9)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
225	45		須恵器・高杯	包含層	*	石・中・普，他・中・普	N 5 灰色	回転ナデ	ナデ，ヘラ切り，回転ナデ後ナデ	大型高杯か？
226	45		須恵器・高杯	包含層	*	石・大・多，他・中・普	2.5 Y 7/1 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	透しなし
227	45		須恵器・壺蓋	包含層	小破片	石・小・少	N 5 灰白	回転ナデ	回転ナデ	*
228	45		須恵器・壺	包含層	2／8	石・中・普	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
229	45		須恵器・壺	包含層	8／8	石・小・普，他・小・普	N 7 灰白色	回転ナデ，ナデ	接合面	粘土板の接合面で剥離
230	45		須恵器・壺	包含層	1／8	石・小・普	N 7 灰白色	回転ナデ	ナデ	*
231	45		須恵器・鉢	包含層	1／8	他・小・少	5 Y 8/1 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	杯？
232	45	18	須恵器・鉢	包含層	1／8	石・大・多，赤・中・普	2.5 Y 7/1 灰白色	回転ナデ	回転ナデ	傾き不確定，注ぎ口有り
233	45		須恵器・甕	包含層	小破片	石・中・普，他・小・少	N 4 灰色	回転ナデ	回転ナデ	*
234	45		須恵器・甕	包含層	小破片	精良	N 6 灰色	回転ナデ	回転ナデ	内外面自然釉
235	45		須恵器・壺	包含層	1／8	石・小・少，他・小・少	N 5 灰色	タタキ目，回転ヘラ削り，ヘラ切り	回転ナデ	*
236	45		須恵器・鉢？	包含層	小破片	石・中・多	N 5 灰色	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	把手部分，軟質，21 と同一個体？
237	45		須恵器・円面硯	包含層	1／8	石・小・少	5 Y 4/1 灰色	回転ナデ	回転ナデ	透し，ヘラ記号
238	46		土師器・杯	包含層	小破片	石・小・少	5 YR 5/6 明赤褐色	横ナデ	横ナデ	内外面赤色顔料塗布
239	46		土師器・椀	包含層	3／8	石・小・少	2.5 Y 7/6 明黄褐色	不明	不明	*
240	46		土師器・高台付杯	包含層	1／8	精良	10 YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ，不明	不明	傾き不確定
241	46		土師器・高台付杯	包含層	1／8	石・小・少	2.5 Y 7/3 浅黄色	不明	不明	*
242	46		土師器・杯	包含層	1／8	石・中・普	2.5 Y 8/2 灰白色	横ナデ，ヘラ切り	横ナデ	*
243	46		土師器・杯	包含層	2／8	石・大・多	2.5 Y 7/3 浅黄色	横ナデ，ヘラ切り	横ナデ	*
244	46		土師器・杯	包含層	小破片	石・小・少，赤・小・少	7.5 YR 7/6 橙色	ナデ	ナデ	平高台
245	46		円盤状土製品	包含層	*	石・小・少，赤・小・少，他・小・少	N 6 灰色	回転ヘラ切り後板状圧痕	回転ナデ後ナデ	須恵器・杯からの転用
246	46		土師器・杯	包含層	1／8	石・小・少，他・中・普	10 YR 8/3 浅黄橙色	横ナデ，不明	横ナデ	*

第 15 表　土器観察表(10)

遺物番号	挿図	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
247	46		黒色土器A類・椀	包含層	1／8	石・大・普	5YR 6/8 橙色	ナデ	ナデ後ヘラミガキ	*
248	46		黒色土器A類・椀	包含層	1／8	石・中・少，他・小・少	2.5Y 7/4 浅黄色	横ナデ	不明	*
249	46		黒色土器A類・椀	包含層	2／8	他・小・少	2.5Y 7/4 浅黄色	回転ナデ	不明	*
250	46		白磁・碗	包含層	小破片	精良	7.5Y 7/1 灰白色	ナデ	ナデ	*
251	46		瓦器・椀	包含層	1／8	石・中・普，赤・中・少	N 7 灰白色	不明	不明	*
252	46		土師器・甕	包含層	1／8	石・大・多	10YR 7/4 にぶい黄橙色	横ナデ，ナデ	横ナデ，ハケ目，不明	*
253	46		土師器・甕？	包含層	*	雲・小・少，石・大・多	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ，ハケ目	ハケ目後ナデ，指押さえ	把手
254	46		土師器・甕	包含層	小破片	石・中・普，赤・小・少	10YR 7/3 にぶい黄橙色	横ナデ，ナデ，ハケ目	ナデ，不明	*
255	46		土師器・鍋	包含層	1／8	石・大・普	10YR 7/3 にぶい黄橙色	横ナデ，指押さえ後ナデ	横ナデ	径不確定
256	46		土師質土器・土釜	包含層	小破片	石・大・多，赤・中・少	2.5Y 8/2 灰白色	不明	不明	*
257	46		土師質土器・土釜	包含層	小破片	石・中・普，他・小・普	10YR 5/2 灰黄褐色	横ナデ	不明	*
258	46		土師質土器・土釜	包含層	*	石・大・多	7.5YR 7/4 にぶい橙色	指ナデ	*	脚部
259	46		平瓦	包含層	*	他・中・少	2.5Y 8/2 灰白色	ナデ	布目圧痕	*
260	46		平瓦	包含層	*	石・大・普	2.5Y 7/2 灰黄色	縄目叩き	布目	土師質

第16表　土器観察表(II)

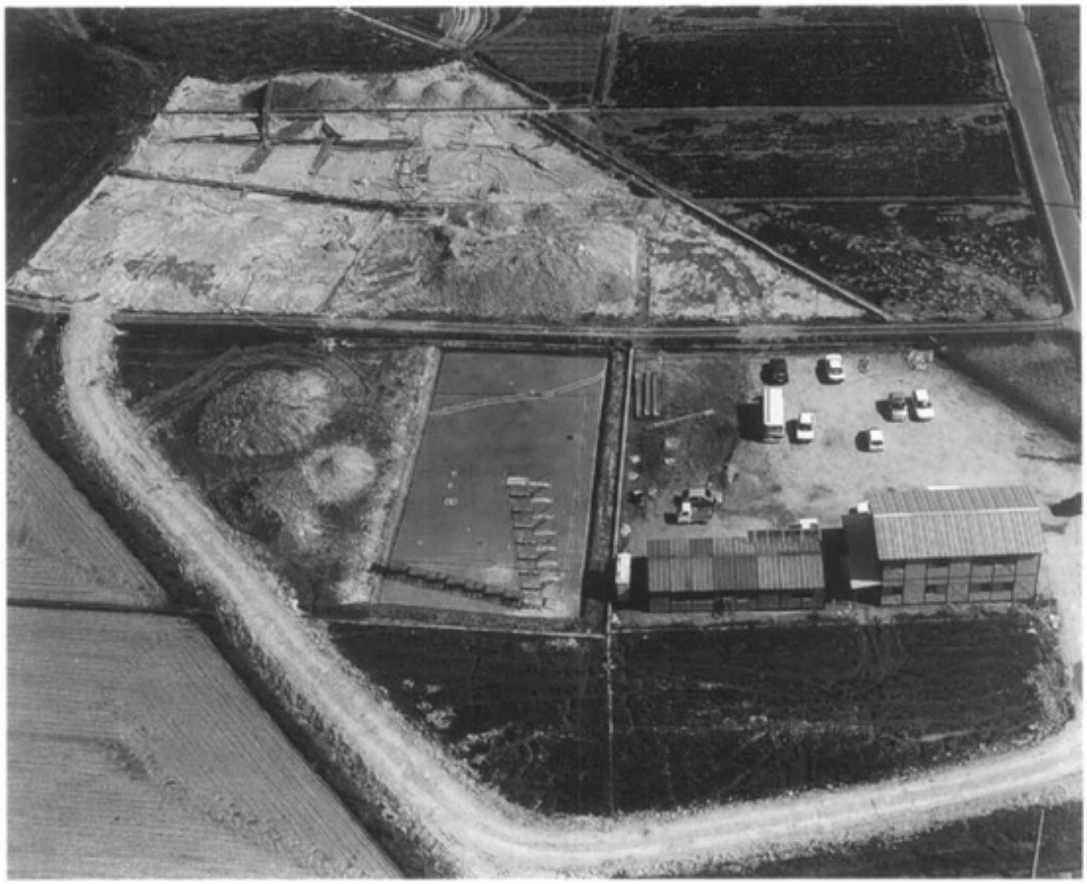
遺物番号	挿図	図版	器種・種類	遺構名	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
28	20	19	旧石器・翼状剥片石核	SD 01	7.7	4.8	1.5	48.7	サヌカイト	下部は剥片を取った後折損
29	20	19	旧石器・剥片	SD 01	3.9	4.0	1.1	17.0	サヌカイト	*
30	20	20	打製石器・石庖丁	SD 01	6.0	5.0	0.6	14.3	サヌカイト	*
51	24	21	打製石器・石庖丁	SD 05	4.2	6.6	1.2	32.3	サヌカイト	小型の打製石斧の両側が欠けた可能性もある
60	27	20	打製石器・石庖丁	SD 12	6.7	4.1	0.7	25.4	サヌカイト	未製品？
61	27	24	打製石器・石鏃	SD 12	3.3	1.9	0.4	2.4	サヌカイト	*
67	29	24	打製石器・石鏃	SD 18	3.9	1.5	0.4	2.2	サヌカイト	凸基II式
71	30	25	砥石	SD 19	10.0	*	5.5	421.4	砂岩	研ぎ面3面。左面には細い擦痕もある
75	32	25	ガラス小玉	SD 24	0.8	0.6	*	0.2	ガラス	青色
147	40	20	打製石器・石庖丁	包含層	5.8	12.0	1.1	97.8	サヌカイト	刃部が磨滅
148	40	20	打製石器・石庖丁	包含層	9.7	5.7	0.9	62.5	サヌカイト	*
149	40	20	打製石器・石庖丁	包含層	8.5	4.2	0.9	44.5	サヌカイト	*
150	40	20	打製石器・石庖丁	包含層	9.2	4.4	1.0	36.3	サヌカイト	*
151	40	20	打製石器・石庖丁	包含層	4.1	4.2	1.0	21.7	サヌカイト	背部と抉りの間の側縁に礫面残る
152	40	20	打製石器・石庖丁	包含層	4.9	4.8	1.1	27.0	サヌカイト	左面礫面残る
153	40	20	打製石器・石庖丁	包含層	5.0	4.6	0.8	27.1	サヌカイト	未製品？
154	40	20	打製石器・石庖丁	包含層	3.8	4.5	0.8	14.4	サヌカイト	*
155	41	21	打製石器・石庖丁	包含層	5.9	9.7	1.4	89.3	サヌカイト	礫面を抉りに使用
156	41	21	打製石器・石庖丁	包含層	9.6	4.7	1.1	48.2	サヌカイト	左面左側縁礫面残り抉りなし。未製品？
157	41	21	打製石器・石庖丁	包含層	8.0	4.1	1.0	41.8	サヌカイト	抉りなし。礫面右面に残る
158	41	21	打製石器・石庖丁	包含層	5.5	6.1	0.8	29.3	サヌカイト	*
159	41	21	打製石器・石庖丁	包含層	4.3	3.2	0.5	7.5	サヌカイト	石庖丁としたが性格不明
160	41	21	打製石器・石庖丁	包含層	6.6	3.5	0.7	22.8	サヌカイト	小型品
161	41	21	打製石器・石庖丁	包含層	5.2	1.7	0.5	5.8	結晶片岩	刃部等は石材の関係で全く不明
162	41	19	打製石器・石鏃	包含層	7.1	3.2	0.7	16.8	サヌカイト	刃部は片面のみ細部調整。石鏃にしては短い
163	42	23	打製石器・スクレイパー	包含層	12.2	6.1	1.9	87.3	サヌカイト	*
164	42	23	打製石器・スクレイパー	包含層	10.3	4.6	1.0	50.4	サヌカイト	左面刃部一部磨滅か？
165	42	23	打製石器・スクレイパー	包含層	5.0	8.1	0.9	32.9	サヌカイト	*
166	42	23	打製石器・スクレイパー	包含層	5.9	7.9	0.8	32.9	サヌカイト	*
167	42	23	打製石器・スクレイパー	包含層	7.1	5.1	1.1	45.8	サヌカイト	*
168	43	22	打製石器・石斧	包含層	6.6	9.4	2.7	205.5	サヌカイト	使用痕認められず。が根元が折損
169	43	22	打製石器・石斧	包含層	6.8	4.0	1.1	34.2	サヌカイト	*

第17表　石器等観察表(1)

遺物番号	挿図	図版	器種・種類	遺構名	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
170	43	22/23	打製石器・石斧	包含層	3.9	5.3	1.3	24.4	サヌカイト	側面と平面で擦痕の方向不一致
171	43	23	叩石	包含層	9.5	3.0	2.6	142.9	砂岩	叩いた痕跡はあまり認められない
172	43	23	打製石器・用途不明	包含層	5.0	5.1	1.4	45.8	サヌカイト	斧等として使用中折損し廃棄。その後再加工
173	44	24	打製石器・石鏃	包含層	4.6	2.5	0.6	5.2	サヌカイト	*
174	44	24	打製石器・石鏃	包含層	3.3	2.0	0.4	2.6	サヌカイト	*
175	44	24	打製石器・石鏃	包含層	2.9	1.7	0.4	1.4	サヌカイト	凹基式
176	44	24	打製石器・石鏃	包含層	1.9	1.3	0.3	0.7	サヌカイト	*
177	44	24	打製石器・石鏃	包含層	3.3	1.7	0.5	2.2	サヌカイト	両側縁がギザギザに調整され，両面に平坦面を残さない丁寧なつくり
178	44	24	打製石器・石鏃	包含層	3.9	2.0	0.4	2.1	サヌカイト	*
179	44	24	打製石器・石鏃	包含層	3.6	2.3	0.8	4.9	サヌカイト	右面礫面残る
180	44	24	打製石器・石鏃	包含層	3.0	2.0	0.5	2.8	サヌカイト	左面礫面残る
181	44	24	打製石器・石鏃	包含層	3.1	1.6	0.4	1.9	サヌカイト	*
182	44	24	打製石器・石鏃	包含層	2.6	1.1	0.4	0.8	サヌカイト	風化著しい
183	44	24	打製石器・石鏃	包含層	4.8	2.4	0.6	5.2	サヌカイト	*
184	44	24	打製石器・石鏃	包含層	4.4	1.5	0.5	3.7	サヌカイト	*
185	44	24	打製石器・石鏃	包含層	4.5	1.8	0.4	2.8	サヌカイト	有茎式
186	44	24	打製石器・石鏃	包含層	3.2	1.7	0.4	2.5	サヌカイト	有茎式
187	44	24	打製石器・石剣	包含層	5.7	5.3	1.0	36.8	サヌカイト	剥離・調整面は灰白色と灰色があり灰色(左面右側縁及び下部)は使用中或いは廃棄後の折損と思われる
261	46	25	石帯	包含層	3.4	3.7	0.6	20.8	花崗岩？	紐通しの穴4ケ所裏面にあり
262	46	25	化石	包含層	4.4	*	2.6	21.4	シリコン	アンモナイト類の殻の出入り口。クリーニングが既に行われており，破れ面も人為的な欠損の可能性がある
263	46	25	化石？	包含層	2.9	3.9	*	39.6	？	筋状の凹凸は人工的には見えないものの整っている
264	46	19	翼状剥片石核	包含層	4.4	3.2	1.1	11.8	サヌカイト	右面左半分が翼状剥片剥離面。もう1回剥片を取ろうとし失敗し廃棄

第18表　石器等観察表(2)

図　　版



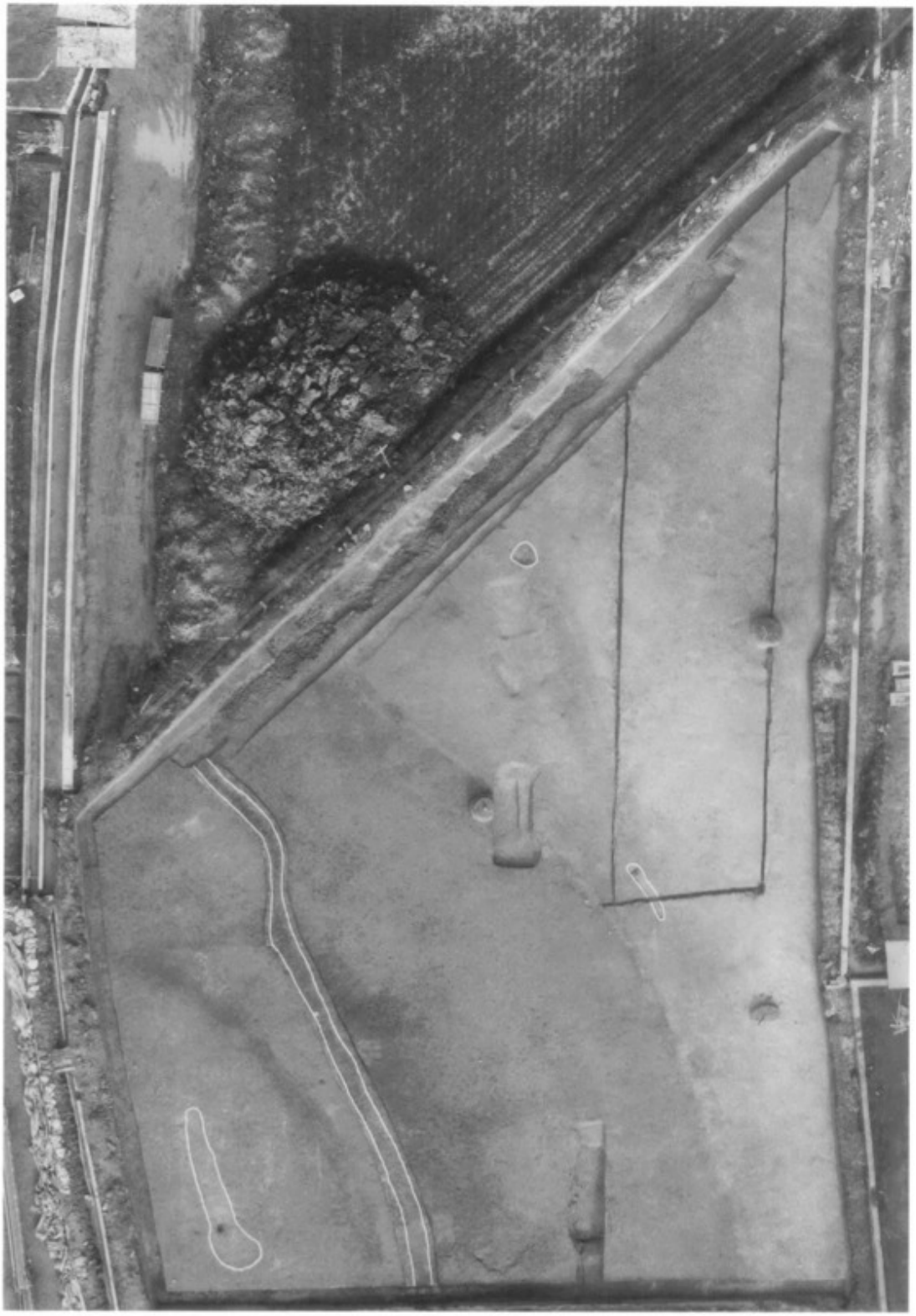
国分寺下日名代遺跡ほぼ全景（西より）

図版 2

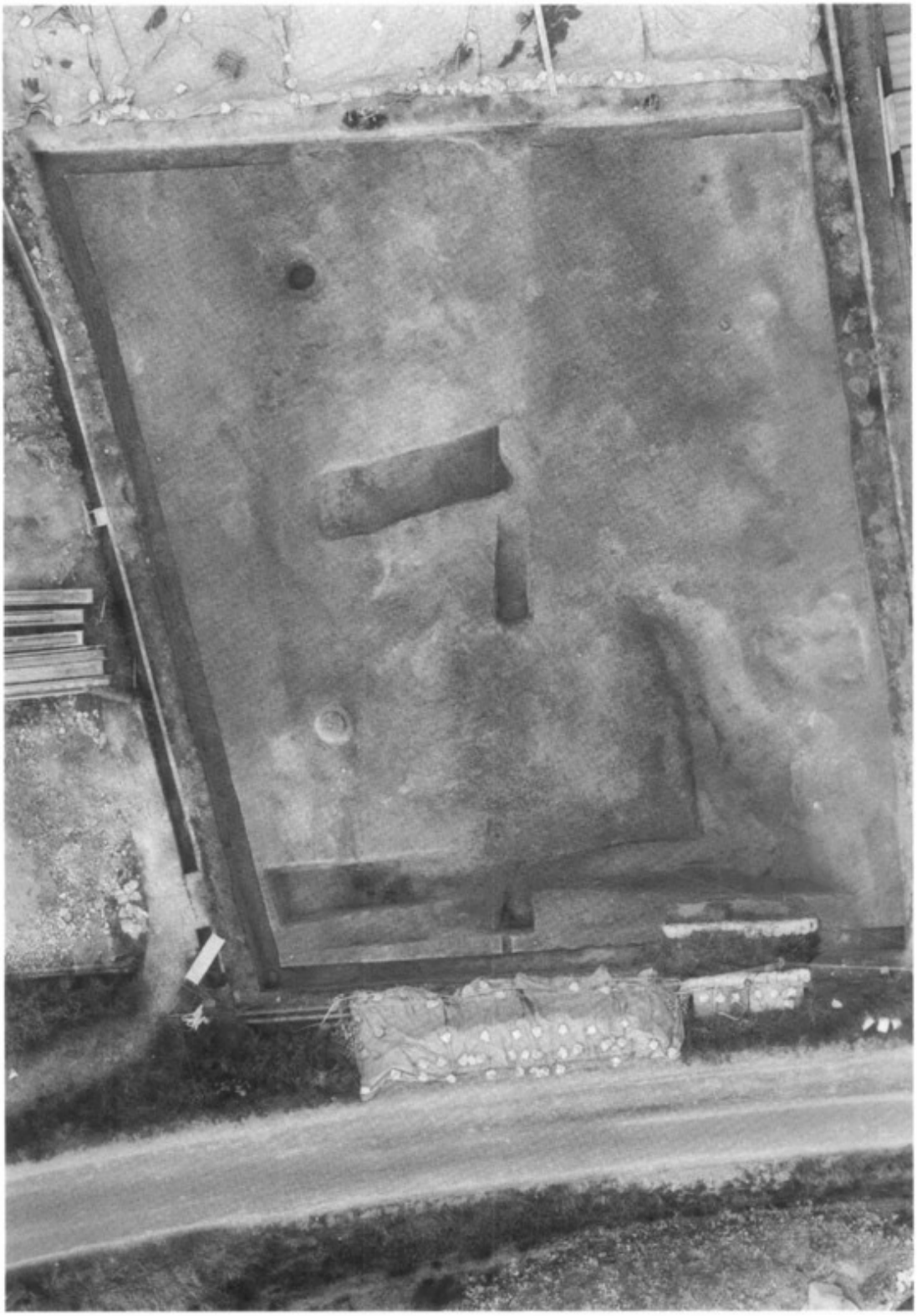
Ⅰ区　掘削終了状況（俯瞰）

2区Ⅰ・Ⅱ　掘削終了状況（俯瞰）

図版 4

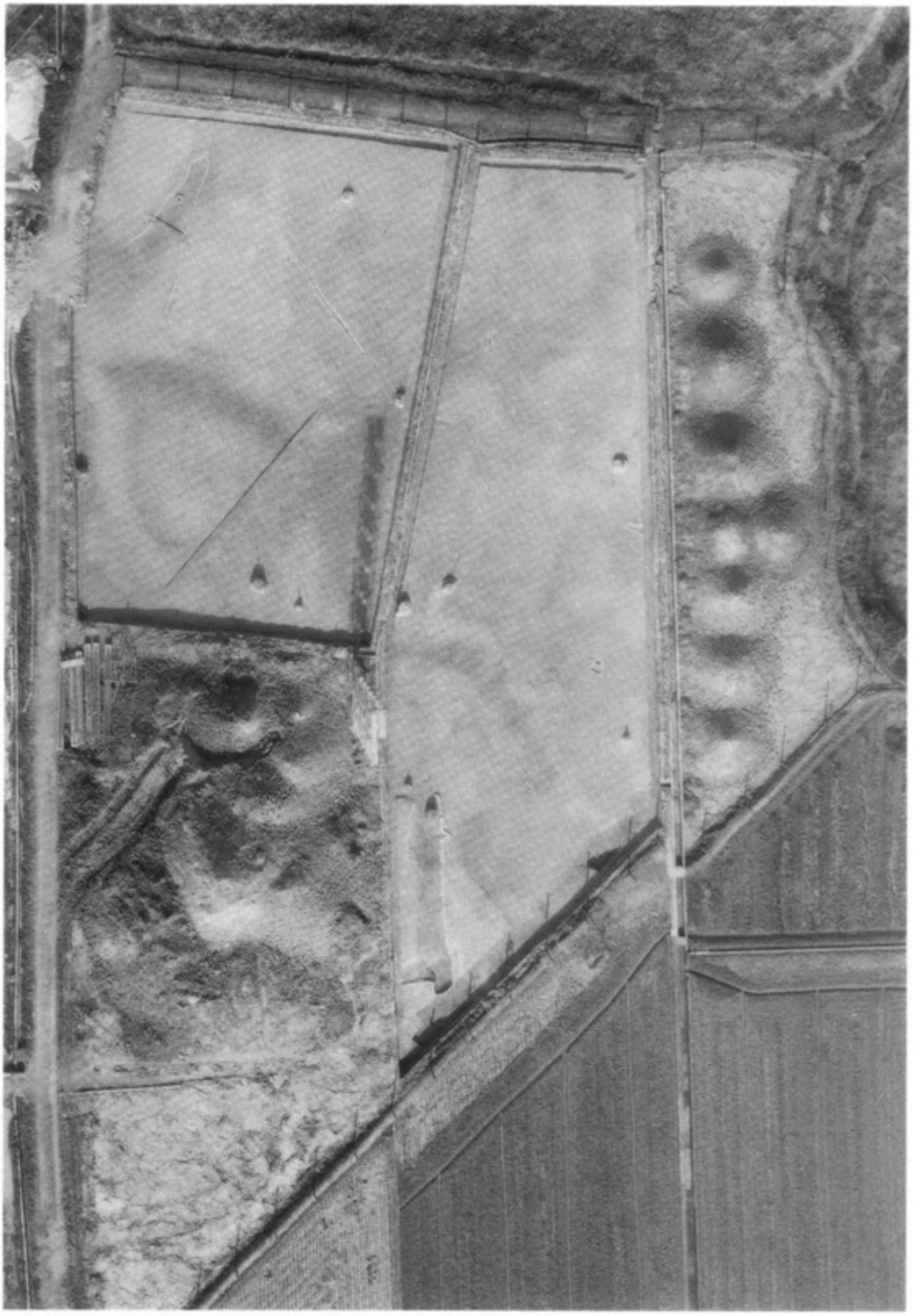


2 区III　掘削終了状況（俯瞰）

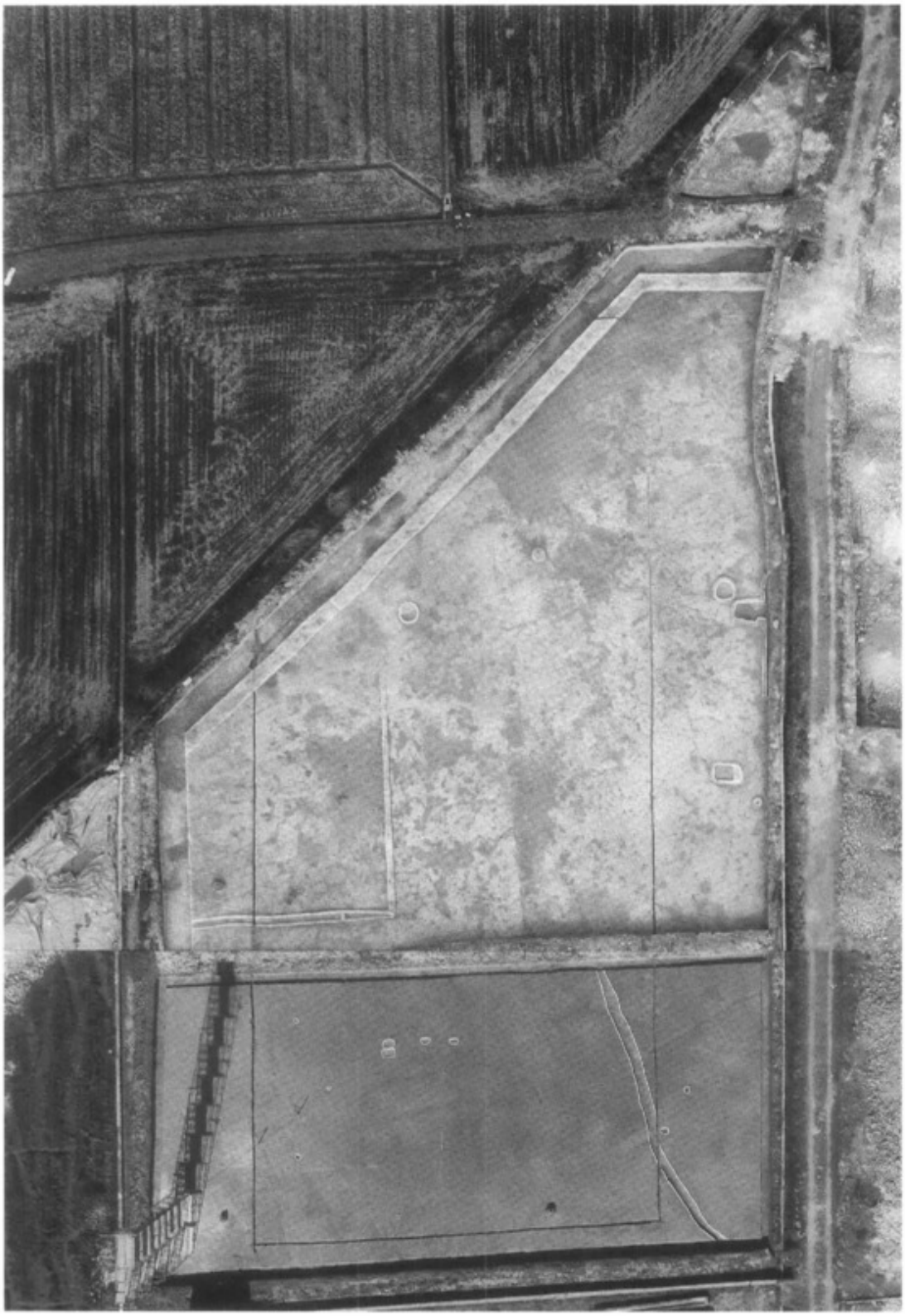


2 区IV　掘削終了状況（俯瞰）

図版 6

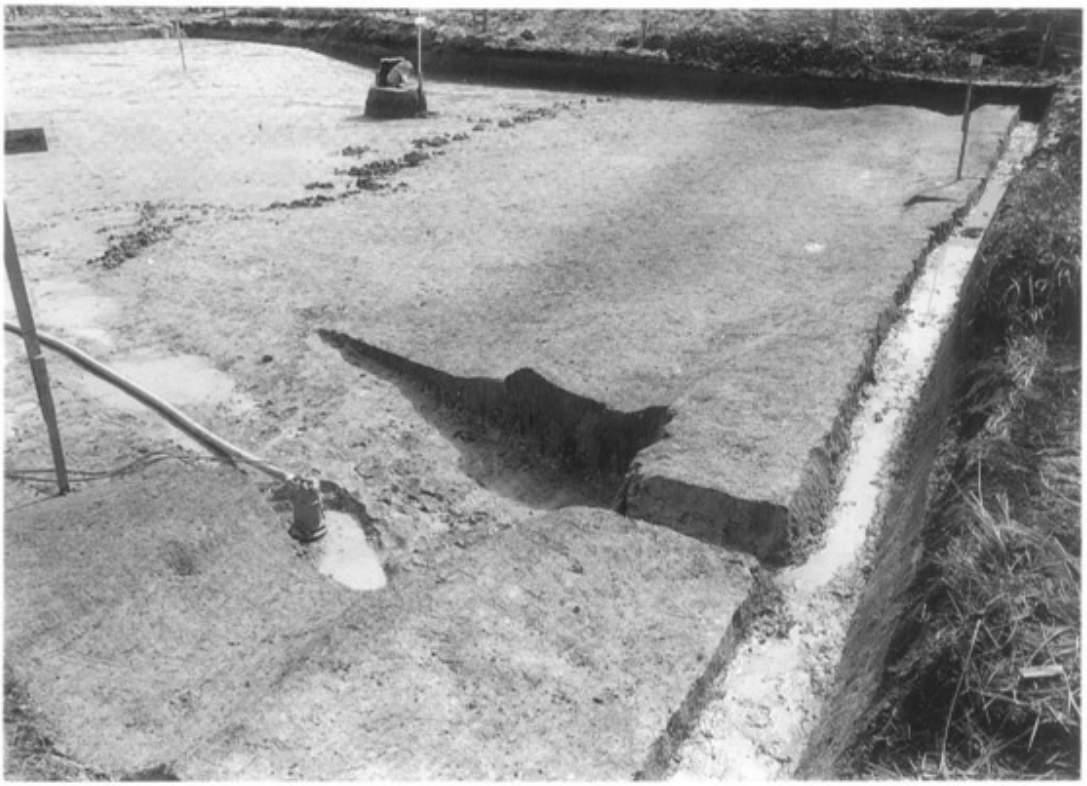


3 区 I ・III　掘削終了状況（俯瞰）



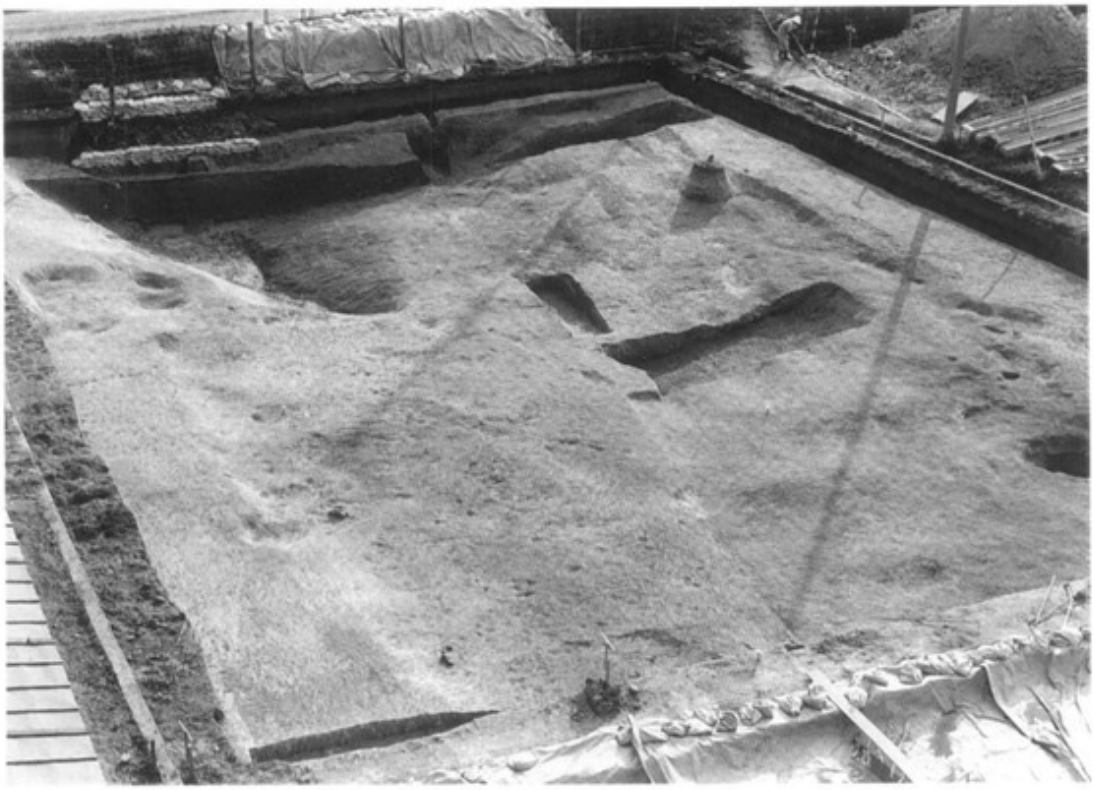
3 区Ⅴ　掘削終了状況（俯瞰）

図版 8

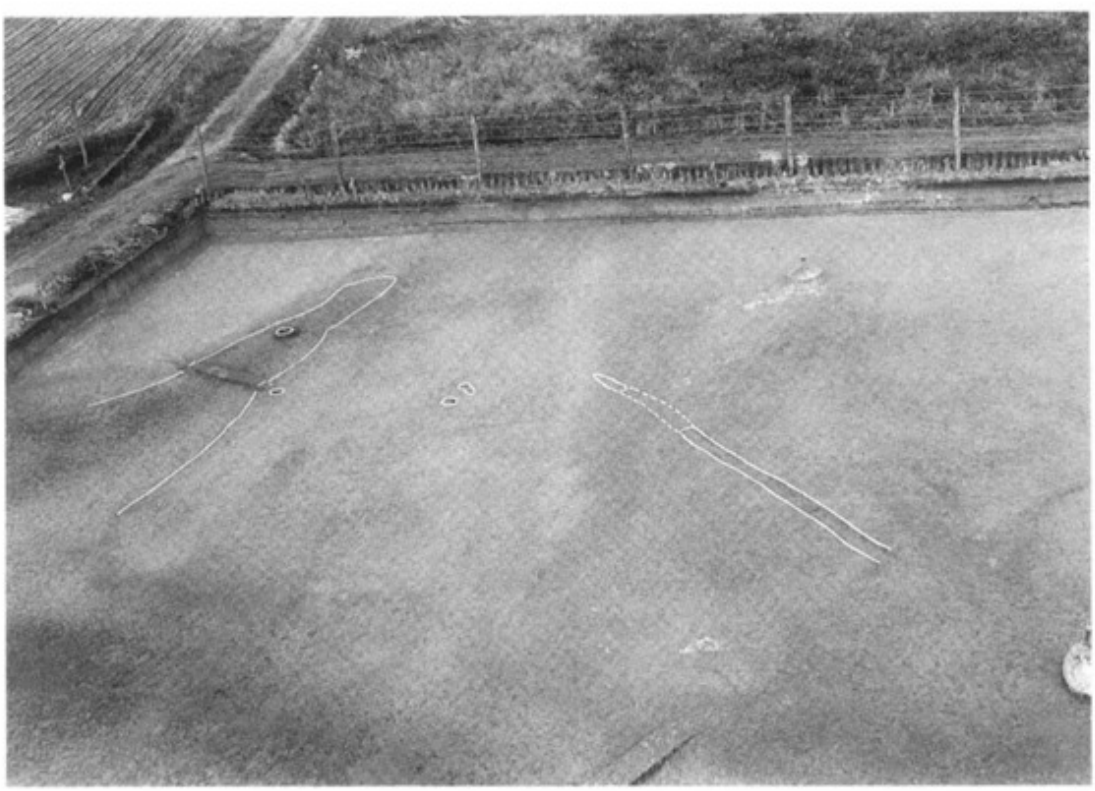


2 区 I　南西部近景（SD 12・13 除去後，北より）

SX 04 調査風景（2 区IV，北東より）

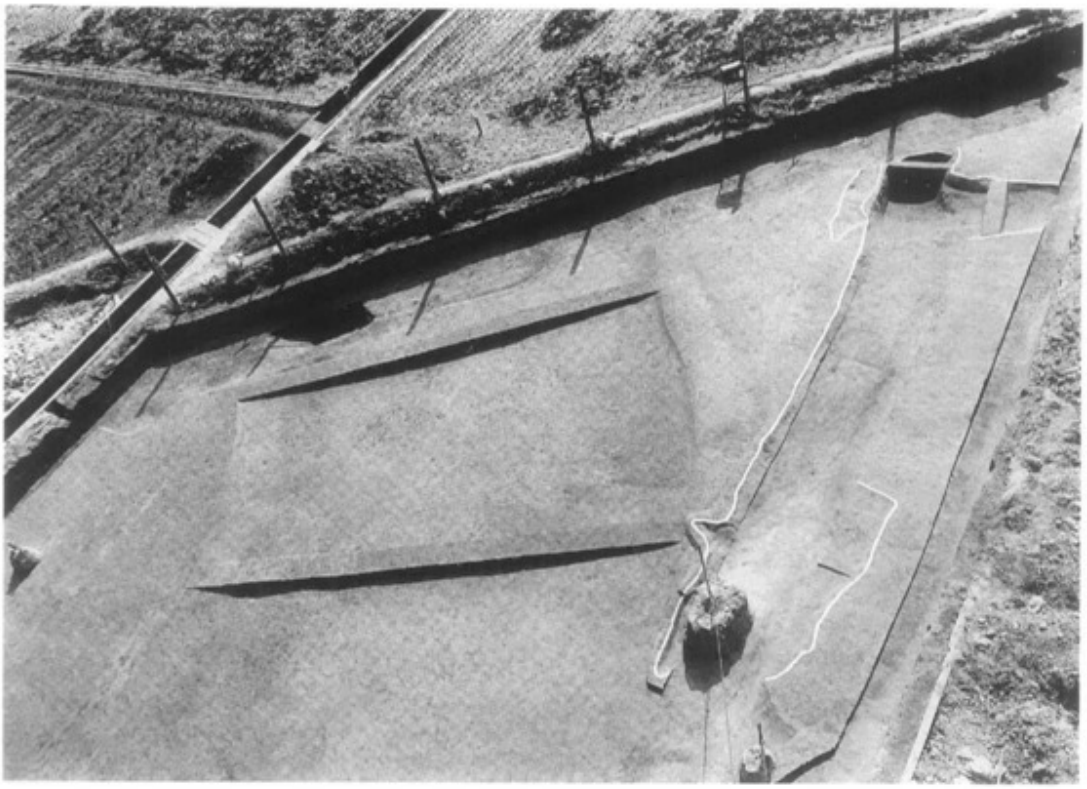


2 区IV　近景（北東より）



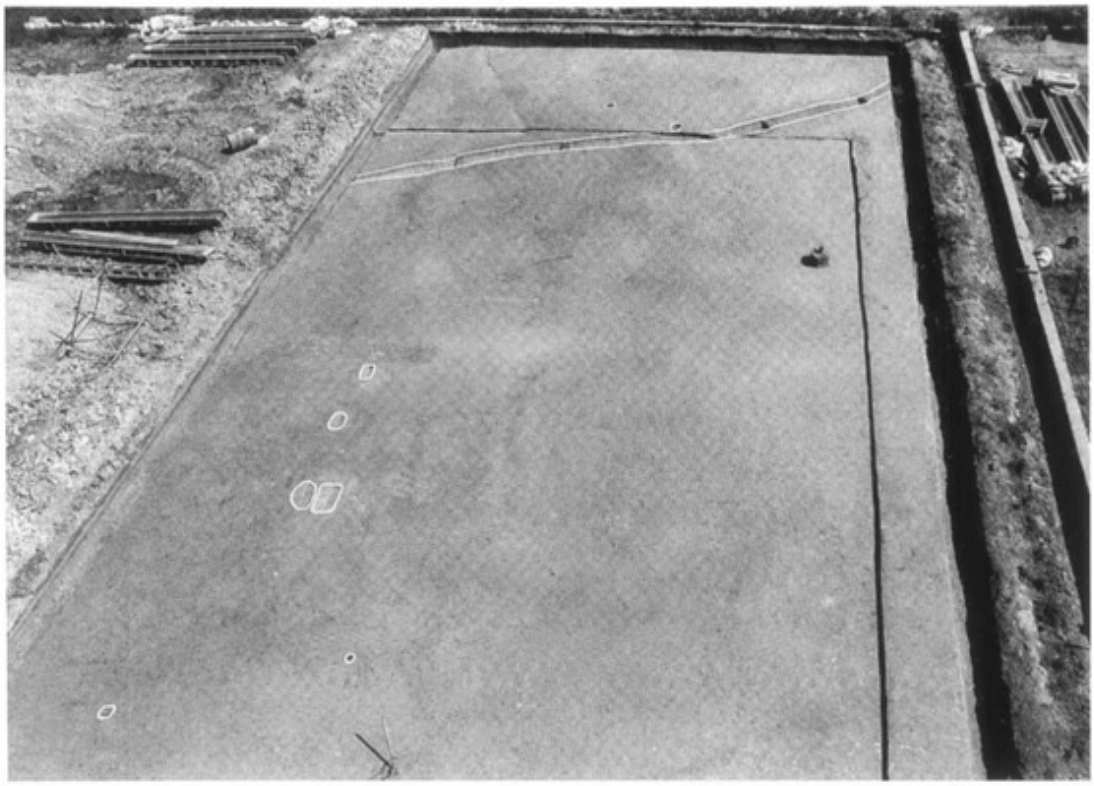
3 区 I　北部近景（南東より）

図版10

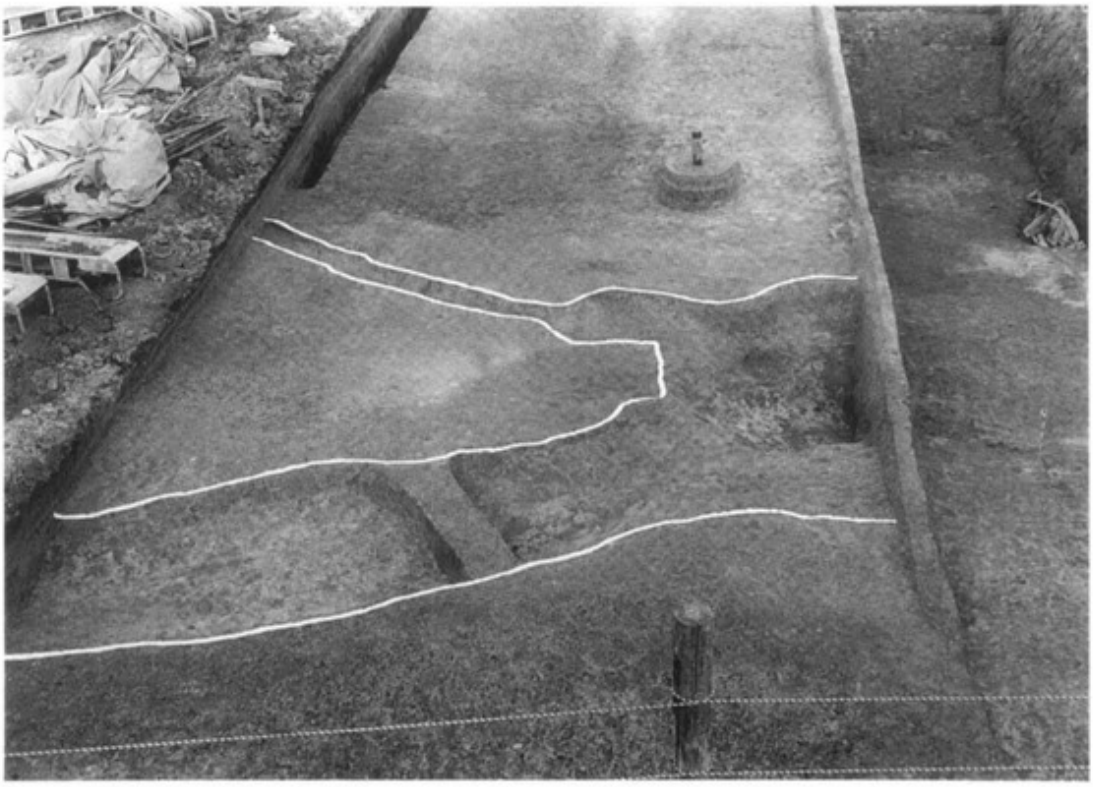


3区III　南半部近景（北西より）

3区IV　近景（西より）

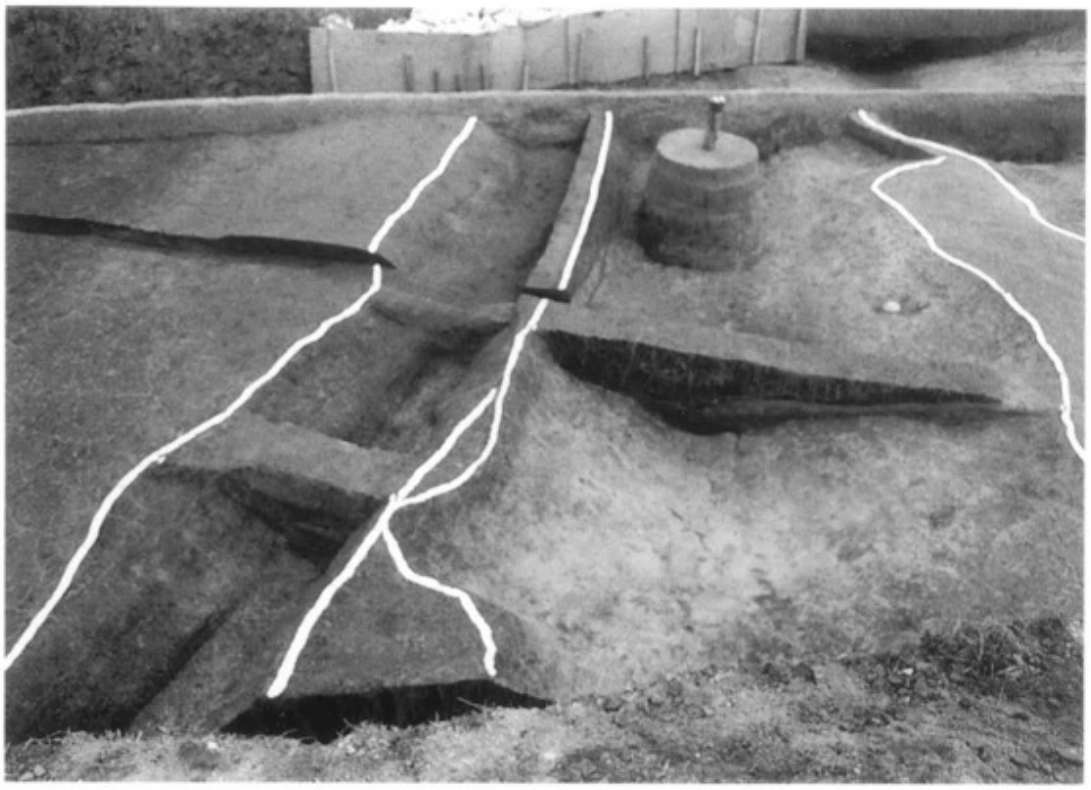


3区V　南半部近景（西より）



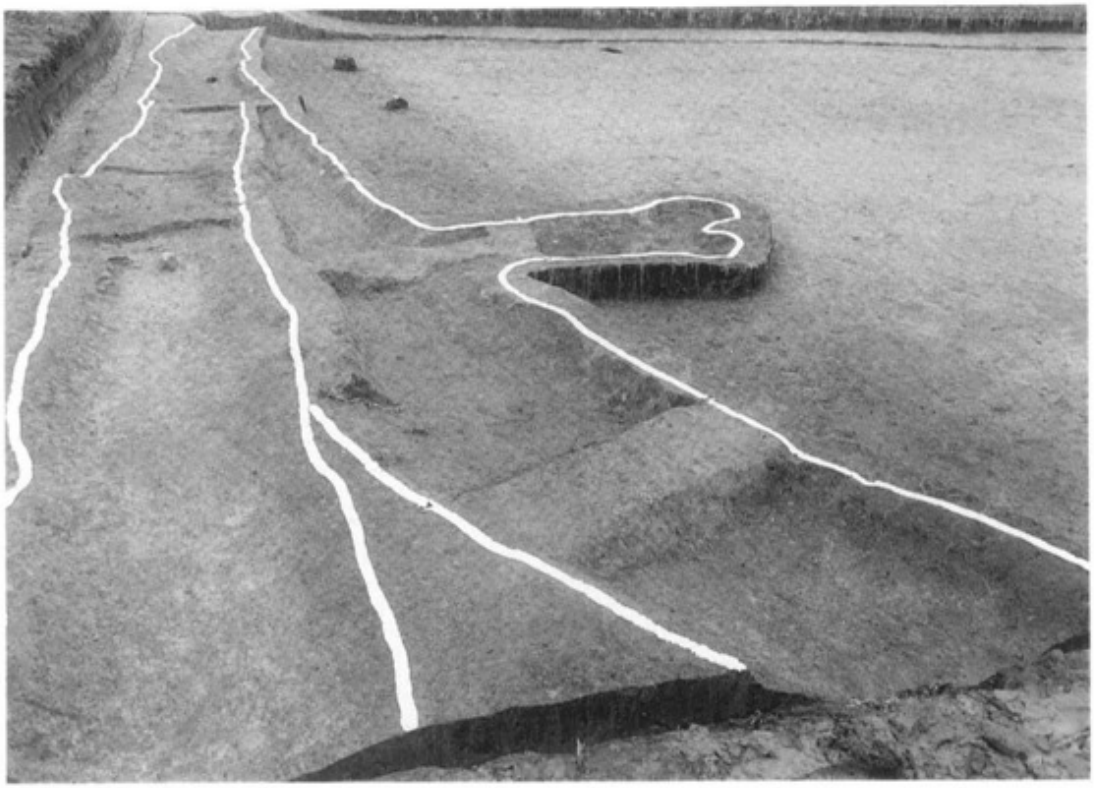
SD 01・02 掘削終了（南西より）

図版12

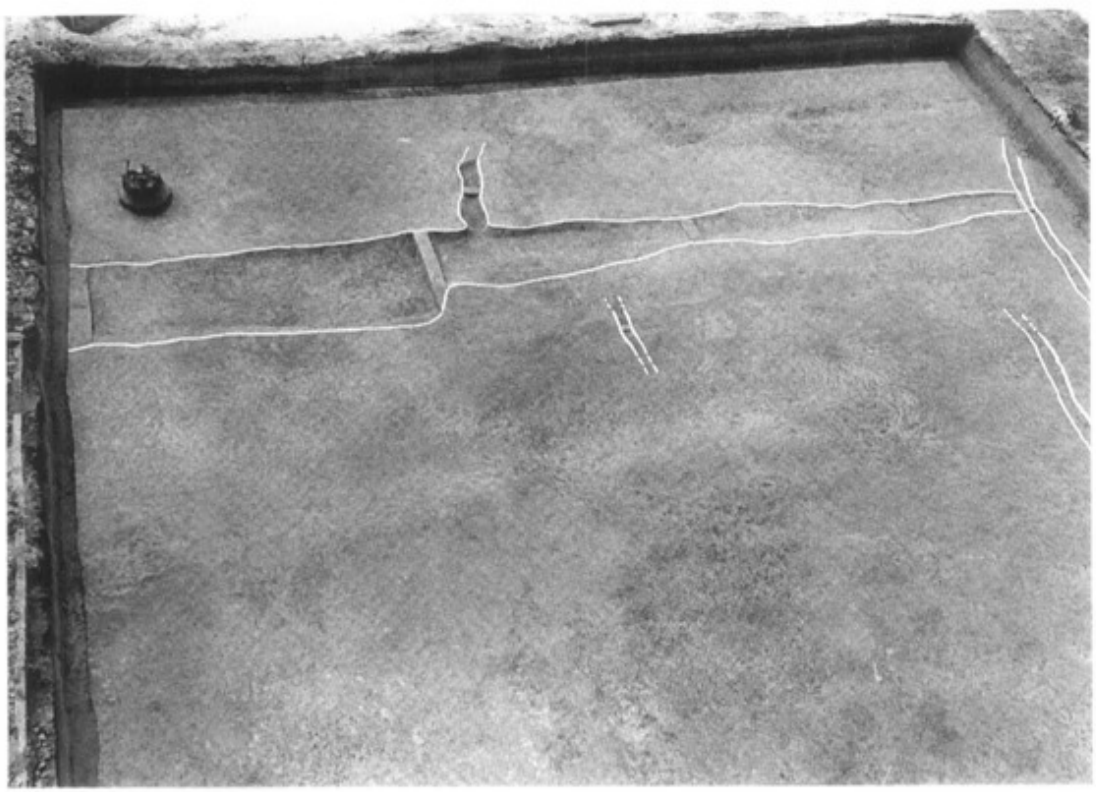


SD 05・06 掘削終了（北より）

SD 07 杭列検出状況（北より）

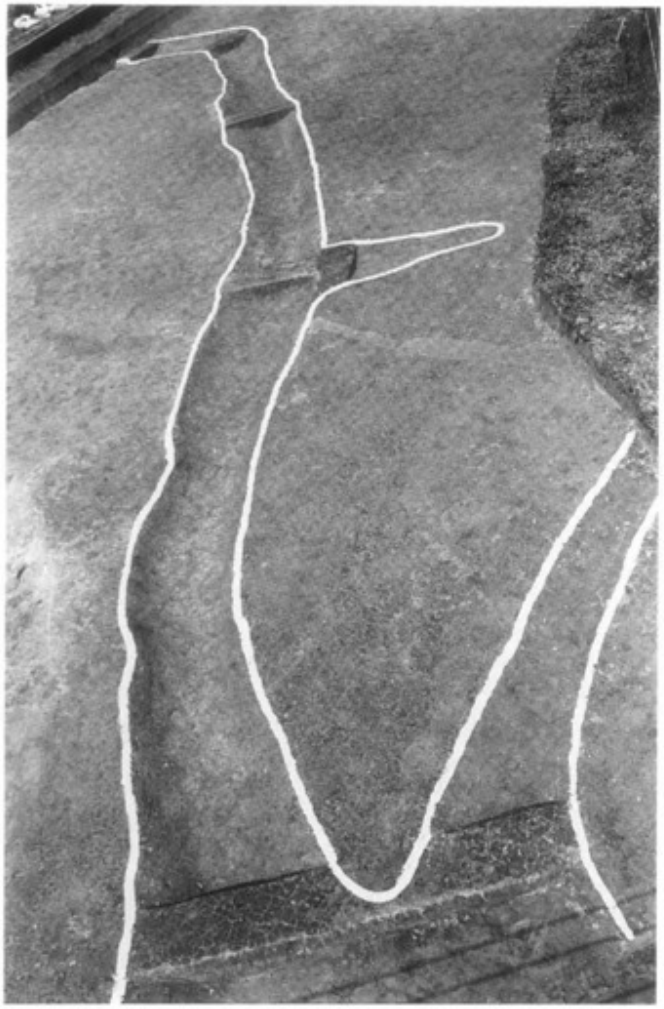


SD 12・13 掘削終了（南より）

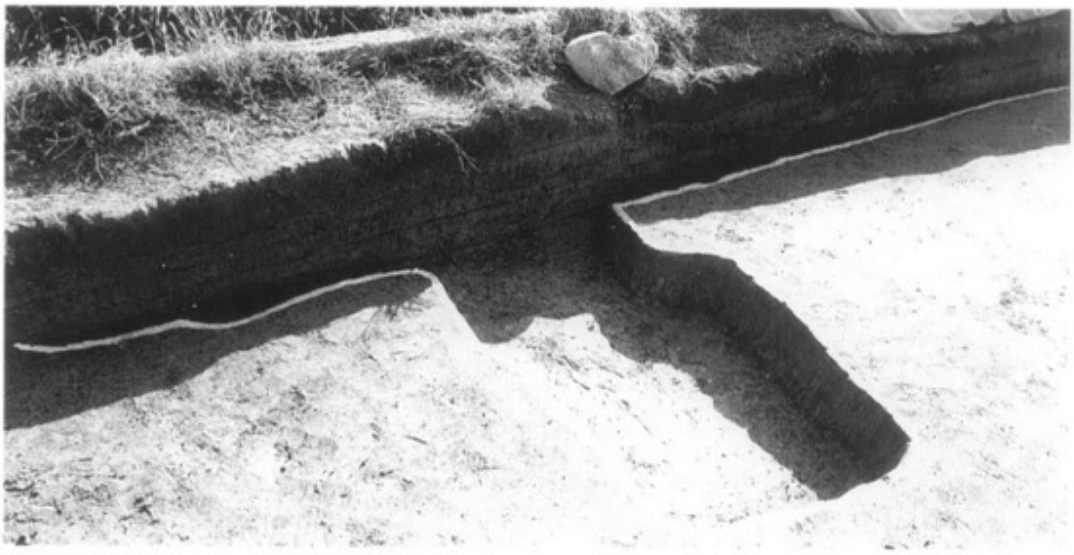


SD 19 掘削終了（北より）

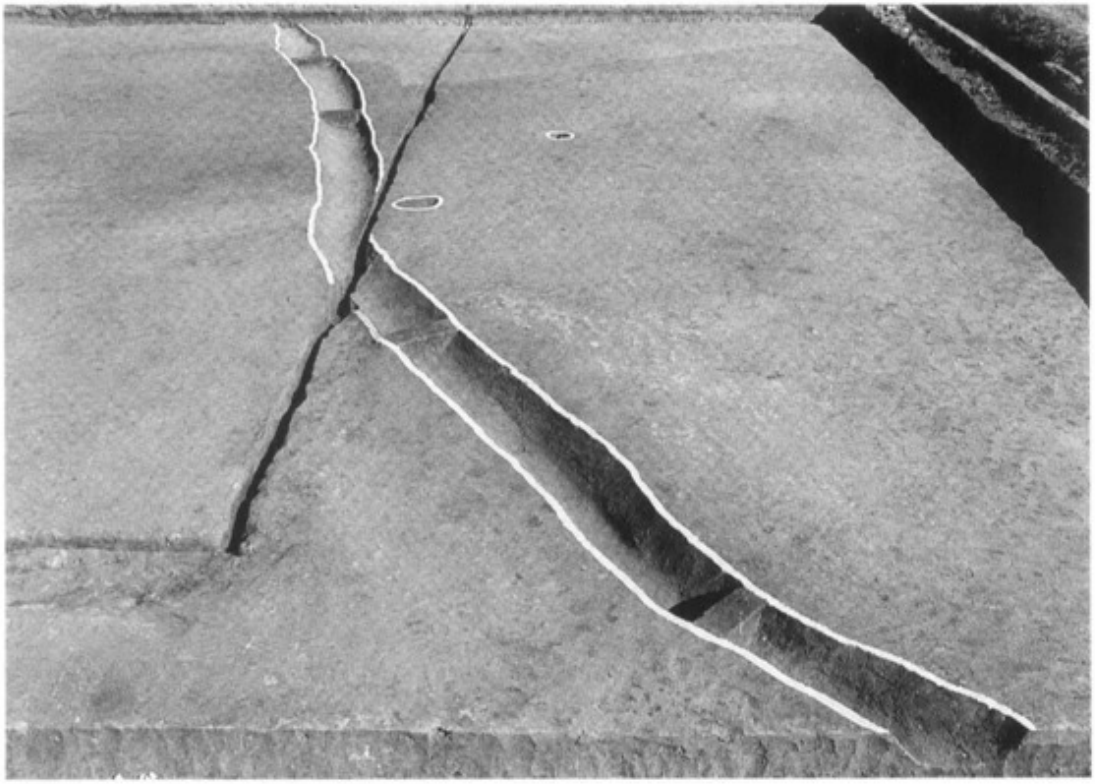
図版14



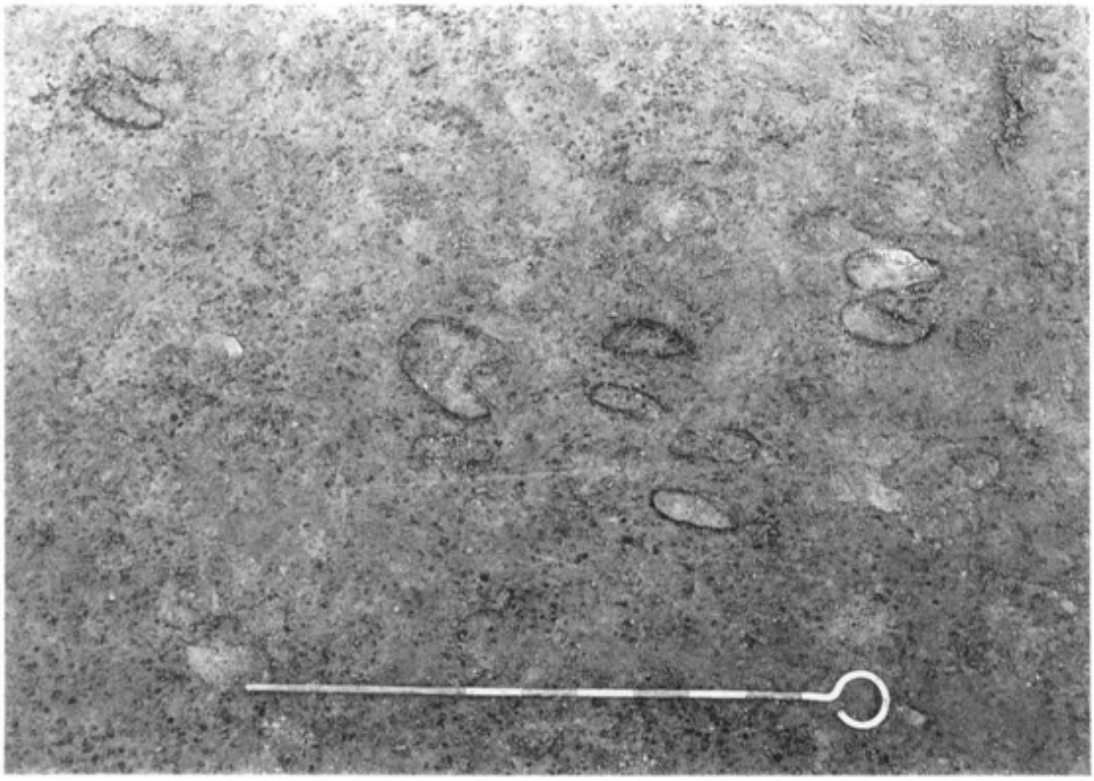
SD 24 掘削終了（南より）



SD 26・SK 01 掘削終了（北西より）

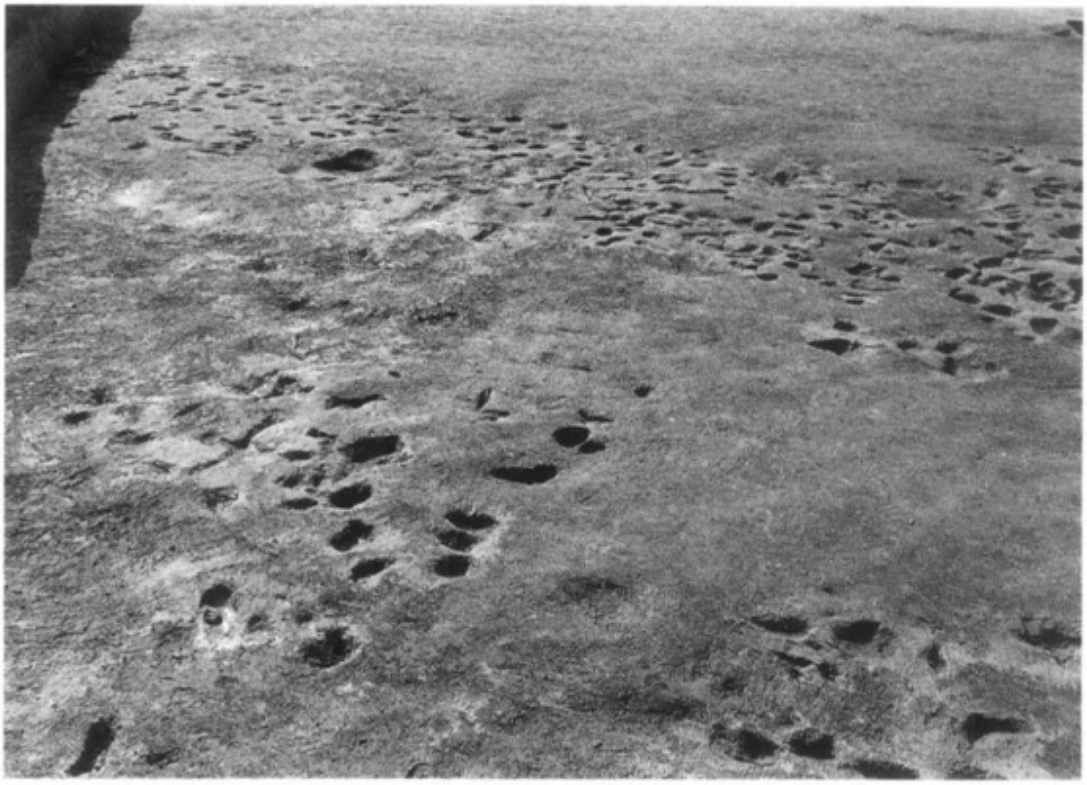


SD 27 掘削終了（南より）



動物の足跡検出状況(1)（Ⅰ区Ⅰ）

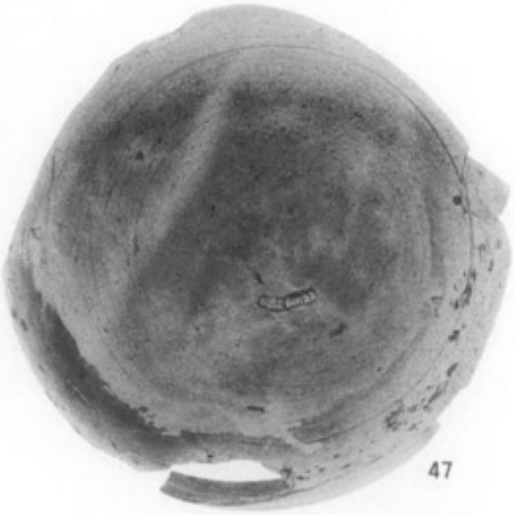
図版16



動物の足跡検出状況(2)（1区II）

動物の足跡検出状況(3)（2区III，左上がSD 15）

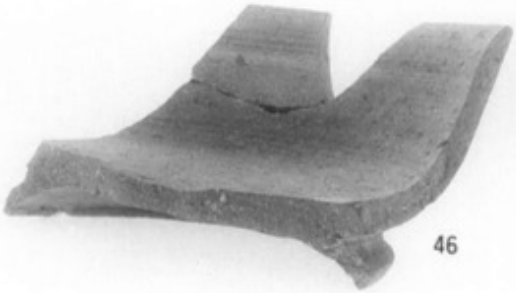
21



47

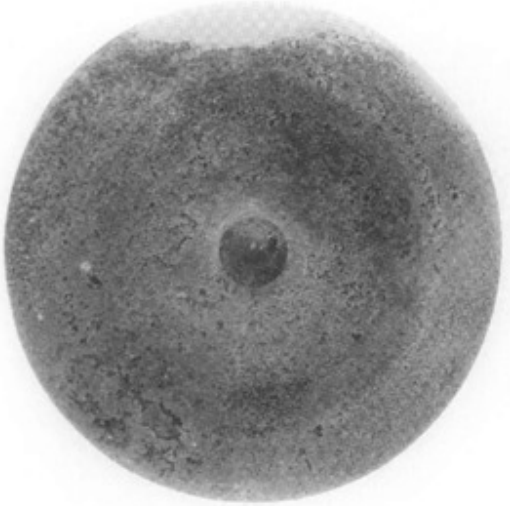
37

49

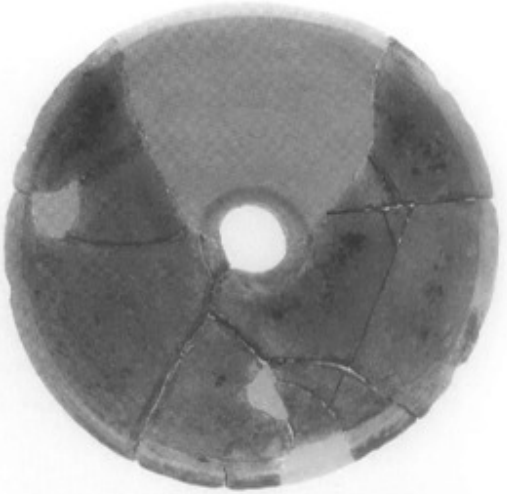


46

図版18

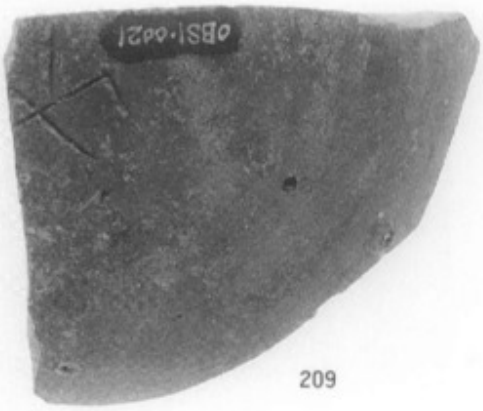


53



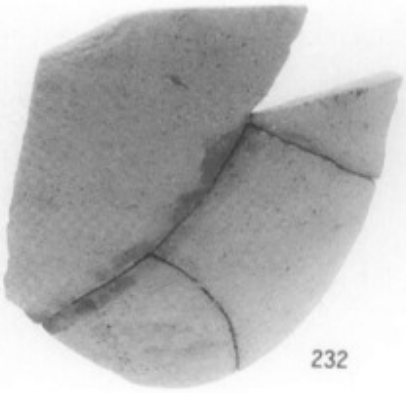
127

104

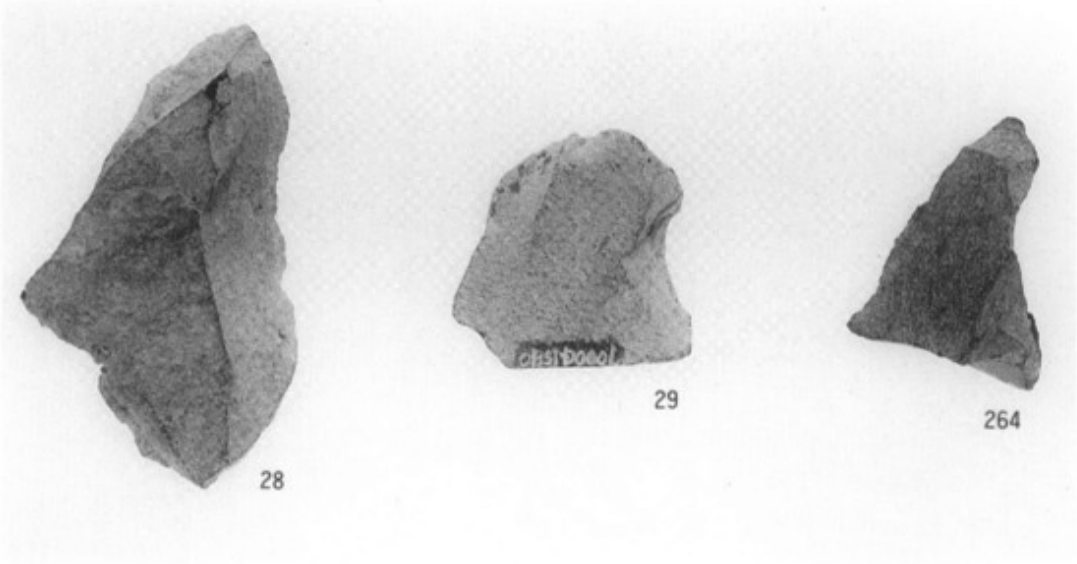


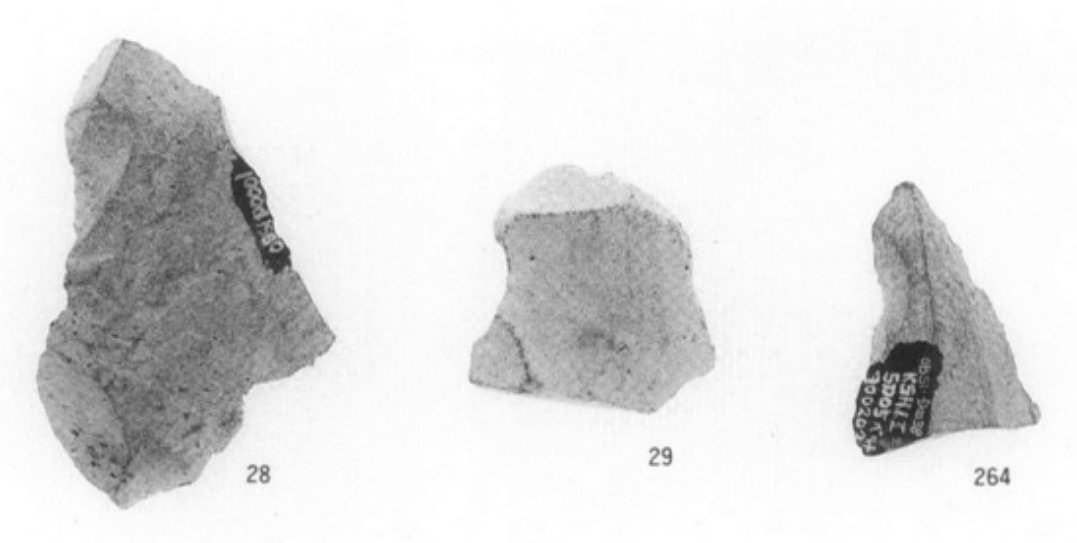
209

144

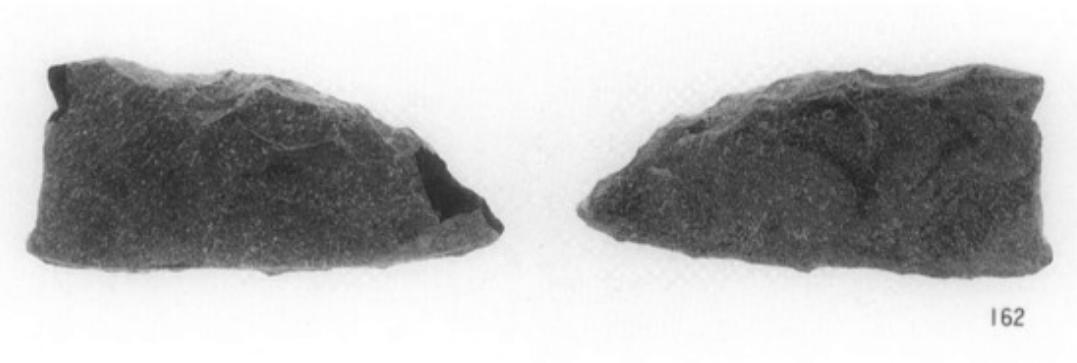


232

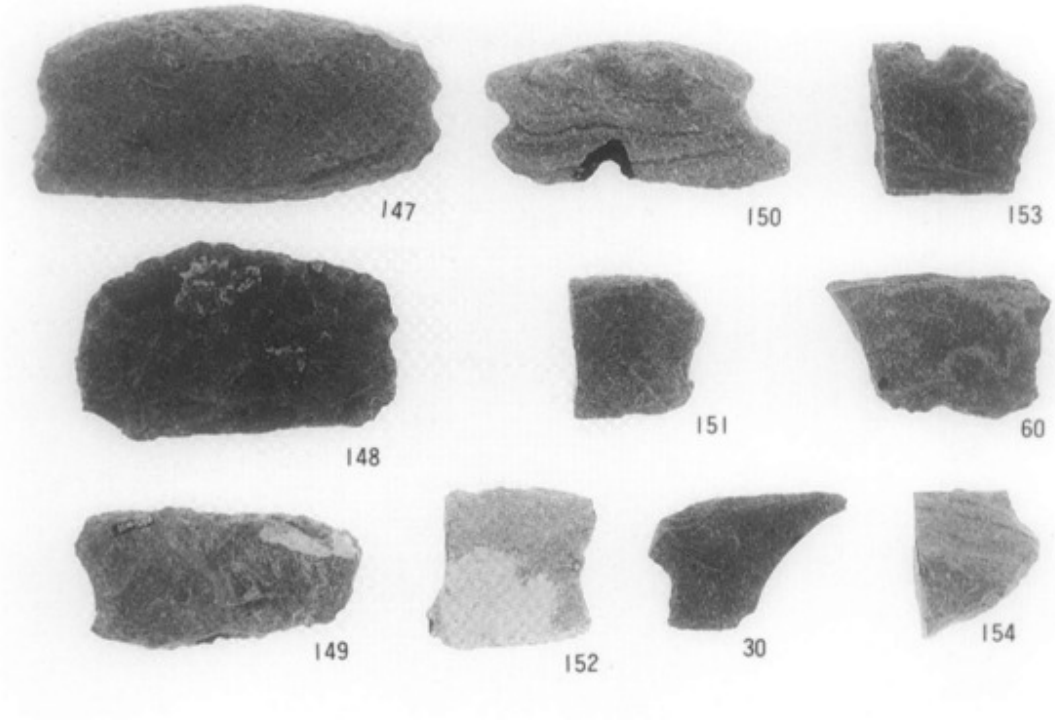


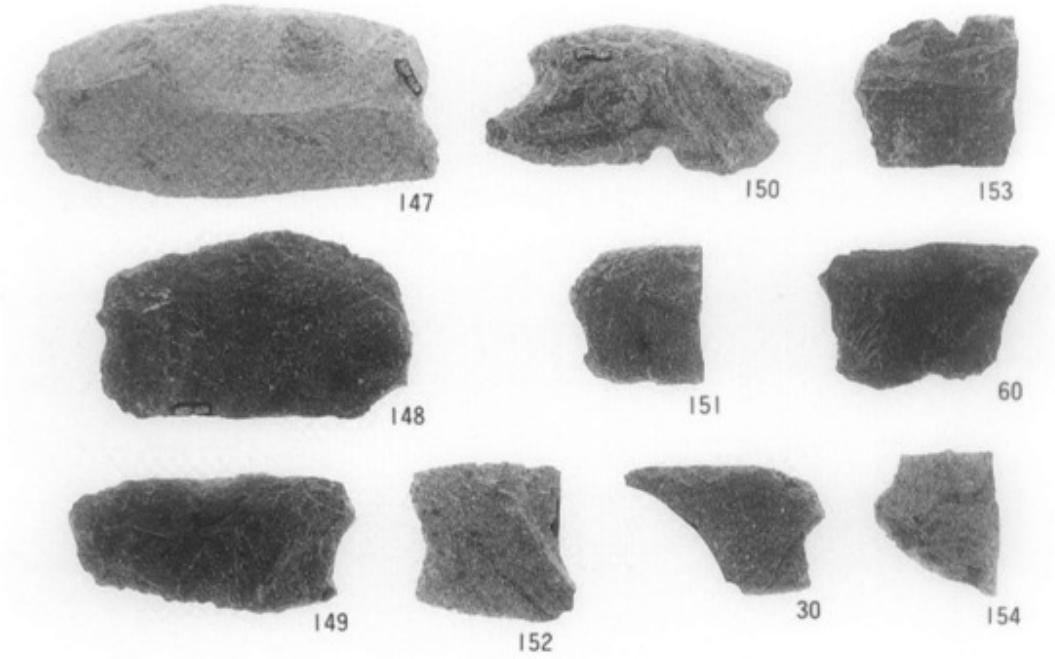


旧石器

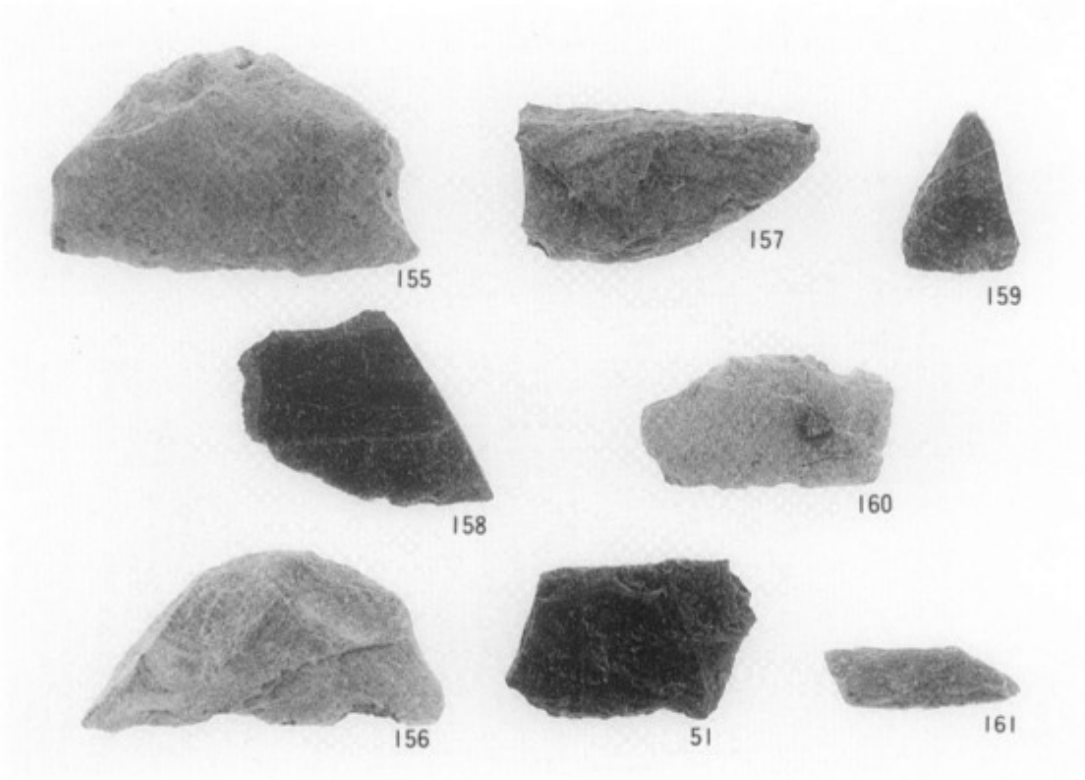


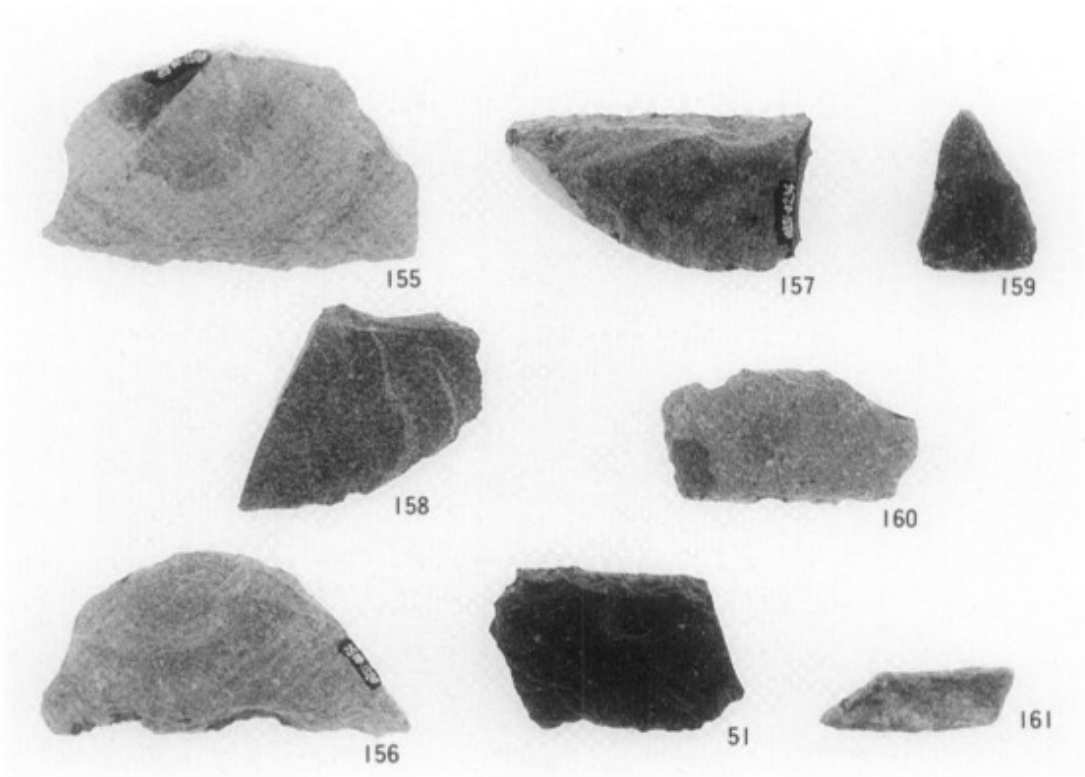
石　槍


147
150
153
148
151
60
149
152
30
154


147
150
153
148
151
60
149
152
30
154

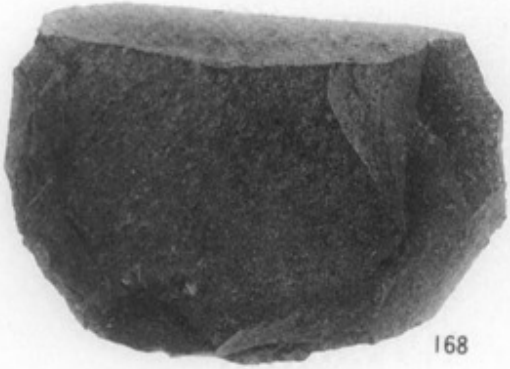
石包丁





石包丁

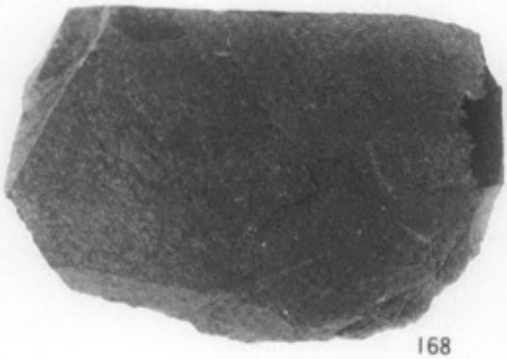
図版22



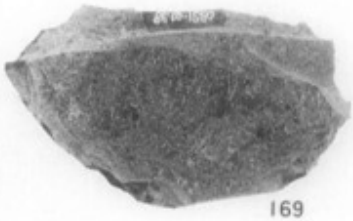
168

169

170



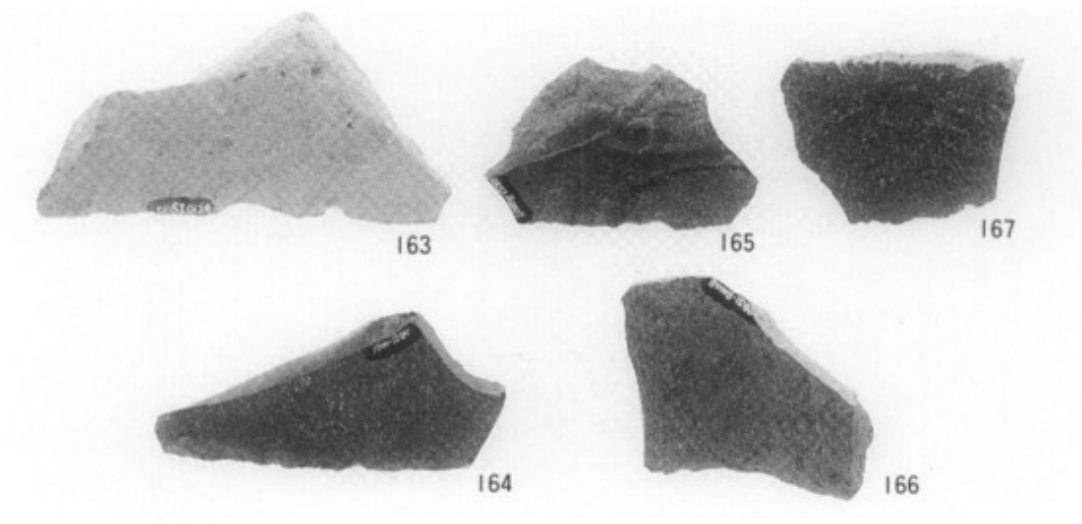
168



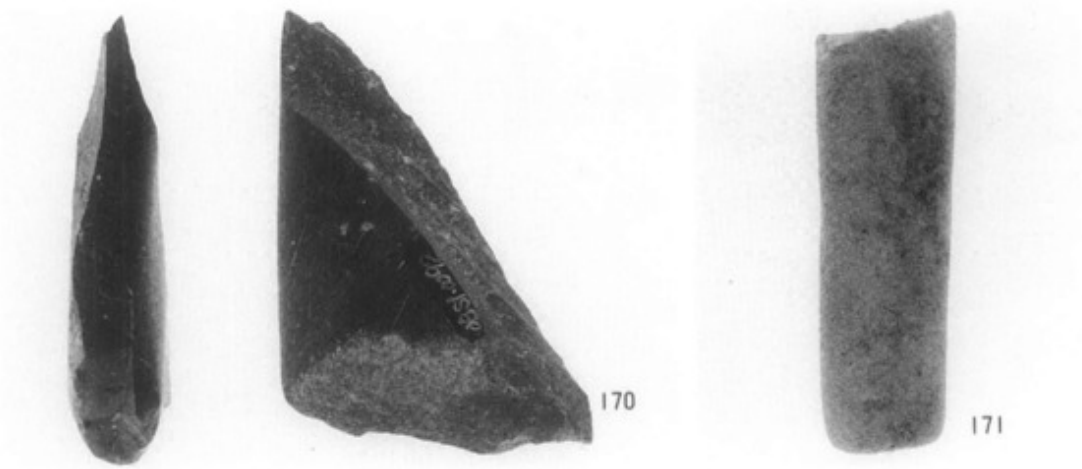
169

170

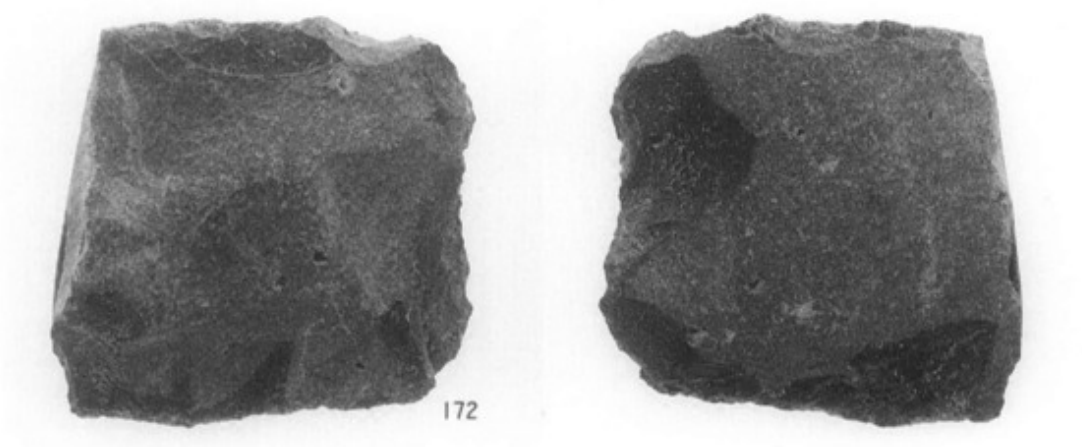
石 斧



スクレイパー

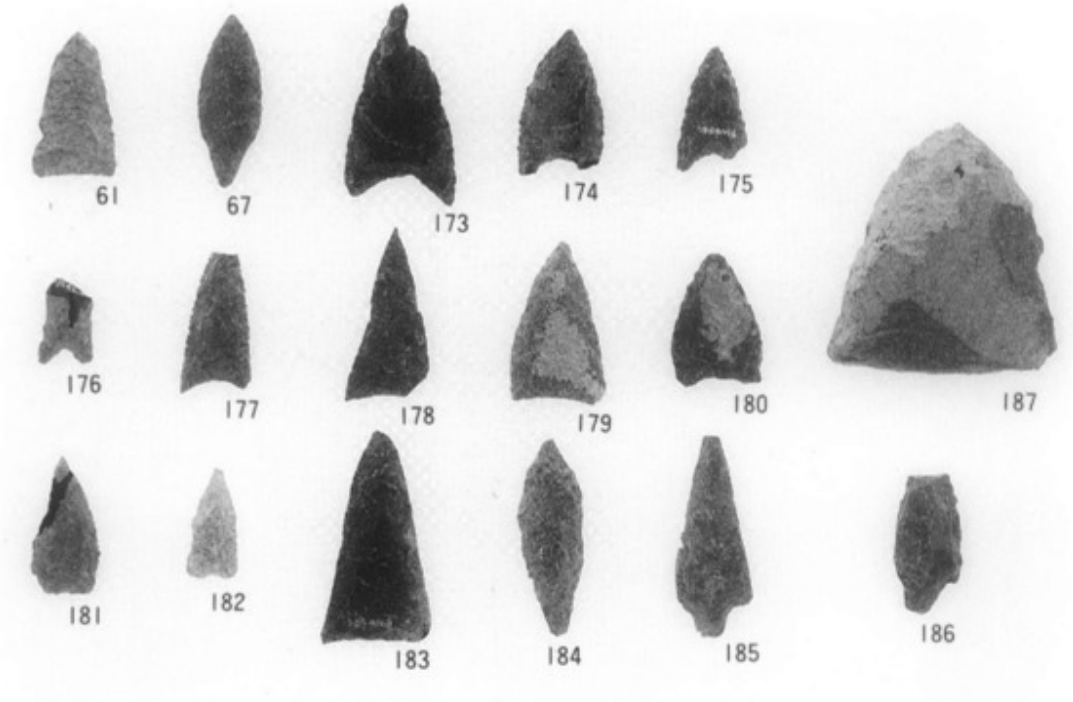


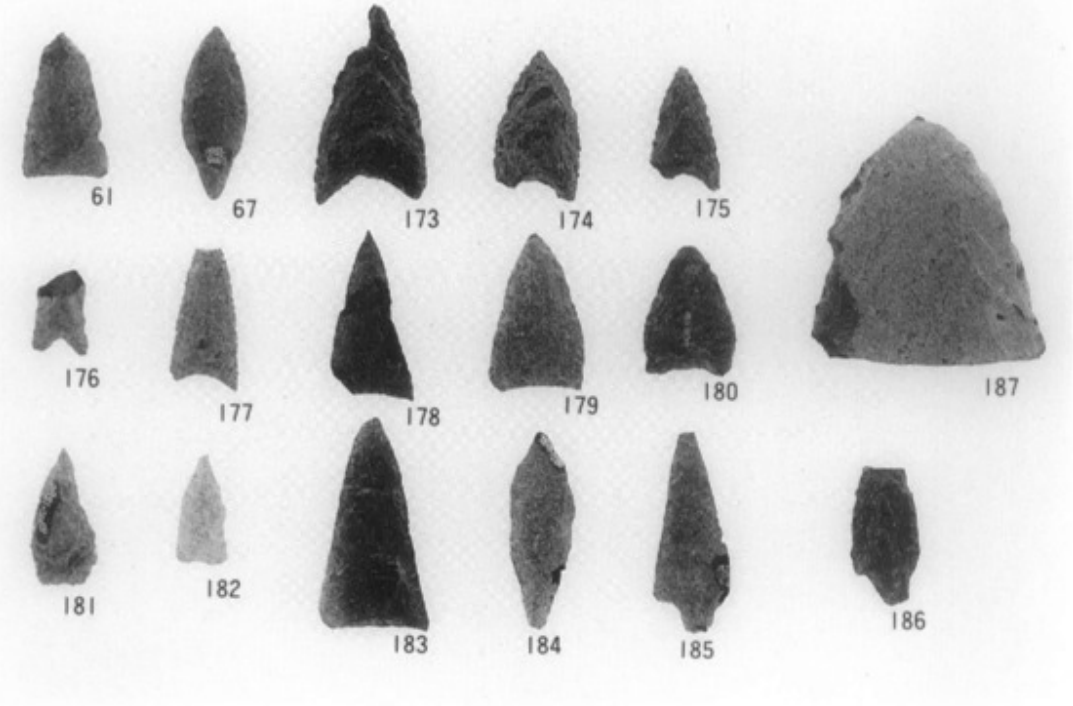
石斧（擦痕）　　叩き石



用途不明

図版24

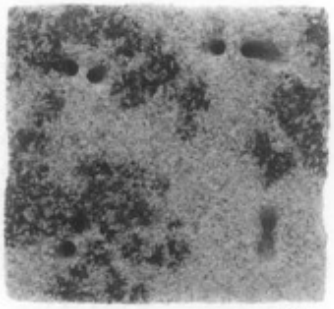

61
67
173
174
175
176
177
178
179
180
187
181
182
183
184
185
186


61
67
173
174
175
176
177
178
179
180
187
181
182
183
184
185
186

石　鏃

71

75



261

262

263

262

263

化石他

報告書抄録

ふりがな	こくぶんじしもひなだいいせき
書名	国分寺下日名代遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第三十一冊
編著者名	古野徳久
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒762-0024　香川県坂出市府中町南谷5001-4　TEL：0877-48-2191
発行機関	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
発行年月日	西暦　1999年3月31日

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数
120	16	65	13	26	56(付図1)	64

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
国分寺下日名代遺跡 (こくぶんじしもひなだいいせき)	香川県綾歌郡国分寺町福家字日名代 (かがわけんあやうたぐん こくぶんじちょうふけ ひなだい)	37383	－	34度 16分 35秒	133度 58分 5秒	19890819 ～ 19900228	11,350	四国横断自動車道建設に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
国分寺下日名代遺跡	田畑？・その他の生産遺跡	弥生時代	ピット，溝跡	弥生土器，石器	包含層内よりアンモナイトの化石出土
		古墳時代～平安時代	溝跡，水田跡？，動物の足跡	土師器，須恵器，硯，石帯，刻書土器？，黒色土器，瓦	
		中世	溝跡	土師器，瓦器	
		近世	ピット，溝跡，溜め池？	国産陶磁器	

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

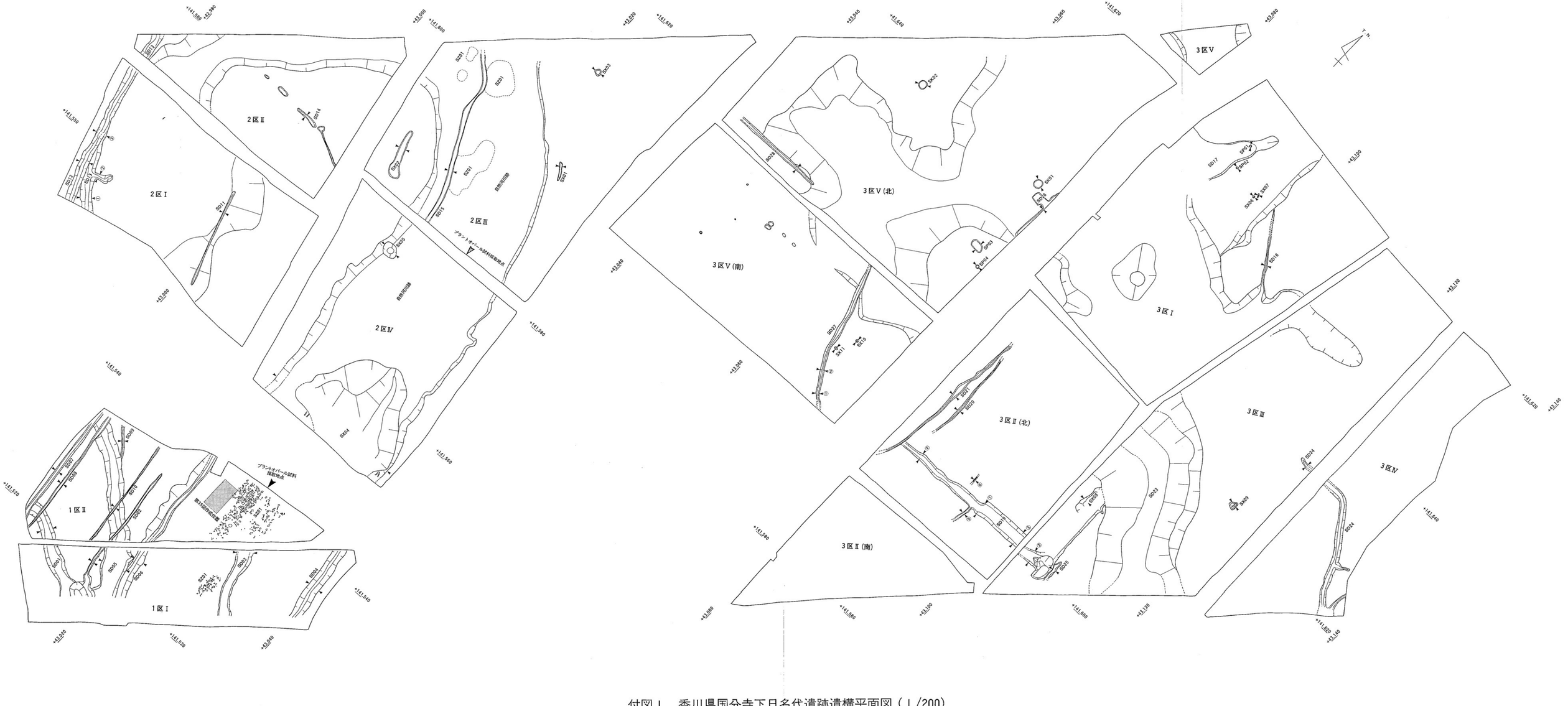
第三十一冊
国分寺下日名代遺跡

平成11年3月31日　発行

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香川県坂出市府中町字南谷5001番の4
電話（0877）48―2191（代表）

発行　香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

印刷　セキ株式会社



付図Ⅰ　香川県国分寺下日名代遺跡遺構平面図（1/200）